

RESEARCH REPORT

No. 39

MUKOGAWA WOMEN'S UNIVERSITY
INSTITUTE FOR EDUCATION

Contents

Factor Analyses of Female Students' Opinions on "Women's Universities" :
In Comparison with Other Surveys

Establishment and Development of KOYUKAI (Student-teacher's Associations)
at Boys' Secondary Schools in the Meiji Era
.....ANDOH, Yoshinori

A Classified Catalogue of Main Books donated
by Professor Emeritus Michiya Shimbori
.....SHIMBORI, Michiya

Achievements of Staffs (2007)

March 2009

武庫川女子大学教育研究所
研究レポート第39号

武庫川女子大学教育研究所

研究レポート

第39号

Research Report, No.39
Mukogawa Women's University
Institute for Education

〈特集〉女子大学に関する調査の比較

「女子大学」に関する意見の因子分析
—女子学生への調査と他大学調査との比較— 安東由則

明治期における中学校校友会の創設と発展の概観 安東由則

新堀通也寄贈図書目録 新堀通也

2007年度 研究員の業績および特別研究の経過報告

二〇〇九年三月

2009年3月

目 次

「女子大学」に関する意見の因子分析

—女子学生への調査と他大学調査との比較— 安 東 由 則

1. はじめに	1
2. 調査の概要	1
3. 分析	2
4. おわりに	25

明治期における中学校校友会の創設と発展の概観

安 東 由 則

1. はじめに	31
2. 研究目的と研究対象	32
3. 高等教育機関における校友会の設立	34
4. 中学校校友会の設立経緯と形態	36
5. まとめと課題	52

新堀通也寄贈図書目録

新 堀 通 也

序文	59
I. 辞典類	61
II. 講座類	64
III. 歴史	77
IV. 思想家全集・研究書	80
V. ルソーとデュルケーム	83
VI. 教育社会学	87
VII. 高等教育の社会学	96
VIII. その他	107

2007年度 研究員の業績および特別研究の経過報告.....111

研究レポート掲載論文総目次（過去10号分）.....116

「女子大学」に関する意見の因子分析 —女子学生への調査と他大学調査との比較—

Factor Analyses of Female Students' Opinions on "Women's Universities" :
In Comparison with Other Surveys

安 東 由 則*

ANDOH, Yoshinori

目次

1. はじめに
2. 調査の概要
3. 分析
 - (1) 武庫川女子大学に入学した理由の検討
 - (2) 「女子大学」に入学した理由
 - (3) 武庫川女子大学と「女子大学の特徴」
 - (4) 武庫川女子大学での「学生生活」
4. おわりに

* 武庫川女子大学教育研究所・研究員、文学部教育学科・准教授

1. はじめに

本論文は、本学4年次生を対象として2006年2月に実施した「武庫川女子大学についての意見調査」の分析である。このアンケート調査については既に『研究レポート』36号にて、調査結果を報告した(安東他 2006)。その報告では、アンケート項目を学科別に単純集計するとともに、自由記述の内容をまとめて示す一次的な分析を行ったのみで、十分な分析ができなかった。よって、本学の教育・支援環境全般を捉え直し、今後への示唆を得るとともに、女子大学としての「よさ」についても詳細に把握するために、さらなる分析を行うこととした。

今回の分析は、以下のような観点から実施する。アンケートの軸をなす4つの項目群、すなわち①「武庫川女子大学に入学した理由」、②「共学ではなく女子大学に入学した理由」、③「女子大学の特性の武庫川女子大学へのあてはまり」、④「武庫川女子大学における大学生活の振り返り」に関してそれぞれ因子分析を実施し、その特徴を詳細に検討する。さらに、「女子大学」に関する他の調査結果との比較・検討を行う。上の①に関しては、本学4年次生の保護者アンケート(2006年9-10月実施)において「子どもの武庫川女子大学への入学理由」を尋ねており、これについても因子分析を実施し、学生の結果と比較する。さらに、①と②については、お茶の水女子大学と奈良女子大学による卒業生調査(お茶の水:2000年12月実施、奈良女子:2000年12月-2001年1月実施)において、類似の質問項目があるので、国立女子大学との比較を試み、その異同を検討していく。そして最後に、④で得られた大学生活の規定要因を独立変数、大学生活の充実度を従属変数とする重回帰分析を行い、その影響要因について分析を行う。

2. 調査の概要

武庫川女子大学の卒業学年を対象とするアンケート調査は、教育研究所の共同研究「女子大学の存立意義に関する研究(2004~2006年度)」の一環として行われたものである。4年間を振り返り、武庫川女子大学での学生生活全般を、さらには女子大学としての武庫川女子大学を評価してもらい、今後の本学のあり方を考える参考とすることを調査の目的とした。

調査結果の詳細については、先に述べた『「女子大学」に関する女子学生の意見調査』(安東他 2006)として『研究レポート』36号、あるいは『「女子大学の存立意義に関する研究」報告書』(友田・安東 2007)において報告している。表1には調査対象者の属性など、調査概要を示しておく。

表 1. 武庫川女子大学調査対象者の属性およびフェイスシートの概要

(単位：%)

所属学科	日本語 日本文学	英語文化	教育	健康・ スポーツ科学	心理・ 社会福祉
	8.4	10.3	17.7	9.7	10.0
	生活環境	食物栄養	情報メディア	音楽	薬学
	5.2	13.1	9.1	3.1	13.1
出身地	兵庫	大阪	他近畿	その他	
	40.6	32.3	10.7	16.4	
通学場所	自宅	本学寮	その他		
	74.4	1.4	24.2		
出身高校設置者	私立	国公立			
	36.8	63.2			
出身高校の形態	本学附属	他女子校	共学	その他	
	18.7	12.5	68.3	0.4	
本学志望順位	第一志望	第二志望	第三志望以下		
	56.2	21.3	22.5		*いずれも合計100%
女子大・共学志望の別	女子大	共学大	どちらでも		
	17.1	34.5	48.3		
大学生活の充実度	充実	まあまあ充実	何とも言えず	あまり充実せず	充実せず
	31.7	50.3	13.1	4.1	0.9

調査対象 2005年度武庫川女子大学4年生(2006年2月6日のガイダンス出席者)

調査期間 2006年2月6～10日

有効回答数 1,356名

3. 分析

以下の分析では、先に挙げた4つの質問項目群ごとに、他調査との比較を交えながら因子分析を中心とする検討を行う。なお、分析にはSPSS14.0Jを使用した。因子分析については、全て主因子法・プロマックス回転法を用いた。

(1) 武庫川女子大学に入学した理由の検討

1) 本学学生へのアンケート

まず、「武庫川女子大学へ入学した理由」について検討する⁽¹⁾。「あなたが『武庫川女子大学』に入学した理由について、あなたの気持ちに近いものを選んで下さい」として、21項目からなる質問に、「かなりあてはまる(5)」～「まったくあてはまらない(1)」の5件法で回答を求めた。全体で因子分析を行った結果、5因子(固有値1.0以上)を得たが、第3因子(Q11、Q16、Q18～20)の解釈が難しく、他因子の負荷量が高い項目も

あったので、4 因子指定として実行した。その結果が表 2 である。第 1 因子は「教育に力を入れていると聞いた」「自分の学びたい学科や専攻がある」「様々な資格や免許を取れる」「就職率がよい」などからなっているので、「教育内容・環境」因子と命名した。次の第 2 因子は「家族にすすめられた」「名前を知られた大学」「阪神間の都市部にある」「伝統がある」からなるので「知名度・伝統」因子、第 3 因子は「附属高校の出身」「得意の科目で受験」「推薦入試があった」などから構成されるので「受験」因子、最後の第 4 因

表 2. 「武庫川女子大学への入学理由」の因子分析結果（全体） 4 因子指定 n = 1297

	教育内容・ 環境	知名度・ 伝統	受験	通学 (経済性)	肯定的 回答の%*
Q 4 教育に力を入れていると聞いたから	0.698	-0.008	0.024	0.077	36.4
Q 2 自分の学びたい学科や専攻があったから	0.666	-0.256	-0.159	-0.086	91.2
Q13 様々な資格や免許を取ることができるから	0.659	-0.106	0.023	-0.052	60.3
Q 3 就職率がよいと聞いたから	0.614	0.056	0.018	-0.065	55.1
Q21 幅広い教養を身につけることができるから	0.591	0.171	0.088	0.127	29.3
Q12 施設や設備がきれいで充実していると思ったから	0.438	0.190	0.046	-0.030	58.0
Q 1 建学の精神に共鳴したから	0.320	0.173	0.160	0.156	6.5
Q19 家族にすすめられたから	-0.242	0.673	0.019	0.074	35.6
Q 7 よく名前を知られている大学だったから	0.229	0.551	-0.077	-0.197	47.9
Q18 阪神間の都市部にあるから	-0.035	0.522	-0.137	0.001	41.8
Q 6 伝統がある大学だったから	0.286	0.470	0.021	-0.035	33.2
Q15 総合的で大きな大学であるから	0.242	0.461	-0.109	-0.005	41.0
Q20 教師にすすめられたから	-0.055	0.398	0.052	0.275	29.1
Q 5 自分の偏差値にあう大学だったから	0.099	0.291	-0.275	-0.050	51.8
Q 9 武庫川女子大学附属高校の出身だから	-0.202	0.191	0.648	-0.162	18.3
Q17 自分が得意の科目で受験することができたから	0.049	0.301	-0.627	0.140	51.0
Q10 出身高校にこの大学への推薦入試があったから	0.044	0.056	0.504	0.138	24.8
Q14 共学大学に合格できなかったから（反転*）	0.279	-0.233	0.446	-0.074	23.9
Q11 有名な先生、学びたい先生がいたから	0.146	0.185	0.276	0.178	4.9
Q16 大学の学生寮があったから	-0.029	0.117	-0.094	0.569	4.1
Q 8 自宅から通学できる距離にあったから	0.038	0.355	0.123	-0.509	55.8

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法（以下同様）

因子相関行列

因子	1	2	3	4
1	1	0.643	0.180	0.089
2	0.643	1	0.301	0.072
3	0.180	0.301	1	0.170
4	0.089	0.072	0.170	1

注：各因子を構成する項目の選定では、因子負荷量0.350以上を基準とした。以下の因子分析も同様である。

子は「学生寮があった」「自宅から通学できる距離にある（－）」2項目からなるので「通学」因子⁽²⁾とそれぞれ命名した。この四つが武庫川女子大学への入学理由を規定する要因である。

上は本学への入学者全体を対象とする分析であるが、附属高校出身者とそれ以外からの入学者とでは、入学理由は同じではないだろう。武庫川学院では、中学から大学までの女子一環教育を掲げており、附属高校卒業生のほとんどが本学へと進学する。附属中学・高校への入学者は、武庫川女子大学への進学を前提として入学をしているのであるから、入学理由は異なると考えられる。そこで、附属高校からの入学者とそれ以外の高校からの入学者に分けて因子分析を行い、得られた因子の比較を行うこととする。附属出身者は全体の18.7%（254名）、それ以外は81.3%（1141名）であった（表1参照）。

まず附属出身者の因子分析から見ていく。分析においては、附属出身者にはあてはまらない質問項目を削除した。すなわち、Q 5「自分の偏差値に合う大学」、Q10「出身高校に推薦入学あり」、Q14「共学大学に合格できなかった」、Q16「大学の学生寮があった」、Q17「自分の得意科目での受験」の5項目を除いた16項目を用いて分析を行った。結果は表3に示すとおりである。

5因子が抽出された。第1因子、第2因子は全体と同じく、それぞれ「教育内容・環境」因子、「知名度・伝統」因子とした。第3因子は、全体では第2因子を構成していたQ19「家族にすすめられた」、Q20「教師にすすめられた」が独立して形成されており、「周囲のすすめ」因子と命名した。次の第4因子はQ11「有名な先生、学びたい先生がいる」、Q 1「建学の精神に共鳴」から成っているが、負荷量はQ11（0.752）がQ 1（0.468）よりかなり大きく、Q 1は第2因子の負荷量も0.384と大きいので、「教員の魅力」因子としておく。第5因子はQ 8「自宅から通学できる距離」、Q18「阪神間の都市部にある」であり「地元・自宅」因子と命名する。

次に、附属以外の高校からの入学者（以下、外部入学者）の因子分析に際しては、Q 9「附属高校の出身であるから」を除いた。その結果が表4である。四つの因子が抽出された。各因子を構成する質問項目は、外部入学者が8割を占める全体での因子分析で示したものとほぼ同じであったので、同じ因子名をつけた。附属高校出身者との比較でも、ともに「教育内容・環境」が第1因子、「知名度・伝統」が第2因子であることに変わりなく、この二つが共通して本学入学理由の核だと言えよう。これに対し、附属の分析から外した質問項目が第3因子を構成し、これを「受験」因子と名付けた。また附属出身者において単独に第4因子「教育の魅力」を構成したQ11「有名な先生、学びたい先生がいる」は、外部出身者ではどの因子においても負荷量が十分に大きくなく、Q 1「建学の精神に共鳴」についても同様の傾向が認められる。これら二つの項目は、附属以外の外部出身者において、入学理由としての位置づけは大きくなく、曖昧である。

表3. 附属入学者の「武庫川女子大学への入学理由」の因子分析結果

n = 237

	教育内容・ 教育環境	知名度・ 伝統	周囲の すすめ	教育の 魅力	自宅・ 地元
Q2 自分の学びたい学科や専攻があったから	0.802	-0.055	-0.159	0.060	-0.101
Q13 様々な資格や免許を取ることができるから	0.755	-0.082	0.062	-0.024	-0.002
Q4 教育に力を入れていると聞いたから	0.702	-0.004	-0.103	0.178	0.058
Q3 就職率がよいと聞いたから	0.595	0.177	-0.088	-0.118	0.073
Q21 幅広い教養を身につけることができるから	0.569	0.087	0.315	-0.043	-0.063
Q12 施設や設備がきれいで充実していると思ったから	0.558	0.045	0.051	0.012	0.108
Q7 よく名前を知られている大学だったから	-0.050	0.953	-0.067	-0.007	0.041
Q6 伝統がある大学だったから	0.112	0.676	0.031	0.092	0.023
Q15 総合的で大きな大学であるから	0.260	0.374	0.221	-0.072	-0.033
Q20 教師にすすめられたから	-0.073	-0.137	0.679	0.206	-0.009
Q19 家族にすすめられたから	-0.044	0.137	0.674	-0.121	-0.081
Q11 有名な先生、学びたい先生がいたから	0.105	-0.062	0.027	0.752	-0.009
Q1 建学の精神に共鳴したから	-0.047	0.384	-0.003	0.468	-0.046
Q8 自宅から通学できる距離にあったから	-0.055	0.128	-0.072	0.005	0.742
Q18 阪神間の都市部にあるから	-0.006	-0.108	0.355	0.002	0.497
Q9 武庫川女子大学附属高校の出身だから	0.156	-0.055	-0.147	-0.172	0.209

因子相関行列

因子	1	2	3	4	5
1	1	0.668	0.542	0.389	0.486
2	0.668	1	0.432	0.264	0.430
3	0.542	0.432	1	0.311	0.455
4	0.389	0.264	0.311	1	0.271
5	0.486	0.430	0.455	0.271	1

表4. 外部（附属以外）入学者の「武庫川女子大学への入学理由」の因子分析結果 n = 1059

	教育内容・ 環境	知名度・ 伝統	受験	通学 (経済性)
Q13 様々な資格や免許を取ることができるから	0.752	-0.229	0.079	0.003
Q4 教育に力を入れていると聞いたから	0.644	0.061	-0.036	0.047
Q21 幅広い教養を身につけることができるから	0.642	0.172	-0.016	0.139
Q2 自分の学びたい学科や専攻があったから	0.606	-0.293	0.015	-0.130
Q3 就職率がよいと聞いたから	0.554	0.097	-0.011	-0.068
Q12 施設や設備がきれいで充実していると思ったから	0.469	0.142	0.060	0.011
Q1 建学の精神に共鳴したから	0.340	0.227	-0.128	0.115
Q19 家族にすすめられたから	-0.268	0.675	0.101	0.049
Q7 よく名前を知られている大学だったから	0.045	0.660	-0.011	-0.328
Q6 伝統がある大学だったから	0.160	0.571	-0.053	-0.114
Q20 教師にすすめられたから	-0.108	0.514	-0.079	0.194
Q15 総合的で大きな大学であるから	0.209	0.427	0.132	-0.013
Q18 阪神間の都市部にあるから	0.054	0.360	0.305	0.056
Q11 有名な先生、学びたい先生がいたから	0.202	0.228	-0.140	0.156
Q17 自分が得意の科目で受験することができたから	0.105	0.112	0.564	0.124
Q10 出身高校にこの大学への推薦入試があったから	-0.035	0.270	-0.535	0.067
Q14 共学大学に合格できなかったから（反転*）	0.272	-0.105	-0.381	-0.076
Q5 自分の偏差値にあう大学だったから	0.099	0.158	0.267	-0.038
Q16 大学の学生寮があったから	0.056	0.157	0.137	0.630
Q8 自宅から通学できる距離にあったから	0.084	0.165	0.045	-0.480

因子相関行列

因子	1	2	3	4
1	1	0.670	-0.035	-0.098
2	0.670	1	-0.020	-0.042
3	-0.035	-0.020	1	-0.326
4	-0.098	-0.042	-0.326	1

2) 本学学生保護者へのアンケート

2006年度4年次生の保護者に対して行ったアンケート（2007年1月実施）⁽³⁾では、「お子さまが本学へ入学されたのはなぜだと思われますか」として学生アンケートと同様の20項目を示し、同じく5件法で回答を求めた（詳細は、安東他 2007を参照）。ただし保護者を対象とするので、入試に関する項目を幾つか削除し、代わりに「警備など安全面に力を入れている」、「学生への生活指導が適切に行われている」、「結婚に有利」、「家族・親戚に本学出身者がいる」といった項目を入れるなどした。ここで尋ねているのは、子どもと受験校選びをする中で、娘が受験を決めた理由だと保護者が考えた理由であるが、結果的には、娘が本学を受験し入学してほしいと考えた保護者の思いも含まれる点に留意が必要である。

ここでは娘の出身校の別（附属、附属以外）で対象を分けず、全体での因子分析のみを行った。結果は表5に示すとおりである。

表5. 保護者が考える娘の「武庫川女子大学への入学理由」の因子分析結果 n=647

	教育・指導等の環境	知名度・伝統	経済性・安心等の合理性	附属・同窓
4. 教育に力を入れていると聞いたから	0.867	-0.030	-0.060	-0.051
3. 就職率がよいと聞いたから	0.803	-0.026	-0.178	-0.068
13. さまざまな資格や免許を取得できるから	0.689	-0.093	0.063	-0.072
11. 学生への生活指導が適切に行われていると聞いたから	0.532	0.039	0.232	0.105
2. 本人が入学を希望する大学であったから	0.489	0.095	-0.149	-0.012
12. 施設や設備がきれいだと充実していると思ったから	0.466	0.096	0.067	0.139
8. 幅広い教養を身につけることができると思うから	0.420	0.416	0.092	-0.096
7. 名前を知られている大学だから	-0.106	1.049	-0.130	-0.108
6. 伝統がある大学だから	0.059	0.771	0.049	-0.076
10. 社会一般の評判がよいから	0.235	0.517	0.025	0.051
15. 総合的で大きな大学だから	0.165	0.461	0.005	0.100
14. 入試の難易度が本人の学力に合っていたから	0.136	0.284	-0.036	-0.068
16. 学生寮が完備されているから	-0.121	-0.105	0.767	-0.054
17. 警備など安全に力を入れていると思ったから	0.237	-0.013	0.607	0.023
1. 自宅から通学することができるから（*反転）	-0.112	-0.115	0.592	-0.430
18. 結婚に有利だと思うから	-0.061	0.241	0.452	0.175
19. 情報処理教育に力を入れていると聞いたから	0.100	0.121	0.413	0.133
20. 高等学校の教員にすすめられたから	-0.159	0.038	0.306	0.266
9. 本人が武庫川女子大学附属高校の出身だから	-0.076	-0.209	-0.019	0.710
5. 本人の母親や姉、親戚などに本学の出身者がいるから	-0.032	0.035	0.034	0.347

因子相関行列

因子	1	2	3	4
1	1	0.762	0.508	0.487
2	0.762	1	0.490	0.544
3	0.508	0.490	1	0.328
4	0.487	0.544	0.328	1

4 因子が抽出された。第1因子から順に「教育・指導等の環境」因子、「知名度・伝統」因子、「経済性・安心等の合理性」因子、「附属・同窓」因子と命名した。第1、第2因子はともに学生アンケートの結果と同じ順番、同様の質問項目からなり、入学理由の大きな軸となっている。次の第3因子は新たな因子で、因子負荷量大きい順に、Q16「学生寮の完備」、Q17「警備など安全面に力を入れている」、Q1「自宅からの通学」、Q18「結婚に有利」といった雑多な項目からなる。命名は難しいが、「経済性・安心等の合理性」としてみた。これらの項に「あてはまる」と答えた比率は少ない。「警備などの安全面の配慮」の項目はむしろ保護者としての意識を重視した項目であるが、「かなりあてはまる」5.5%、「ややあてはまる」21.2%の比率であった。最後の第4因子は、「娘が附属出身」と「母や親戚などに本学出身者がいる」の2項目からなる「附属・同窓」因子である。

3) お茶の水女子大学調査・奈良女子大学調査との比較

お茶の水女子大学と奈良女子大学は2000年～2001年に、「国立女子大学の将来像に関する調査」を卒業生・修了生に対してそれぞれ実施した。お茶の水女子大学は3,237名（学部名、院名）、奈良女子大学は3,235（学部2,197名、院1,038名）名を有効回答とする大規模な調査である。これらの調査は、各大学の受験理由、「女子大学」の受験理由を尋ねており、本学アンケート調査はそれらとの比較を念頭に、その質問項目を参考として質問紙を作成した。しかしながら、本学と国立2女子大学との調査には少なからず違いもある。上記の調査は2000年の実施で、戦後の卒業生を対象として幅広い年齢層を対象にしているのに対し、本学調査は5年後の2006年に実施したもので、卒業年次生のみを対象としている。よって、対象者の年代に差異があり、単純には比較できないのであるが、国立女子大学と対比することで、私学である本学の特徴、女子大学としての特性やよさを検討することができると考えた。（2国立女子大学調査の大学院修了者を除き、学部卒業生のみを比較対象とした。）

それぞれのアンケートでは各大学の受験理由について尋ねているが、まずここでは、これらの項目の因子分析結果を示している奈良女子大学調査から概観していく。先にも述べたように、このサンプルは1953年以降2000年までの新制の学部卒業生という幅広い世代を対象としており、本学の4年次生のみを対象としたものとは異なる点に注意を要する。その因子分析結果は表6に示す通りである（奈良女子大学の因子分析は、因子抽出法：主因子法、回転法：ヴァリマックス回転による）。

6つの因子が抽出され、命名されている。第1因子は「国立女子大学の教育実績」と命名された因子で、「国立女子大学だから」「女子教育に実績がある」「伝統と歴史」「奈良女子大学への憧れ」などの項目からなる。第2因子は「大学院があるから」「キャンパスの雰囲気」「女性学関連の授業」の項目からなる「教育環境充実」因子、第3因子は「教師

表6. 「奈良女子大学を受験した理由」の因子分析結果*

	国立女子大 の教育実績	教育環境 の充実	社会的 評価	居住環境	就職志向	学力関連	1991~2000 コホート(%)
国立女子大学だから	0.752	-0.023	0.116	0.077	0.027	0.025	43.8
女子教育に実績があるから	0.747	0.154	0.188	0.077	0.159	-0.076	31.7
伝統と歴史があるから	0.670	0.232	0.047	0.082	0.192	-0.022	72.5
奈良女へのあこがれ	0.659	0.371	-0.033	0.122	0.074	0.054	46.3
国立は社会的評価が高い	0.598	-0.142	0.220	-0.089	0.128	0.335	71.4
教育環境充実	0.473	0.471	0.029	0.046	0.301	-0.057	39.3
教養を身につけるのに適当	0.455	0.316	0.291	0.028	-0.102	0.072	38.6
大学院があるから	-0.068	0.646	0.253	-0.172	-0.005	0.110	11.8
キャンパスの雰囲気がよい	0.372	0.633	0.029	0.034	0.009	0.148	39.9
女性学・ジェンダー関連の授業が充実	0.066	0.603	0.454	0.015	-0.011	-0.035	4.6
少数者教育	0.345	0.520	-0.049	0.058	0.283	-0.098	46.5
教師のすすめ	0.021	0.100	0.703	0.135	0.182	0.019	30.3
家族のすすめ	0.169	0.100	0.637	-0.082	-0.025	0.073	43.0
結婚に有利	0.384	0.068	0.486	-0.022	0.031	0.103	9.6
自宅から通える	0.009	0.075	0.025	-0.814	0.070	0.028	33.2
学寮がある	0.145	0.007	0.124	0.794	0.184	-0.041	20.3
歴史的なまち、奈良にある	0.352	0.432	-0.191	0.473	0.037	0.077	60.7
教師・教育関係職業志望	0.244	0.051	0.184	0.117	0.632	-0.213	18.8
就職に有利	0.335	0.066	0.281	-0.081	0.573	0.055	27.3
希望する専攻分野がある	-0.015	0.231	-0.257	-0.107	0.484	0.323	87.0
学費が安い	-0.036	-0.079	-0.045	0.252	0.447	0.310	83.2
自分の学力に合っている	0.058	-0.028	0.027	0.051	0.024	0.755	83.9
受験科目が得意科目	0.046	0.158	0.134	-0.096	0.013	0.695	59.8
固有値	3.563	2.317	1.848	1.729	1.504	1.502	
寄与率 (%)	15.491	10.075	8.033	7.516	6.541	6.530	
累積 (%)	15.491	25.567	33.599	41.115	47.656	54.186	

奈良女子大学 2003 『奈良女子大学卒業生・大学院修了生のライフコースと国立女子大学の将来像に関する調査結果報告書』 pp.16-17及び pp.247-249から作成

* 因子分析（主因子法・ヴァリマックス回転）は学部卒業生全体の結果。％は1991-2000年コホートのみのもの（「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の合計）。

のすすめ」「家族のすすめ」からなる「社会的評価」因子である。続いて、「自宅から通える（-）」「学寮がある」の「居住」因子が第4因子、「教職関係職業志望」「就職に有利」「希望する専攻」からなる「就職志向」因子が第5因子、最後に「自分の学力にあっている」「受験科目が得意科目」から構成される「学力関連」因子が第6因子となっている。

お茶の水女子大学調査の分析では、因子分析結果そのものは示されていないが、因子分析の結果から6因子（「名声・伝統」「研究環境」「教育環境」「受験学力」「周囲のすす

め]「経済合理性」と、それに依らず採用したとする「都心にある」「教職志望」の2因子を取り入れ、8因子に分類をしている(表8参照)。因子の命名こそ異なるものの、双方の大学における因子は似通っている(ただ、お茶の水の場合、因子ごとの項目が全ては掲載されていないため、比較できない部分もある)。「国立女子大の教育実績―名声伝統」、「教育環境充実―(研究環境+教育環境)」、「社会的評価―周囲のすすめ」、「居住環境―経済的合理性」、「学力関連―受験学力」(以上、奈良女子―お茶の水女子の順)などである。奈良女子大学で「居住環境」と命名された因子は「歴史的なまち奈良にある」との質問項目が入っていることによるものであろうが、これは他の因子の負荷量も多く、不安定なので、これを除けばお茶の水と同じく「経済合理性」ということもできる。強いて両校の違いを挙げるならば、奈良女子大で「教育環境の充実」と一つの因子であったものが、お茶の水女子大では「研究環境」と「教育環境」に分かれる点である。いずれにせよ、ともに「国立女子大学としての伝統や名声」、「教育・研究環境の充実」、「周囲からの社会的評価」といったものが受験理由の大きな柱となっており、これに「受験学力」や「経済合理性」などの要因が加わる構造である。

以上の因子分析結果は、1953年以降の学部卒業生全てを対象としたものである。4年次生のみを対象とする武庫川女子大学の結果と近い条件で比較をするため、国立女子大学の1991-2000年コホートのみに対象を絞り、検討を行う。因子分析により各質問項目を分類し、「かなりあてはまる」「ややあてはまる」と回答した合計%を示したものが表7～9である。お茶の水女子大学については、項目によって因子への分類がされていないので、そのような項目は網掛けで下位に並べた(「教養を身につけるのに適当」については、筆者の判断で「教育環境」に入れた)。

「教育環境」、「知名度・伝統」、「受験学力」の三つは、受験理由を構成する因子として共通するものである。国立女子大では、「国立女子大学の教育実績」が一番大きな因子で、それを構成する「伝統と歴史がある」は1991-2000年コホートでそれぞれ72.5%、76.1%(奈良女―お茶の水の順、以下同様)であり、全体の80%台よりは低くなっているものの高い数値を示す。さらに「国立大学は社会的評価が高い」が71.4%と64.6%、「各女子大への憧れ」46.3%、50.5%などで肯定的回答が多い。これに対し、武庫川女子大学の「知名度・伝統」は第2因子で、その中の項目「よく名前を知られた大学」47.9%、「伝統のある大学」33.2%で、女子高等師範の伝統をもつ両女子大学の肯定比率とは差がある。本学では「教育内容・環境」因子が最も大きく、学びたい学科の他、「資格や免許の取得」60.3%、「施設・設備の充実」58.0%、「就職率がよい」55.1%などの項目が受験理由として評価されている。この他、国立女子大では「周囲のすすめ」「社会的評価」が単独因子として抽出されたのに対し、本学ではそれらを構成する項目は分散し、因子としては抽出されなかった点に違いが認められる。

表7. 奈良女子大学を受験した理由の肯定的回答比率 (%)

		全体	1991～2000年 コホート
国立女子 大学の 教育実績	国立女子大学だから	54.8	43.8
	女子教育に実績があるから	49.9	31.7
	伝統と歴史があるから	83.6	72.5
	奈良女へのあこがれ	53.1	46.3
	国立は社会的評価が高い	77.1	71.4
	教育環境充実	50.6	39.3
	教養を身につけるのに適当	46.9	38.6
教育環境 の充実	大学院があるから	6.2	11.8
	キャンパスの雰囲気がよい	35.4	39.9
	女性学・ジェンダー関連の授業が充実	3.0	4.6
	少人数教育	51.5	46.5
社会的 評価	教師のすすめ	37.7	30.3
	家族のすすめ	46.0	43.0
	結婚に有利	10.5	9.6
居住環境	自宅から通える	29.8	33.2
	学寮がある	36.3	20.3
	歴史的なまち、奈良にある	65.1	60.7
就職志向	教師・教育関係職業志望	40.2	18.8
	就職に有利	35.8	27.3
	希望する専攻分野がある	81.8	87.0
	学費が安い	86.8	83.2
学力関連	自分の学力に合っている	83.3	83.9
	受験科目が得意科目	51.9	59.8

奈良女子大学 2003『報告書』pp.247-249

*表7～9のいずれも、「かなりあてはまる」「ややあてはまる」と答えた者の割合

表8. お茶の水女子大学を受験した理由の肯定的回答比率 (%)

		全体	1991～2000年 コホート
名声・ 伝統	伝統と歴史がある	81.6	76.1
	国立女子大学だから	45.2	36.8
	国立大学は社会的評価が高いから	74.1	64.6
	女子教育に実績がある大学だから	50.9	41.6
	「お茶大」という名前に憧れていたから	46.8	50.5
研究 環境	大学院のある大学だから	9.9	17.6
	女性学やジェンダー関連授業が充実している	5.1	9.3
	ジェンダー研究センターがあるから	1.5	2.8
教育 環境	少人数教育	70.3	73.3
	教育環境が充実しているから	61.4	54.3
	キャンパスの雰囲気がよかったから	31.3	34.2
	教養を身につけるのに適当と思ったから	46.0	50.5
受験 学力	自分の学力にあっていたから	78.1	77.2
	受験科目が得意科目であったから	57.5	63.5
周囲の すすめ	家族にすすめられたから	41.9	42.0
	教師にすすめられたから	34.0	27.8
経済 合理性	学費が安いから	87.9	86.0
	自宅から通えるから	45.8	40.2
	学寮があるから	21.9	15.6
都心	東京の都心部にあるから	60.5	65.6
教職	教師や教育関係の職業を希望したから	32.3	22.8
	(希望する専攻分野があったから)	83.2	87.3
	(就職に有利だから)	39.1	36.0
	(結婚に有利だから)	9.9	9.2

お茶の水女子大学 2001『報告書』p.26及び pp.275-277.

表9. 武庫川女子大学を受験した理由の肯定比率 (％)

教育内容・ 環境	Q4 教育に力を入れていると聞いたから	36.4
	Q2 自分の学びたい学科や専攻があったから	91.2
	Q13 様々な資格や免許を取ることができるから	60.3
	Q3 就職率がよいと聞いたから	55.1
	Q21 幅広い教養を身につけることができるから	29.3
	Q12 施設や設備がきれいで充実していると思ったから	58.0
知名度・ 伝統	Q1 建学の精神に共鳴したから	6.5
	Q19 家族にすすめられたから	35.6
	Q7 よく名前を知られている大学だったから	47.9
	Q18 阪神間の都市部にあるから	41.8
	Q6 伝統がある大学だったから	33.2
	Q15 総合的で大きな大学であるから	41.0
受験	Q20 教師にすすめられたから	29.1
	Q5 自分の偏差値にあう大学だったから	51.8
	Q9 武庫川女子大学附属高校の出身だから	18.3
	Q17 自分が得意の科目で受験することができたから (-)	51.0
	Q10 出身高校にこの大学への推薦入試があったから	24.8
	Q14 共学大学に合格できなかったから (反転*)	23.9
通学 (経済性)	Q11 有名な先生、学びたい先生がいたから	4.9
	Q16 大学の学生寮があったから	4.1
	Q8 自宅から通学できる距離にあったから (-)	55.8

(-)：因子分析で-符号となった項目

(反転*)：因子分析では反転した項目。％は反転させていないもの

(2) 「女子大学」に入学した理由

二つ目の軸は、「あなたが共学大学ではなく女子大学に入学した理由について、あなたの気持ちに近いものを選んで下さい」として、伝統や特色を背負った固有名詞の大学ではなく、「女子大学」への入学理由を尋ねた。この質問項目についても国立2女子大学のアンケート項目（但し、受験理由の問い）と同様のものを採用しているため、3大学の比較を通して、女子大学への受験・入学を規定する要因の検討を行う。

1) 武庫川女子大学調査

まず本学調査データを、全体と附属出身者、外部（附属以外）出身者に分けて因子分析を行った。その結果が表10～12である。全体では3因子、附属校のみが2因子、外部校では4因子に分類された。なお、附属校のみの分析では、Q2「共学高校だったので女子大へ」とQ14「共学より女子大の方が合格しやすい」の2項目は該当しないので、これらを除外した。

全体では、3因子構造となった（表10）。半分以上の項目が含まれる第1因子は「女性だけの方が穏やかで落ち着ける」、「女性だけの方が勉強に専念できる」、「女性らしさや女性としての適性の獲得」、「男性に頼らない独立心を養う」、「同性の友人を得やすい」、「男性が苦手」などからなるので「女性だけの環境」因子と命名した。第2因子は「高校の先生や先輩のすすめ」、「家族などのすすめ」、「女子大の方が周囲のイメージがよい」、「女子大の方が合格しやすかった」の4項目から構成されるので「周囲のすすめ・イメージ」と

し、第3因子は「女子大にしかない学科・専攻」と「就職に有利」なので「女子大の有利さ」と名付ける。

該当しない2質問項目を除いた附属のみの分析では、2因子構造となった(表11)。全体の第2因子を構成した「高校の先生や先輩からのすすめ」と「家族や親戚からのすすめ」が独立して附属の第2因子を形成し、全体の第1因子と第3因子項目がまとまって大きな第1因子となった。第1因子を「女子のみの環境」、第2因子を「周囲のすすめ」と命名した。

次に外部出身者の分析では、最も多い4つの因子が抽出された(表12)。他と同じく「女性だけの方が穏やかで落ち着ける」「勉強に専念できる」などからなる第1因子は「女子のみの環境」である。第2因子は全体の第2因子と同じ項目からなるので「周囲のすすめ・イメージ」、第3因子は「女性として学びたい教育内容の提供」の1項目のみから構成される新たな因子であり、「女性としての教育内容」と名付ける。第4因子は、全体の

表10. 「女子大学への入学理由」の因子分析結果(全体) n = 1280

	女性のみ の環境	周囲の勧め・ イメージ	女子大の 有利さ
Q7 女性だけの方が穏やかで落ち着けるから	0.982	-0.075	-0.160
Q1 女性だけの方が勉強に専念できるから	0.818	-0.004	-0.107
Q8 女性らしさや女性としての適性を身につけるのに適している	0.775	-0.017	0.084
Q9 男性に頼らない独立心を養いやすいから	0.709	-0.002	0.078
Q11 同性の友人を得やすいから	0.614	0.013	-0.001
Q16 男性が苦手だったから	0.517	0.167	-0.092
Q2 共学の高校だったので女子大に行ってみたかったから	0.472	0.026	-0.023
Q10 女性として学びたい教育内容が提供されているから	0.454	-0.130	0.440
Q3 女子高校だったので女子大に行きたかったから	0.392	0.148	0.109
Q13 高校の先生や先輩に女子大の受験をすすめられたから	-0.005	0.809	-0.137
Q12 家族や親戚に女子大の受験をすすめられたから	0.023	0.785	-0.119
Q15 女子大へ入った方が周囲からよいイメージで見られるから	0.144	0.589	0.103
Q14 共学大より女子大の方が合格しやすかったから	-0.088	0.497	0.073
Q6 女子大を卒業した方が結婚にプラスになるから	0.203	0.336	0.292
Q4 女子大にしかない学科や専攻があったから	-0.153	-0.105	0.789
Q5 女子大の方が就職する際に有利だから	0.121	0.191	0.517

因子相関行列

因子	1	2	3
1	1	0.686	0.715
2	0.686	1	0.565
3	0.715	0.565	1

表11. 附属校出身者の「女子大学への入学理由」の因子分析結果 n = 236

	女性のみ の環境	周囲の すすめ
Q 8 女性らしさや女性としての適性を身につけるのに適している	0.824	-0.037
Q 9 男性に頼らない独立心を養いやすいから	0.765	-0.055
Q 4 女子大にしかない学科や専攻があったから	0.764	-0.059
Q 5 女子大の方が就職する際に有利だから	0.763	-0.019
Q 7 女性だけの方が穏やかで落ち着けるから	0.752	-0.038
Q 3 女子高校だったので女子大に行きたかったから	0.739	-0.029
Q10 女性として学びたい教育内容が提供されているから	0.713	0.078
Q 1 女性だけの方が勉強に専念できるから	0.691	0.087
Q 6 女子大を卒業した方が結婚にプラスになるから	0.665	0.055
Q11 同性の友人を得やすいから	0.484	0.150
Q15 女子大へ入った方が周囲からよいイメージで見られるから	0.436	0.346
Q16 男性が苦手だったから	0.400	0.053
Q13 高校の先生や先輩に女子大の受験をすすめられたから	0.020	0.832
Q12 家族や親戚に女子大の受験をすすめられたから	-0.071	0.820

因子相関行列

因子	1	2
1	1	0.598
2	0.598	1

表12. 外部校出身者の「女子大学への入学理由」の因子分析結果 n = 1044

	女性のみ の環境	周囲の勧め・ イメージ	女性として の教育内容	女子大の 有利さ
Q 7 女性だけの方が穏やかで落ち着けるから	0.895	-0.079	-0.002	-0.023
Q 1 女性だけの方が勉強に専念できるから	0.810	-0.105	-0.065	0.055
Q 2 共学の高校だったので女子大に行ってみたかったから	0.640	-0.059	-0.070	0.039
Q 8 女性らしさや女性としての適性を身につけるのに適している	0.593	0.067	0.266	0.009
Q16 男性が苦手だったから	0.571	0.040	-0.169	0.177
Q 9 男性に頼らない独立心を養いやすいから	0.509	0.059	0.222	0.082
Q11 同性の友人を得やすいから	0.492	0.127	0.284	-0.202
Q13 高校の先生や先輩に女子大の受験をすすめられたから	-0.069	0.834	-0.053	-0.052
Q12 家族や親戚に女子大の受験をすすめられたから	-0.021	0.823	-0.016	-0.066
Q14 共学大より女子大の方が合格しやすかったから	-0.090	0.459	0.030	0.106
Q15 女子大へ入った方が周囲からよいイメージで見られるから	0.136	0.440	-0.002	0.286
Q10 女性として学びたい教育内容が提供されているから	0.008	-0.011	0.930	0.089
Q 6 女子大を卒業した方が結婚にプラスになるから	0.156	0.143	-0.007	0.576
Q 5 女子大の方が就職する際に有利だから	0.072	0.061	0.189	0.534
Q 4 女子大にしかない学科や専攻があったから	-0.223	-0.141	0.414	0.477
Q 3 女子高校だったので女子大に行きたかったから	0.277	-0.022	-0.086	0.449

因子相関行列

因子	1	2	3	4
1	1	0.656	0.585	0.633
2	0.656	1	0.394	0.586
3	0.585	0.394	1	0.353
4	0.633	0.586	0.353	1

第3因子を構成する「就職に有利」「女子大にしかない学科・専攻」に「結婚にプラス」「女子校だったので女子大に」が加わったもので、同じく「女子大の有利さ」とした。

2) お茶の水女子大学調査・奈良女子大学調査との比較

「女子大学の受験理由」についても、お茶の水、奈良女子両調査との比較検討を行う。

お茶の水調査では、因子分析の結果自体は掲載されていないが、因子に基づいた分類がなされている。奈良女子調査では因子分析結果は示されていないが、質問項目はお茶の水女子大学と同じであるので、便宜的にお茶の水の因子分類を用いて示した。本学調査（女子大への入学理由）では、全体の因子分析による分類を用いる。

因子分析に基づいて質問項目を分類し、肯定比率を示したものが表13～15である。質問項目から分かるように、国立女子大学調査では1953年以降の卒業生全てを対象としているので、「家族が女子大学進学しか許さなかった」「女性は女子大に進学するのが当たり前」といったかなり昔の意識を反映した項目が取り入れられているが、これらの項目は本学の調査にはない。本学調査では「家族や親戚に女子大受験をすすめられた」を入れている。逆に、「男性が苦手だったから」「周囲からよいイメージでみられる」「高校の先生や先輩にすすめられた」の項目は本学調査のみの項目である。これらを除く約10項目は、3大学でほぼ対応している。

まず、お茶の水調査の因子分析による分類を見ると、「女性のみの環境」「学問環境」「戦略a（男性と競合しない女子大の優位性）」「戦略b（別学である女子大の優位性）」「時代的要因」の5因子が抽出されている。本学の結果と同じく、「女性だけの方が勉強に専念できる」「女性だけの方が穏やかで落ち着ける」「独立心を得やすい」などの項目からなる「女性のみの環境」因子が確認できる。本学調査では、お茶の水調査では分類されていない「共学校だったので女子大へ」「女子校出身なので女子大へ」もこの因子に入った。他に一致する因子は見られず、お茶の水調査の「学問環境」「戦略a」「戦略b」にある項目は、本学の分類では分散している。本学の第2因子「周囲のすすめ・イメージ」は、主として本学独自の質問項目からなるものである。

次に、項目ごとに肯定的回答比率（「かなりあてはまる」+「ややあてはまる」）を比較する。まず同じ質問項目で、2国立女子大学の1991-2000年コホートを比べると、それほど大きな差異はないが、総じてお茶の水の方が高い割合になっている。中でも「女性のみの環境」因子の項目でその傾向は強い。具体的には「男性に頼らない独立心」で9.4%、「女性だけの方が穏やか」で5.5%、「女性だけの方が勉強に専念できる」で4.7%、奈良女子大より高いという結果であった。

では、本学と国立大（1991-2000年コホート）との比較ではどうか。大きな差が見られないのは、「同性の友人を得やすい」（お茶女34.4%、奈良女32.7%、武庫女33.0% - 以下、

表13. 女子大学を受験した理由の肯定回答比率（お茶の水女子大学）（％）

		全体	1991～2000年 コホート
女性 のみの 環境	女性だけの方が勉強に専念できる	26.2	23.0
	女性だけの方が穏やかで落ち着ける	34.6	35.9
	男性に頼らない独立心を養いやすい	32.1	37.1
	同性の友人を得やすい	32.4	34.4
学問 環境	その分野を学ぶには女子大が適していた	21.3	19.7
	女性学の研究や学習にむいている	9.4	10.6
戦略 a	女子大は女性の就職に有利だ	14.5	8.3
	女子大の方が合格しやすい	27.1	19.2
戦略 b	女子大を卒業すると結婚にプラスだ	5.0	4.5
	女性らしさや適性を身につけるのに適している	10.9	13.1
	異性の友人を得やすい	1.8	2.6
時代的 要因	家族が女子大進学しか許さなかった	8.6	1.7
	女性は女子大に進学するのが当たり前	5.5	-
	共学出身なので女子大に行ってみたかった	18.5	24.0
	女子校出身なので女子大に行きたかった	6.4	5.2

5件法のうち、「かなりてはまる」「ややあてはまる」と回答した者の割合（以下同様）
お茶の水女子大学 2001『報告書』p.28及び pp.277-279.

戦略 a：男性と競合しない女子大の優位性を認識したアフーマティブ・アクション的意味合い重視
戦略 b：別学であるという点に女子大の優位性を認めた婚姻戦略的意味合いを重視

表14. 「女子大学を受験した理由」の肯定回答比率（奈良女子大学）（％）

		全体	1991～2000年 コホート
女性 のみの 環境	女性だけの方が勉強に専念できる	21.5	18.3
	女性だけの方が穏やかで落ち着ける	31.9	30.4
	男性に頼らない独立心を養いやすい	30.0	27.7
	同性の友人を得やすい	28.5	32.7
学問 環境	希望分野は女子大が適していた	22.7	18.8
	女性学の研究や学習に向いている	7.6	7.9
戦略 a	女子大は女性の就職に有利	13.7	11.3
	女子大の方が合格しやすい	24.2	16.4
戦略 b	女子大の卒業は結婚にプラス	4.2	3.9
	女性らしさを身につけるのに適している	6.5	8.1
	異性の友人を得やすい	1.0	2.4
時代的 要因	家族が女子大進学しか許さない	11.0	3.4
	女性は女子大進学が当たり前だった	5.0	-
	共学校だったので女子大に	18.2	19.9
	女子校だったので女子大に	2.3	2.4

奈良女子大学 2003『報告書』pp.249-251

（注：この分類は便宜的にお茶の水の結果を使ったもので、奈良女子大の分析結果ではない）

表15. 「女子大学への入学理由」の肯定回答比率（武庫川女子大学） (%)

女子大の 教育環境	Q7 女性だけの方が穏やかで落ち着けるから	15.8
	Q1 女性だけの方が勉強に専念できるから	9.0
	Q8 女性らしさや女性としての適性を身につけるのに適している	9.4
	Q9 男性に頼らない独立心を養いやすいから	6.9
	Q11 同性の友人を得やすいから	33.0
	Q16 男性が苦手だったから	3.7
	Q2 共学の高校だったので女子大に行ってみたかったから	6.4
	Q10 女性として学びたい教育内容が提供されているから	17.6
	Q3 女子高校だったので女子大に行きたかったから	5.8
周囲の 勧め イメージ	Q13 高校の先生や先輩に女子大の受験をすすめられたから	11.4
	Q12 家族や親戚に女子大の受験をすすめられたから	13.8
	Q15 女子大へ入った方が周囲からよいイメージで見られるから	4.4
	Q14 共学大より女子大の方が合格しやすかったから	15.9
	Q6 女子大を卒業した方が結婚にプラスになるから	1.8
女子大 有利さ	Q4 女子大にしかない学科や専攻があったから	20.7
	Q5 女子大の方が就職する際に有利だから	6.0

この順、「女子大にしかない学科・専攻（その分野を学ぶに女子大が適していた）」（19.7%、18.8%、20.7%）、「女子大の方が合格しやすかった」（19.2%、16.4%、15.9%）などである（「女子大の方が合格しやすい」で、武庫川調査で附属出身者を除いた場合、その比率は上がる）。逆に本学と国立大で差がみられた項目は、「勉強に専念できる」（23.0%、18.3%、9.0%）、「穏やかで落ち着ける」（35.9%、30.4%、15.8%）、「男性に頼らない独立心」（37.1%、27.7%、6.9%）であり、国立2大学の方がかなり高い比率になっている。特に「男性に頼らない独立心」では本学とお茶の水、奈良女子との差はそれぞれ30.2、20.8ポイントであり、「勉強に専念できる」の項目肯定比率はともに本学の倍以上である。

その他の項目では、「就職に有利」が8.3%、11.3%、6.0%と、国立2大学の方が高く、「結婚にプラス」との回答も4.5%、3.9%、1.8%で、国立大学がわずかではあるが上回っている。もっとも、国立2女子大学との比較の場合、「受験した理由」を尋ねてはいるものの、国立2大学の対象は卒業生であり、既婚者もいること、あるいは本学調査の対象者と10歳前後の年代差があり、そうしたバイアスがかかっていることも考慮する必要がある。

(3) 武庫川女子大学と「女子大学の特徴」

これまで、具体的な個々の女子大学、あるいは「女子大学」一般への入学（あるいは受

験)の理由といった「女子大学」を選ぶに至る input 要因を尋ねてきたが、ここからは武庫川女子大学における学生生活を通して得られたものについて検討する。本節では、一般的に「女子大学のよさや特性」として指摘されている意見を挙げ、それらが武庫川女子大学での学生生活に当てはまるかどうかを4件法で尋ねた⁽⁴⁾。これは武庫川女子大学の「女子大学」としての評価を在学学生に問うものであり、「女子大学の特徴」とされるものが武庫川女子大学にどれほど当てはまるのかを確かめるものである。

これまでと同じく全体、附属出身者、外部(附属以外)出身者ごとに因子分析を実施したが、全体と外部出身者はそれぞれ2因子構造で、項目構成およびその負荷量の順位はほとんど変わらなかったため、ここでは外部出身者の結果のみを取り上げる。附属出身者の因子分析結果は3因子となった。それぞれ、表16と表17に示している。

詳しくみていくと、外部出身者(と全体)では、「自らの能力に自信・責任感のある女性育成」「自らの創意工夫で活動の計画や遂行」「指導的立場に立つ女性育成」といった女子大学の肯定的な側面からなる「女子大の長所」因子と、「活気のない大学になる」「経済や政治への関心が薄くなる」「女子大は時代に逆行している」など「女子大の短所」因子に二分され、因子間の相関も低い。

これに対し、附属出身者では3因子を抽出した。この第2因子は外部出身者の第2因子と同じ項目からなるもので、「女子大の短所」因子である。両者の違いは、外部(と全体)の第1因子構成項目が、附属では第1因子と第3因子に分かれた点である。附属の第1因子は、先の外部の第1因子(「女子大の長所」)項目の中で上位にある「自らの能力に自信・責任感のある女性育成」「自らの創意工夫で活動の計画や遂行」からなるので「女性の主体性発揮」と名付け、第3因子は「女子学生に対する働きかけが熱心」「目標となる卒業生が多い」「女性らしさが引き出される」「女性の立場からの学問」の項目から構成されているので、「周囲からの支援・刺激」と命名した。附属出身者においては、女子大学の長所とも言えるべきものが、二つに分かれて認識されている点が興味深い。

表16. 「武庫川女子大学における『女子大の特徴』の当てはまり」についての
因子分析結果（外部出身者） n=1062

	女子大の 長所	女子大の 短所
Q 3 自分の能力に自信を持ち責任感のある女性を育てることができる	0.856	0.029
Q 2 女性自らの創意や工夫で色々な活動の計画や遂行ができる	0.820	0.035
Q 4 指導的立場に立つ女性を育てることができる	0.794	0.028
Q 1 あらゆる役割を女性が引き受けることができる	0.719	-0.002
Q 6 女性の立場から学問ができる	0.691	-0.042
Q 9 女子学生に対する教員の教育的な働きかけが熱心である	0.601	-0.047
Q 5 男性に煩わされることなく学ぶことができる	0.598	-0.007
Q 8 目標となる卒業生が多いので今後の進路の参考となる	0.566	-0.012
Q12 女性らしさが引き出される	0.519	0.012
Q10 女子のみでは活気のない大学になる（*）	0.156	0.694
Q11 経済や政治への関心が薄くなる（*）	-0.100	0.629
Q15 女子大があることは時代に逆行している（*）	0.139	0.605
Q13 女性らしさが失われる（*）	0.030	0.569
Q14 学問的な訓練において厳しさに欠ける（*）	-0.138	0.557
Q 7 男性がいないので多様な考え方ができにくくなる（*）	-0.179	0.540

（*）：反転項目（以下同様）

因子相関行列

因子	1	2
1	1	-0.170
2	-0.170	1

表17. 「武庫川女子大学における『女子大の特徴』の当てはまり」についての因子分析結果
（附属出身者） n=245

	女性の主体 性発揮	女子大の 短所	周囲からの 支援・刺激
Q 2 女性自らの創意や工夫で色々な活動の計画や遂行ができる	0.948	0.041	-0.171
Q 3 自分の能力に自信を持ち責任感のある女性を育てることができる	0.854	0.047	-0.011
Q 4 指導的立場に立つ女性を育てることができる	0.747	0.086	0.046
Q 1 あらゆる役割を女性が引き受けることができる	0.676	-0.031	0.094
Q 5 男性に煩わされることなく学ぶことができる	0.520	-0.141	0.062
Q11 経済や政治への関心が薄くなる（*）	-0.054	0.671	0.010
Q10 女子のみでは活気のない大学になる（*）	0.003	0.604	0.117
Q13 女性らしさが失われる（*）	0.045	0.569	0.107
Q14 学問的な訓練において厳しさに欠ける（*）	-0.019	0.493	-0.205
Q 7 男性がいないので多様な考え方ができにくくなる（*）	-0.068	0.440	-0.169
Q15 女子大があることは時代に逆行している（*）	0.135	0.408	0.144
Q 9 女子学生に対する教員の教育的な働きかけが熱心である	-0.070	0.023	0.849
Q 8 目標となる卒業生が多いので今後の進路の参考となる	0.036	0.100	0.678
Q12 女性らしさが引き出される	0.010	0.045	0.407
Q 6 女性の立場から学問ができる	0.381	-0.106	0.402

因子相関行列

因子	1	2	3
1	1	-0.071	0.652
2	-0.071	1	-0.257
3	0.652	-0.257	1

(4) 武庫川女子大学での「学生生活」

1) 因子分析

最後の質問肢項目として、武庫川女子大学での学生生活を振り返り、評価をしてもらった。本学の教育方針や女子大学としての特徴、交友関係など幅広く尋ねている。「武庫川女子大学での生活を振り返って、次の項目についてあなたの率直な感想をお聞かせ下さい」に2節同様の5件法で回答)。本学の学生生活を規定する要因を抽出するとともに、本学の取り組みへの学生からの評価との側面も併せ持つ。

まず学生の学生生活を規定する要因を探るために因子分析を行った。全体と外部出身者で抽出された因子はともに8因子であり、第2因子と第3因子の順が入れ替わっているだけで、構成する質問項目はほぼ同じであった。これに対して附属出身者の因子分析では、同じく8因子を抽出したものの、いくつか内容の異なる因子が得られた。ここでは、外部出身者と附属出身者の結果の比較を行うこととする。

表18に示したものが、外部出身者（附属以外）の因子分析結果である。構成項目をみて、第1因子から順に、以下のように命名した。「教職員の対応」「友人づくりの環境」「知識・資格等の修得」「クラブ活動」「学生の交流」「将来への準備」「学生マナー」「施設・設備の充実」の8因子である。全体の分析では、このうち「友人づくりの環境」と「知識・資格等の修得」が入れ替わっているのみである。

これに対し附属出身者では、表19のようになった。第1因子から順に、「自立心や資格・教養の修得」「就職への準備」「友人づくりの環境」「教職員の対応」「学内環境の整備・印象」「学生マナー」「選択肢の多様性」「女性間の交流・活動」と命名した。

以下、両者の因子分析結果を比較していく。ともに同じ質問項目からなる因子は、「友人づくりの環境」「教職員の対応」「学生マナー」である。この他類似したものを挙げると、外部の「知識・資格等の修得」（第3因子）に対応する因子は、附属の第1因子であるが、この因子には外部（と全体）には含まれていない「自立心を身につけることができる」と「女性として将来の目標や課題をつかむことができる」の項目が入っているので解釈は難しいが、「自立心に必要なものの修得」と命名した。次に、外部の「施設・設備の充実」（第8因子）に対応するものが、附属では「学校内環境の整備・印象」（第5因子）と名付けた因子であり、外部の因子構成項目にはない「学生はもっときちんとした服装をしたほうがよい」という人的要素（-）が入っている。さらに、外部にある「将来への準備」（第6因子）を、附属では「就職への準備」（第2因子）とした。附属では「就職枠があって有利」「きめ細かい就職指導」などの項目が含まれ、将来への準備の中でも就職の要素が強いためである。附属の第8因子には、外部の「学生の交流」（第5因子）にあった「学生がバラバラで孤立」「何となくホッとできる」がなくなり、代わって「クラブでやりたいことができる」「女性を意識した授業が多い」が入っているため、「女性間の交

表18. 「武庫川女子大学での学生生活」についての因子分析結果（外部出身者）

n = 1060

	教職員の対応	友人づくりの環境	知識・資格等の修得	クラブ活動	学生の交流	将来に向けた準備	学生のマナー	施設・設備の充実
Q12 職員の対応は親切である	0.757	-0.061	0.001	0.017	0.003	-0.123	0.112	0.035
Q14 授業に熱心な教員が多く、理解しやすい	0.626	-0.068	0.040	-0.027	0.034	0.096	0.095	0.027
Q 2 教員と話す機会が多く親しみやすい雰囲気がある	0.497	0.102	-0.132	-0.063	0.133	0.107	-0.114	0.005
Q 6 きめ細かい就職指導を受けることができる	0.474	0.039	0.169	0.041	-0.087	0.056	0.010	0.016
Q11 武庫川女子大学用の就職枠があつて有利である	0.273	-0.037	0.027	0.189	-0.129	0.114	0.003	0.096
Q 9 入学後、親しい友人を得やすい	-0.058	0.894	0.081	0.054	0.007	-0.120	-0.010	0.017
Q 8 クラス制は学生生活に慣れる上で役立つ	-0.032	0.733	0.157	0.062	-0.079	-0.142	0.059	0.060
Q15 同性ばかりなので周りを気にせず自分らしさを出せる	0.057	0.352	-0.121	-0.019	0.165	0.229	0.004	0.030
Q10 比較的少人数の授業が多い	0.134	0.214	-0.005	-0.073	-0.137	0.145	0.101	0.060
Q27 職業に役立つ知識や技能を身につけることができる	0.057	0.093	0.732	-0.046	0.052	0.122	-0.031	-0.094
Q29 希望する資格や免許を取ることができる	0.038	0.191	0.652	-0.092	-0.062	-0.074	-0.021	-0.077
Q26 幅広い教養を身につけることができる	-0.043	-0.122	0.462	0.052	0.104	0.331	-0.027	0.134
Q18 幅広い分野の学習をする機会が少ない（*）	0.020	-0.207	0.370	0.028	0.351	-0.157	0.107	-0.045
Q 7 クラブでやりたいことが十分できる	-0.044	0.089	-0.027	0.738	-0.094	0.053	-0.048	-0.001
Q13 クラブや自治会を全部自分たちで行うので自立心が養われる	0.156	-0.017	-0.026	0.497	-0.031	0.115	-0.083	0.105
Q20 魅力あるクラブがあまりない（*）	0.024	-0.033	-0.070	0.491	0.394	-0.114	0.075	-0.089
Q 5 仲間とゆっくりくつろげる場がない（*）	0.016	0.014	0.050	-0.163	0.679	-0.134	-0.144	0.001
Q21 学生がバラバラで孤立している（*）	0.080	0.117	0.030	0.125	0.462	-0.297	0.074	-0.035
Q 3 異性が周りにいないのは不自然だと思う（*）	-0.105	-0.079	-0.067	0.031	0.447	0.201	0.087	-0.112
Q25 なんとなくホッとできる雰囲気がある	0.029	0.215	-0.038	-0.123	0.339	0.338	0.016	0.104
Q23 女性として将来の目標や課題をつかむことができる	0.009	-0.004	0.098	0.006	-0.044	0.712	0.102	0.082
Q24 学生はもっときちんとした服装をした方がよい	0.075	-0.128	-0.014	0.045	-0.162	0.564	-0.064	-0.270
Q22 働いている先輩に話を聞くことができ働くことの参考になる	0.196	0.011	0.167	0.001	-0.053	0.459	0.026	-0.131
Q30 自立心を身につけることができる	-0.138	0.029	0.314	0.142	0.045	0.350	0.021	0.091
Q 1 同性の同学年や先輩・後輩の交流があり参考になる	0.169	0.217	-0.049	0.212	0.087	0.263	-0.092	-0.175
Q16 マナーの悪い学生が多い（*）	-0.020	-0.010	-0.068	0.009	0.072	-0.007	0.718	0.187
Q28 授業中に私語が多い（*）	0.145	0.079	0.029	-0.085	-0.041	0.044	0.601	-0.138
Q19 ゴミやいたずら書きなどが少なく施設がきれいである	0.008	0.112	-0.097	-0.004	-0.121	-0.146	0.135	0.684
Q17 図書館やコンピュータなどの設備や機器が充実している	0.135	-0.058	0.041	0.019	0.048	-0.194	-0.226	0.587
Q 4 女性を意識した授業、女性として関心が高い授業が多い	0.143	0.011	0.068	-0.003	-0.108	0.113	-0.087	0.264

因子相関行列

因子	1	2	3	4	5	6	7	8
1	1	0.507	0.508	0.467	0.253	0.639	-0.157	0.534
2	0.507	1	0.354	0.197	0.331	0.470	-0.133	0.479
3	0.508	0.354	1	0.284	0.303	0.582	-0.152	0.553
4	0.467	0.197	0.284	1	0.230	0.459	-0.078	0.251
5	0.253	0.331	0.303	0.230	1	0.358	0.199	0.408
6	0.639	0.470	0.582	0.459	0.358	1	-0.244	0.603
7	-0.157	-0.133	-0.152	-0.078	0.199	-0.244	1	-0.173
8	0.534	0.479	0.553	0.251	0.408	0.603	-0.173	1

表19. 「武庫川女子大学での学生生活」についての因子分析結果（附属出身者）

n = 243

	自立心や 資格・教 養の修得	就職へ の準備	友人づ くりの 環境	教職員 の対応	学内環境 の整備・ 印象	学生の マナー	選択肢 の多様 性	女性間の 交流・活 動
Q30 自立心を身につけることができる	0.940	-0.181	-0.035	0.000	0.008	-0.035	0.036	0.043
Q29 希望する資格や免許を取ることができる	0.663	-0.074	-0.036	0.026	-0.003	-0.024	-0.006	-0.047
Q26 幅広い教養を身につけることができる	0.653	0.208	0.014	-0.002	-0.004	0.019	0.038	-0.058
Q27 職業に役立つ知識や技能を身につけることができる	0.652	0.143	-0.104	0.021	0.069	-0.108	0.090	-0.136
Q23 女性として将来の目標や課題をつかむことができる	0.462	0.425	0.054	0.003	-0.026	0.089	-0.003	-0.162
Q11 武庫川女子大学用の就職枠があって有利である	-0.138	0.843	0.005	-0.030	0.186	0.119	-0.182	0.064
Q22 働いている先輩に話を聞くことができ働くことの参考になる	0.163	0.763	-0.089	-0.036	-0.072	0.067	-0.030	-0.173
Q 6 きめ細かい就職指導を受けることができる	-0.081	0.543	-0.065	0.335	0.151	-0.018	0.066	0.171
Q 1 同性の同学年や先輩・後輩の交流があり参考になる	-0.025	0.368	0.162	0.242	-0.215	0.013	0.101	-0.167
Q13 クラブや自治会を全部自分たちで行うので自立心が養われる	0.224	0.318	0.051	0.009	0.023	0.032	0.056	0.068
Q 9 入学後、親しい友人を得やすい	-0.088	-0.014	0.823	-0.057	0.187	0.015	0.020	-0.128
Q 8 クラス制は学生生活に慣れる上で役立つ	-0.005	-0.066	0.786	0.012	-0.094	0.100	-0.079	0.100
Q10 比較的少人数の授業が多い	-0.087	0.058	0.505	-0.060	0.082	-0.124	-0.014	0.118
Q15 同性ばかりなので周りを気にせず自分らしさを出せる	0.283	-0.036	0.345	0.091	0.258	0.109	-0.148	-0.028
Q25 なんとなくホッとできる雰囲気がある	0.223	0.074	0.322	0.209	0.015	-0.141	-0.023	-0.227
Q 2 教員と話す機会が多く親しみやすい雰囲気がある	-0.127	0.085	0.001	0.826	-0.154	-0.226	0.065	-0.011
Q14 授業に熱心な教員が多く、理解しやすい	0.270	-0.149	0.047	0.678	-0.033	0.047	-0.021	0.290
Q12 教員の対応は親切である	0.148	0.194	-0.157	0.469	0.128	0.087	-0.181	0.104
Q17 図書館やコンピュータなどの設備や機器が充実している	-0.016	0.099	0.022	-0.097	0.679	-0.302	0.199	0.085
Q24 学生はもっときちんとした服装をした方がよい	0.282	0.037	0.063	-0.151	-0.439	-0.219	-0.105	0.174
Q19 ゴミやいたずら書きなどが少なく施設がきれいである	0.176	0.084	0.125	-0.126	0.406	0.022	-0.088	-0.012
Q28 授業中に私語が多い（*）	-0.043	0.053	0.069	-0.184	-0.069	0.662	0.148	0.054
Q16 マナーの悪い学生が多い（*）	-0.041	0.198	-0.020	-0.020	-0.078	0.647	0.096	-0.014
Q20 魅力あるクラブがあまりない（*）	0.015	-0.001	-0.055	-0.092	0.065	0.073	0.651	0.091
Q18 幅広い分野の学習をする機会が少ない（*）	0.231	-0.090	-0.142	0.053	0.049	0.232	0.405	0.028
Q21 学生がバラバラで孤立している（*）	-0.046	-0.248	0.112	0.236	0.021	0.165	0.393	-0.102
Q 5 仲間とゆっくりくつろげる場がない（*）	0.192	-0.004	-0.047	-0.130	0.155	-0.053	0.201	-0.453
Q 7 クラブでやりたいことが十分できる	0.034	0.260	0.165	-0.063	-0.118	0.056	0.294	0.414
Q 4 女性を意識した授業、女性として関心が高い授業が多い	0.163	0.138	0.085	0.090	0.126	-0.055	0.048	0.405
Q 3 異性が周りにいないのは不自然だと思う（*）	0.070	0.068	0.035	-0.095	-0.064	0.000	-0.087	-0.378

因子相関行列

因子	1	2	3	4	5	6	7	8
1	1	0.672	0.572	0.539	0.171	-0.215	0.365	0.037
2	0.672	1	0.542	0.442	0.073	-0.308	0.373	0.218
3	0.572	0.542	1	0.562	0.218	-0.141	0.290	-0.017
4	0.539	0.442	0.562	1	0.307	0.049	0.275	-0.141
5	0.171	0.073	0.218	0.307	1	0.136	-0.100	-0.200
6	-0.215	-0.308	-0.141	0.049	0.136	1	-0.066	-0.296
7	0.365	0.373	0.290	0.275	-0.100	-0.066	1	-0.110
8	0.037	0.218	-0.017	-0.141	-0.200	-0.296	-0.110	1

流・活動」と命名した。さらに、外部の第4因子「クラブ活動」を構成する項目が附属では全体に散らばってしまい、附属ではこれに類似するものとして第7因子が抽出された。「魅力あるクラブがない」「幅広い分野を学習する機会が少ない」「学生がバラバラで孤立」との質問項目からなるもので、外部では異なる因子に分類されていたものが集まっている。命名は難しいが、「選択肢の多様性」とした。

以上まとめると、外部出身者と附属出身者として共通する学生生活の構成因子としては、「友人づくりの環境」「教職員の対応」「学生マナー」がある。この他、少々因子構成項目が異なるものの、外部の「(自立心や)資格・教養の修得」「将来(就職)への準備」「施設・設備の整備充実(学内環境の整備・印象)」「学生の交流・関係性(女性の交流・活動)」(カッコ内は附属の因子名)なども共通する因子と言える。その中でも注目すべきは、附属出身者の第1因子が、外部の「資格・教養の修得」に「自立心」が加わり、「自立心や資格・教養の修得」となった点である。ただ、附属の場合、外部(と全体)では同一因子の各項目負荷量の符号は全て同一であったが、附属では+と-の混じる因子が現れる、あるいは同一因子を構成する項目の中に異質とも思われる項目が入り、概して因子の解釈が難しくなっている。また、異なる因子として、外部で「クラブ活動」が因子を形成したのに対し、附属ではこれが散らばってなくなり、「選択肢の多様性」という新たな因子が見られた点も興味深い。

2) 現在の充実度を従属変数とする重回帰分析

以上、武庫川女子大学における4年間の大学生活の評価を因子分析し、その評価を規定する要因を抽出してきた。それでは、大学生活を規定するどの要因が、学生の大学生活充実度にどの程度寄与しているのだろうか。これを明らかにするため、フェイスシートで尋ねた「大学生活の充実度」⁽⁵⁾(表1参照)を従属変数とし、上の因子分析で得られた各因子の因子得点、および本学志望順位(「第一志望」から「第三志望以下」までの3段階)を独立変数とする重回帰分析を、全体と外部出身、附属出身に分けて、強制投入法にて実施した。その結果が表20~22である。従属変数は数字が小さいほど高い評価であり、独立変数の志望順位も同様に数字が小さいほど志望順位が高くなってが、因子得点はその逆なので、符号(+/-)に注意が必要である。

まず、全体の結果(表20)から見ていく。8つの因子のみを投入したところ、決定係数0.229で、第5因子「学生の雰囲気や関係性」と第8因子「施設や設備の充実」を除く全ての独立変数において0.1%水準で有意となった。中でも標準化係数の値が高いものは第3因子「仲間づくり環境」(-0.188)、第6因子「将来への準備」(-0.184)であり、これらの要因が「充実度」に及ぼす影響が大きいようである。さらに、本学志望順位を独立変数に加えて分析したところ、この変数も1%水準で有意となった。本学の志望順位が高いほど小さい数字(1:第一志望~3:第三志望以下)となるので、係数の符号はプラスと

なっており、志望順位が高いほど充実度に影響を与えているが、標準化係数の大きさからすると、先に挙げた因子よりも小さい。一方で、第5因子「学生の雰囲気や関係性」、第8因子「施設や設備の充実」の2要因については有意差が見られない。「施設や設備」への評価は全般的に高いため、大学生活の充実度にはそれほど影響がないものと思われる。

次に、外部出身（附属以外）と附属出身それぞれの重回帰分析を行い、結果の比較を行った。全体としてみた学生生活因子と大学生活充実度の関係は上の通りであるが、因子分析結果でも明らかなように、附属出身者と外部からの入学者とでは、大学生活を評価する軸が少なからず異なっている。よって、二つを別々に分析することで、影響を与えている要因の違いを明らかにできる。独立変数には、それぞれの因子分析で得られた因子得点を使用している。

まず外部出身の分析では、調整済み決定係数0.224で、全体よりはやや小さいがほとんど変わらない。有意差がある変数は、標準化係数が大きい順に「学生の雰囲気や関係性」、「友人づくりの環境」、「クラブ活動」となる。特に前二者「学生の雰囲気や関係性」「友人づくりの環境」の係数は0.2以上であり、この2要因の充実度への影響が大きい。中でも、附属を含めた全体では有意差がなかった「学生の雰囲気や関係性」因子が、ここでは最も大きな影響をもつようになっている点が注目される。ともあれ、外部（附属以外）からの入学者にとって、友人づくりやその関係性という要因が大きな影響を与えていることが分かる。さらに「本学志望順位」変数を加えた場合、この変数に5%水準の有意差が見られ、志望順位が高いほど充実度も強くなる傾向にある。一方で、「教職員の対応」「知識・資格や教養の修得」「将来への準備」「学生マナー」といった全体の分析において0.1%水

表20. 「大学生活充実度」を従属変数とする重回帰分析（全体） n = 1291

	非標準化 係数 (B)	標準化 係数 (β)		非標準化 係数 (B)	標準化 係数 (β)	
教職員の対応 (因子1)	-0.113	-0.137	***	-0.112	-0.135	***
知識技能や資格の修得 (因子2)	-0.105	-0.128	***	-0.108	-0.130	***
仲間づくり (因子3)	-0.155	-0.188	***	-0.156	-0.189	***
クラブ活動 (因子4)	-0.086	-0.105	***	-0.083	-0.101	**
学生の雰囲気や関係性 (因子5)	0.000	0.000		0.003	0.003	
将来への準備 (因子6)	-0.152	-0.184	***	-0.154	-0.186	***
学生のマナー遵守 (因子7)	-0.103	-0.125	***	-0.093	-0.113	***
施設や設備の充実 (因子8)	0.022	0.026		0.018	0.021	
本学志望順位	-	-		0.068	0.068	**
(定数)	1.919		***	1.805		***
調整済み R2乗	0.229			0.230		
F 値	48.075		***	43.767		***

*** : p<.001, ** : p<.01, * : p<.05

表21. 「大学生生活充実度」を従属変数とする重回帰分析（外部出身者）

n = 1053

	非標準化 係数 (B)	標準化 係数 (β)		非標準化 係数 (B)	標準化 係数 (β)	
教職員の対応 (因子1)	0.044	0.047		0.040	0.044	
友人づくりの環境 (因子2)	-0.200	-0.224	***	-0.198	-0.221	***
知識技能や資格の修得 (因子3)	-0.058	-0.064		-0.056	-0.061	
クラブ活動 (因子4)	-0.093	-0.097	**	-0.088	-0.091	*
学生の雰囲気や関係性 (因子5)	-0.246	-0.254	***	-0.238	-0.244	***
将来への準備 (因子6)	-0.048	-0.053		-0.044	-0.049	
学生のマナー遵守 (因子7)	0.028	0.028		0.028	0.028	
施設や設備の充実 (因子8)	0.012	0.013		0.006	0.006	
本学志望順位	-	-		0.059	0.060	*
(定数)	1.928		***	1.824		***
調整済み R2乗	0.224			0.226		
F 値	39.310		***	35.061		***

*** : p<.001, ** : p<.01, * : p<.05

表22. 「大学生生活充実度」を従属変数とする重回帰分析
(附属出身者)

n = 243

	非標準化 係数 (B)	標準化 係数 (β)	
自立心や資格・教養の修得 (因子1)	-0.043	-0.049	
就職への準備 (因子2)	-0.050	-0.055	
友人づくりの環境 (因子3)	-0.231	-0.251	**
教職員の対応 (因子4)	-0.199	-0.215	*
学内環境の整備・印象 (因子5)	0.083	0.082	
学生のマナー (因子6)	-0.104	-0.102	
選択肢の多様性 (因子7)	-0.066	-0.063	
女性間の交流・活動 (因子8)	0.008	0.007	
(定数)	1.877		***
調整済み R2乗	0.228		
F 値	9.914		***

*** : p<.001, ** : p<.01, * : p<.05

準で有意だった変数が、附属を外した場合、有意でなくなっている。

附属出身者の重回帰分析の結果が表22である（附属は本学への進学が前提となっているので、本学志望順位を独立変数に加えていない）。変数自体が全体、外部とは異なるものの、最も標準化係数が大きく（-0.251）、有意差のある変数は「友人づくりの環境」であり、外部と同様に友人関係の因子の影響が強い。もう一つ有意差が見られる変数は、外部では有意差がなかった「教職員の対応」であり、その対応を高く評価しているほど、大学

充実度の評価も高くなっている。外部、附属ともに、よい人間関係を築けるかが、充実度の評価に深く結びついていることが分かる⁽⁶⁾。

4. おわりに

(1) まとめ

本研究で明らかになった点を、4つの質問軸に沿って簡単に振り返っておく。

まず、「武庫川女子大学への入学理由」については、「教育内容・環境」「知名度・伝統」「受験」「通学」の4因子によって規定されていることが分かった。附属出身者と外部出身者に分けて分析したところ、全体の8割を占める外部出身者は全体とほぼ同じ結果であったが、附属出身者では少し異なる結果となった。「教育内容・環境」と「知名度・伝統」は共通であるが、「周囲のすすめ」「教員の魅力」といった独自の因子が附属出身者で抽出された。保護者アンケートでも、「教育指導の環境」と「知名度・伝統」は共通しているが、他に「経済性・安心等の合理性」「附属・同窓」との因子が得られた。

お茶の水女子、奈良女子の既存調査との比較を行ったところ、国立女子大学では因子がよく似ていた。本学とも類似しているが、国立では「社会的評価（周囲のすすめ）」といった因子の他、お茶の水では「研究環境」が抽出されている（お茶の水の因子分析結果自体は明示されていない）。「教育環境」「知名度・伝統」「受験学力」の3因子は、どの大学の学生にも共通する因子である。

次に第二の「女子大学に入学した理由」の因子分析についてである。本学調査の全体では、「女性みの環境」「周囲のすすめ・イメージ」「女子大の有利さ」の3因子を抽出した。附属のみでは、これに加えて「女性としての教育内容」と命名した新たな因子を得た。お茶の水女子では、「女性みの環境」「学問環境」「戦略a：男性と競合しない優位性」「戦略b：別学である優位性」「時代的要因」の5因子であった。共通する因子は「女子みの環境」である。お茶の水の「学問環境」「戦略a」「戦略b」を構成する質問項目は、本学においては分散し、このような因子は形成されなかった。本学の「周囲のすすめ・イメージ」因子は、本学独自の質問項目からなる因子である。

第三の「武庫川女子大学における『女子大学の特徴』の当てはまり」の評価では、全体と外部出身者では「女子大の長所」と「女子大の短所」の二つにまとまったが、附属出身者では「女子大の長所」が「女性の主体性発揮」と「周囲からの支援・刺激」に分かれ、3因子を抽出した。

四番目の「武庫川女子大学での学生生活評価」についても、全体と外部出身者から抽出された因子は8因子で、同じ命名ができた（「教職員の対応」「友人づくりの環境」「知識・資格等の修得」「クラブ活動」「学生の交流」「将来への準備」「学生マナー」「施設・

設備の充実)」。基本的に附属で抽出された因子もこれと似ているが、因子を構成する質問項目の入れ替わりがあって、幾つか異なった因子命名となった。外部で抽出された「クラブ活動」因子は附属では見られず、代わって「選択肢の多様性」という因子が附属で抽出された。

さらにこの因子分析結果を独立変数とし、フェイスシートで尋ねた「現在の充実度」を従属変数とする重回帰分析を行ったところ、全体では「施設や設備の充実」「学生の雰囲気や関係性」を除いて有意差が見られた。しかし外部出身者と附属出身者に分けて重回帰分析を行って見たところ、違いが見られた。外部のみでは全体と因子構成は変わらないものの、有意差のある因子が「友人づくりの環境」「学生の雰囲気や関係性」および「クラブ活動」のみとなり、他の因子では消えた。さらに、全体で有意差が出なかった「学生の雰囲気や関係性」が最も大きな影響を与える因子となった。附属では、「友人づくりの環境」と「教職員の対応」のみが有意となった。いずれの分析でも、人間関係のあり方、その満足度が、学生生活の充実度に大きな影響を与えていることが示された。

(2) 課題

おわりに、幾つか今後の課題を挙げておく。まず、この分析では、女子大学を評価する観点を提示したに過ぎない。よって、こうした観点をもとに女子大学での教育研究全般、学生生活を振り返る必要がある。その上で、更なる教育研究活動の充実には何が必要か、学生の人間関係やコミュニケーションを高める支援の仕方はどうなのかといったことを、現在の学生の目線で考えていくことが大切なのであり、ここで得られたことはきっかけに過ぎないという点である。分析だけにとどめず、学生への教育実践、女子大学としての魅力づくりとどう結び付けていくのかは大きな課題である。

次に、本分析は本学のデータと国立2女子大学の既存データのみからなされたものであるので、ここで得られた結果は他の女子大学にあてはまるとは限らない点に留意する必要がある。女子大学の個性、特性は多様であり、女子大学の特性を抽出するのであれば大学数を増やした分析が不可欠である。ここで示した質問肢を使つての分析、各大学にふさわしい新たな質問肢を加えた分析、複数の女子大学との共同研究などの展開が待たれる。さらには、共学大学における女子学生との比較検討も課題として挙げておく。

最後に、本学データから見えてくる課題も挙げておく。一つは附属出身者と外部出身者との評価の違いについてである。本研究の分析において、外部と附属では評価の観点において少なからず異なりが見られた。これはどういう要因によるものなのか、大学での人間関係の実際や附属からの連続性、あるいは大学での支援や援助の仕方、附属との連携のあり方など、興味ある課題である。もう一つは、保護者アンケートと学生アンケートの有機的なつながりをどうつけていくのかという課題も残された。単発的、打ち上げ花火的に保

護者や学生にアンケートを取るのではなく、これらアンケートをどう戦略的に位置づけ、その評価から実践をいかに改善していくのかといったループの中に位置づけていかなければならない。大きな課題である。

注

- (1) 各大学への入学理由について尋ねる調査は、「学生生活調査」などとして行われている。しかしながら、それらの結果は学内報告にとどまり、紀要に掲載されることもあるがあまり外に出されることはない。「女子大学」への入学理由についての調査研究で、最もまとまったものがここで取り上げているお茶の水女子大学と奈良女子大学による調査報告書（お茶の水女子 2001、奈良女子 2003）である。調査が実施された2000年頃、国立大学の法人化やその整理・統合が叫ばれるようになり、自己点検・評価の実施も課されるようになった。中でも女子大学はその存立意義が問われ、二つの国立女子大学は共同での調査（質問項目が揃えられている）を実施した。新制の1期卒業生から直近の卒業生までを対象とする大規模な調査である。この他の女子大学に関する調査としては、岡本道雄らが実施した神戸女学院大学調査（岡本 1972）、青井和夫らによる津田塾大学調査（青井 1988）などを挙げることができる。

大学生活については「学生生活調査」の他、学生文化の研究などが行われている。代表的なものとしては武内の一連の研究（2003など）が挙げられる。しかしながら、女子学生の学生文化や行動特性については調査・分析されていても、女子大学のみを対象とした量的調査・研究は、各大学の学生生活調査を除くと非常に少ないと思われる。

- (2) 「自宅からの通学」や「学寮の利用」の項目からなる第4因子を「通学」と命名したが、別の見方をすると「経済性」との解釈もできる。後にみるお茶の水女子大学の分析では、同様の項目からなる因子を「経済合理性」と命名している。
- (3) 保護者アンケートでは、保護者による「武庫川女子大学への評価」についても尋ねた。娘の3年半の本学での学生生活を踏まえて、保護者がどのような観点で本学を評価しているかを知るためである。単純集計については既に報告しているので（安東他 2007）、ここではその因子分析結果を掲載しておく（次頁の別表1）。

因子分析の結果、5因子が抽出された。第1因子から順に、「教育指導の評価」「外的環境の評価」「女子大の肯定評価」「学生の態度評価」「女子大の否定評価」と命名した。

別表 1. 保護者による「武庫川女子大学への評価」の因子分析結果

	教育・指導の 評価(内容)	外的環境 の評価	女子大特性 の肯定評価	学生の 態度評価	女子大特性 の否定評価
1 教員は熱心に授業や指導を行っている	0.751	0.036	-0.203	0.035	0.006
6 きめ細かい就職指導を受けることができている	0.643	-0.051	0.007	-0.018	-0.047
2 資格や免許の取得に熱心に取り組んでいる	0.611	-0.044	-0.089	0.034	0.035
8 しっかりとした学生指導が行われている	0.507	0.123	0.123	-0.057	-0.045
20 入学した頃より、大学への印象はよくなった	0.375	-0.094	0.255	-0.137	0.091
10 守衛やセキュリティシステムなどの安全管理がしっかりしている	-0.093	0.688	0.000	0.073	-0.056
9 情報処理教育が充実している	0.168	0.605	-0.140	0.054	-0.043
5 掃除が行き届き、施設が清潔である	-0.098	0.550	0.052	0.038	0.065
3 施設が充実している	0.053	0.482	0.111	-0.238	0.058
7 学内のクラブ活動が活発である	0.019	0.261	0.162	-0.016	0.035
13 女性だけの学生生活なので、親として安心できる	-0.149	-0.005	0.644	-0.023	0.002
17 女子大学で、何事も女性が行うので、自主性・主体性が身につく	-0.073	0.053	0.519	0.157	-0.050
12 幅広い教養を身につけることができる	0.267	0.009	0.368	0.058	-0.028
14 地域懇談会など、大学の情報を積極的に提供してくれている	0.174	0.043	0.354	-0.141	0.104
4 女性を意識した授業、女性として役立つ授業が多い	0.218	0.089	0.264	0.139	-0.020
16 マナーの悪い学生が多い	-0.015	-0.072	0.015	0.701	0.043
11 授業で私語が多い	-0.054	0.079	-0.041	0.606	0.095
18 学生にとって興味深い授業が多い	0.178	-0.024	0.240	0.403	-0.071
19 異性が周りにいないのは、不自然だと思う	-0.033	0.003	0.073	-0.009	0.661
15 男子学生がいないので、学生生活に活気がない	0.064	0.016	-0.078	0.167	0.635

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

因子相関行列

因子	1	2	3	4	5
1	1	0.609	0.645	0.287	0.007
2	0.609	1	0.573	0.409	0.157
3	0.645	0.573	1	0.336	0.040
4	0.287	0.409	0.336	1	0.395
5	0.007	0.157	0.040	0.395	1

- (4) 「一般に『女子大学』について次のような意見があります。こうした意見が『武庫川女子大学』についてあてはまると思われますか」との質問に、「4. かなりあてはまる」～「1. まったくあてはまらない」の4件法で回答を求めた。
- (5) 「大学生活を振り返って、全体として充実していたと思えますか」と尋ね、「1. 充実」～「5. 充実せず」の5件法で回答を得た。数字が低いほど充実度が高くなる。
- (6) 附属高校出身者は、幾つかの点で外部からの進学者と異なっている。附属からは毎年卒業生のほとんど（約90%、約400名）が本学に進学し、そのほとんどが4年制への

入学者である。附属出身者は大学入学者の20%弱を占める。

附属高校卒業者の特色として、その8割が中学からの入学者であり、彼女たちは入学までに6年間を同じ環境の中で過ごすので、そこでつくられた友人関係が大学に持ち越される。また、武庫川学院は「中・高・大一貫教育」の方針に従い、中学・高校と大学との連携・交流を図っており、大学施設の利用はもとより、大学の教員が高校で講義する、大学の講義を聴講するといった交流を活発に行っている。こうした背景が、大学生生活への適応や友人関係づくりなどにおいて、附属以外の出身者とはかなり異なっており、違いを生み出していると考えられる。

附属出身者からの評価については、外部出身者と異なる点も多く、その要因についてはさらなる検討が必要となる。

引用・参考文献

- 青井和夫編 1988、『高学歴女性のライフコース』勁草書房
- 安東由則・藤村真理子・難波満里子 2006、「『女子大学』に関する女子学生の意見調査」『研究レポート』（武庫川女子大学教育研究所）36号、37-84頁
- 安東由則・藤村真理子・難波満里子 2007、「武庫川女子大学に関する保護者への意見調査」『研究レポート』（武庫川女子大学教育研究所）37号、155-196頁
- 岡本道雄・國府剛・磯部卓三 1972、「女子大生の大学観」『論集』（神戸女学院大学）18巻3号、87-137頁
- お茶の水女子大学 2001、『卒業生・修了生のライフコースと国立女子大学の将来像に関する調査結果報告書』お茶の水女子大学
- 武内清編 2003、『キャンパスライフの今』玉川大学出版部
- 奈良女子大学 2003、『奈良女子大学卒業生・大学院修了生のライフコースと国立女子大学の将来像に関する調査結果報告書』奈良女子大学
- 友田泰正・安東由則編 2007、『「女子大学の存立意義に関する調査研究」報告書』武庫川女子大学教育研究所

明治期における中学校校友会の創設と発展の概観

Establishment and Development of KOYUKAI (Student-teacher's Associations)
at Boys' Secondary Schools in the Meiji era

安 東 由 則*

ANDOH, Yoshinori

目次

1. はじめに
2. 研究目的と研究対象
3. 高等教育機関における校友会の設立
4. 中学校校友会の設立経緯と形態
5. まとめと課題

* 武庫川女子大学教育研究所・研究員、文学部教育学科・准教授

1. はじめに

『教育学辞典』（岩波書店 1937）によれば、戦前の中等学校を中心とする校友会（あるいは学友会）は次のように説明されている。「学校において職員・生徒相互の親睦をはかり、学校教育と相俟つて生徒の心身を錬磨し、学校生活の向上を期することを目的として組織されてゐる團體。課外活動の組織化されたものと見ることが出来る。主として中等程度以上の學校に設けられてゐる。…組織は學校により多少の差異があるが、一般に職員・生徒を會員とし、學藝・運動等に關する各部を置き、學校當局監督の下に生徒をして自治的に各部の運営に參與せしめてゐる…」(755-6頁)。これは当時の校友会について概観し、解説したものであるが、本論文で述べるように、明治期における中学校校友会⁽¹⁾の形成過程では、その目的や形態、構成員、活動内容、さらには自治の度合いは一様でない。特に初期に組織されたものの実態は多様であった。

本論文で対象とする、明治期の中学校に設けられた校友会などと称される組織は、文部省が規定した公的カリキュラムではないが、ほとんどの学校に設けられ、「校風は校友会がつくる」などと言われたように、中学校生活の中で重要な位置を占めた組織であり、活動である。また、公的カリキュラムではない故に、その始まりや組織形態、内容なども一様ではなかった。その構成は、辞典の説明にあるように、多くの場合、「運動部」と雑誌発行や文芸活動を行う「学芸部」からなっていた。主役は運動部であり、その活動は学校内外の注目を集め、「学校史」や生徒の「回顧」には当時の運動部の様子がいきいきと描かれている。特に、府県内に複数の中学校が創立されるようになった明治30年代以降、他校との対抗戦がしきりに行われるようになり、校友会雑誌や各地域の新聞ではその様子が詳しく報じられた。高等教育機関とは異なり、各府県に複数設けられた中学校は、地方に外来スポーツを紹介する媒体ともなり、生徒ばかりではなく地域の人々の耳目を集めたのである。

一方、明治中期の尋常中学校創設頃には、生徒や同窓生が運動や親睦を目的とする団体を結成し、抗争する、あるいは学校側と対立することもあり、明治20年代後半から30年代には学校騒擾が頻発した（寺崎 1971）。こうした動きを阻止し、校内の調和と統一を図るため、学校側が中心となって校友会を組織し、生徒の活動を制限、管理する側面もあった。

このように、校友会には実に様々な側面がある。校友会活動とその意味づけは、学校を取り巻く社会の価値や時代状況を反映しながら変化していったのであり、先に述べたように「校風は校友会がつくる」とされたくらい、中学校の生徒や教員、そして同窓生らに与えた影響は大きなものであった。それにもかかわらず、校友会についての研究は十分にされていないのが現状である。

明治期の中等学校校友会に関する研究の多くは、校友会組織というよりもむしろ、学校体育史あるいはスポーツ史を中心に展開されてきた。日本の体育・スポーツ史の事例として校友会スポーツを扱った研究（木下 1971a・b、能勢 1965、1995、渡辺1978、など）、あるいは特定の学校や地域におけるスポーツの伝播、広がりを持った研究（鶴岡 1973、平野 1974、古園井 1978、小島 1978、棚田 1983、真栄城他 1986、西川 1992…高等学校校友会を含む）がある。こうしたスポーツ関係の研究が多くなされている一方、校友会そのものに焦点を当てた研究は非常に少なく、管見では渡辺（1978）、桑原（1988）、市山（2003）の研究、第一高等中学校を扱った富岡（1994）の研究が挙げられるに過ぎない。渡辺の研究もスポーツを中心とするものであるが、明治31年実施の全国中学校校友会調査と独自の学校史調査から明治期における校友会の成立時期や活動内容、特にスポーツの種類や実施状況を全国規模で綿密に検討した研究であり、本論でも参考として取り上げている。桑原の研究は、明治期から昭和の戦時期までを広く扱っており、各校の校友会規定や運動部の構成、校友会雑誌の内容など幅広くまとめたものである。市山は「生徒自治」の観点から校友会規則を取り上げ、役員選出や意思決定、会員の処分などについて比較検討を行っている。

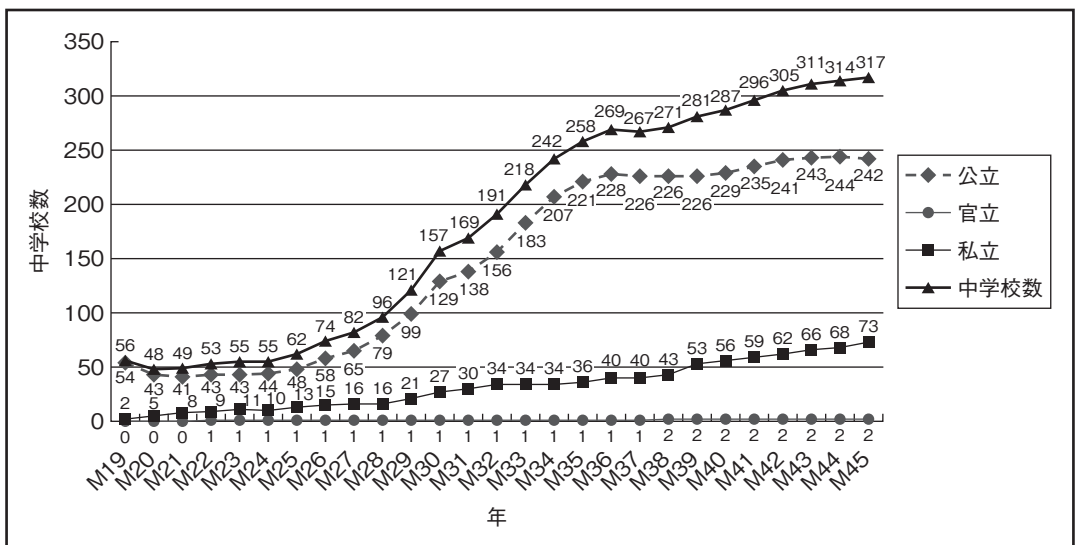
2. 研究目的と研究対象

本研究の目的は、明治期中学校における校友会活動を対象として、近代化に伴う社会的な価値や関係性の変化が、地方エリートの教育機関である中学校にいかなるインパクトを与え、生徒たちや学校側はそれにどう対応し、学校の新たな秩序づくりがなされていったのか、その過程を社会学的観点から明らかにすることにある。例えば、中学校に導入された外来スポーツという「舶来品」に投影された人々の欲望を、社会的、時代的背景から読み解いていくこともその一つである。校友会活動は公的カリキュラムではなく、画一的な規制がかからないからこそ、様々な欲望を敏感に反映する、格好の対象だと考える。本論文はこの研究の端緒であり、明治期の中学校において校友会が形成され発展していく過程を、事実レベルでできるだけ広く把握することを目的とする基礎的研究と位置づけられる。

校友会の成立過程は学校あるいは地域の状況によってかなり異なり、複雑である。できるだけ広くその状況を捉えるため、著者が集めることができた全国の62中学校を本論文の対象とする。用いる資料は、旧制中学の伝統を持つ新制高等学校の「学校史」であり、設立時期やその名称、目的や構成員、活動内容などの記載を、明治期に限り拾い上げていった。対象とした期間は、「尋常中学校ハ各府県ニ於テ便宜之ヲ設置スルコトヲ得但其地方税ノ支弁又ハ補助ニ係ルモノハ各府県一箇所ニ限ルヘシ」とする中学校令が出され、尋常

中学校が創設された明治19年以降を主とする。この勅令により、それまで安易に設立された中学校が淘汰され、財政基盤のしっかりした中等教育機関が作られることとなった。校友会と呼ばれるまとまった組織が設立され始めたのもこれ以降である。明治24年の中学校令中改正（「第六条 尋常中学校ハ各府県ニ於テ一校ヲ設置スヘキモノトス但土地ノ情況ニ依リ文部大臣ノ許可ヲ得テ数校ヲ設置シ又ハ本文ノ一校ヲ設置セサルコトヲ得」）により複数の尋常中学校設置が認められ、さらに日清戦争後の明治32年に出された中学校令改正（「第二条 北海道及府県ニ於テハ土地ノ情況ニ応シ一箇以上ノ中学校ヲ設置スヘシ文部大臣ハ必要ト認ムル場合ニ於テ府県ニ中学校ノ増設ヲ命スルコトヲ得」）によって尋常中学校が中学校となり、一府県に複数の中学校設置が奨励されて、飛躍的に中学校が増加した（図1）。本論文では、中学校令を受けて各府県に創設された尋常中学校を中心にデータを収集したが、明治20年代後半から30年代を通じて急増した、各府県で2校目以降の中学校校友会についても、比較のためできるだけ取り上げた。そのデータをまとめたものが、後に掲載している表2である。これをもとに概要を把握し、分析をすすめていく。

次に、資料の限界についても述べておく。本研究で使用する「学校史」は豊かな内容をもつ貴重な資料ではあるが、記述の原資料が乏しかったり、出典が示されていない、あるいは伝聞で書かれていたりすることが少なくない。また、編集方針によって校友会活動を詳細に記述しているものもあれば、簡単にしか触れていないものもあるなど、校友会の取り上げられ方も様々で、確実な史実と言い切れない点もある⁽²⁾。よって、編年や活動内容の記述などに多少の誤りがある可能性は否定できないが、できるだけ多くの中学校を取り上げることで、その創設と発展の概観は提示できると考える。



* 文部省『文部省年報』（各年）より作成

図1. 明治期の中学校数推移（明治19年以降）

なお、中学校の名称⁽³⁾は明治期を通じてよく変えられているので、論文中では誤解を招かない範囲で、明治30年代後半以降の名称を使用する。また、各中学校校友会についての出典である「学校史」は、紙面の都合上、表2中に掲載している。

3. 高等教育機関における校友会の設立

先述のように、校友会は文部省が定めた公的なカリキュラムでも、組織でもない故に、全国一斉に同じ形式・内容で設けられたということはない。よって、中学校校友会が設けられた経緯、理由が明確に規定されてはいない。ただ、東京帝国大学や第一高等中学校といった高等教育機関で先に設けられた校友会組織を手本として取り入れたとされている(木下 1971b など)。そこでまず、明治10年創設の東京大学と、明治19年に創設された第一高等中学校など、高等教育機関に設けられた校友会的組織について触れておく(表1)。

まず東京大学では、明治16年に予備門と合同で陸上競技会が開かれた。明治17年には最初の端艇競漕会が行われ、その翌年には医学部に端舟会が発足している(東京大学 1984a、895-6頁)。明治19年、帝国大学となつてすぐに、「帝国大学運動会」が設立された。「会員ノ身心ヲ強壯快活ナラシメ兼テ交互ノ親睦ヲ謀ルニ在リ」と趣旨を掲げ、帝国大学の職員、大学院や分科大学の卒業生と学生、撰科生を会員と規定した自治的組織がつけられた。運動法として、「一、漕艇 二、水泳 三、陸上ノ諸運動」の三つを挙げている(同上、901頁)。その後運動種目も増え、明治30年の『東京帝国大学一覽』からは7部(漕艇、陸上運動、球戯、水泳、柔道、撃剣、弓術)が続き、明治31年より社団法人となつて継続した(同上、905頁)。

東京帝国大学における明治19(1886)年の「運動会」発足を受けて、他の高等教育機関にも同様の組織が設立されていったとされる(同上、907頁)。明治20年には東京高等商業学校が同様の組織を創設し、そして明治23(1890)年には第一高等中学校で「校友会」がつけられた。第一高等中学校「校友会」では、「本校ノ職員生徒及本校ニ縁故アル者ヲ以テ會員」とし、「文武ノ諸技藝ヲ奨励スル」ことを目的として掲げ、文芸、ボート、撃剣、柔道、弓術、ベースボール、ロンテニス、陸上運動、遠足の9部を置いた(第一高等学校、100頁)。東京帝国大学において文芸がその活動として盛り込まれるのは、大正9年に「東京帝国大学学友会」と組織替えしてからであるのに対し、第一高等中学ではこの時点から文芸が含まれており、校友会創設年より『校友会雑誌』を発刊している。この第一高等中学の例にならつて、第五高等中学「龍南会」(明治24)、第三高等中学「壬辰会…後に獄水会」(明治25)、第二高等中学「尚志会」⁽⁴⁾(明治26)、第四高等学校⁽⁵⁾「北辰会」(明治28)の順で校友会組織が創設された(北海道大学、602頁)⁽⁶⁾。

しかしながら、高等中学校の全てが第一高等中学校校友会の影響を受けて校友会的な組

表 1. 高等教育機関における校友会の創設と発展

学校名	校友会設立年	名称	目的	活動年	活動内容
東京帝国大学	明治19(1886)	帝国大学運動部	「第二条 本会ノ趣旨ハ会員ノ身心ヲ強壯快活ナラシメ兼テ交互ノ親睦ヲ謀ルニ在リ 第四条 …目的ヲ達センカガため左ノ運動法ヲ用フ 一、漕艇 二、水泳 三、陸上ノ諸運動 第五条 会員ハ帝国大学ノ職員(判任以上) 大学院及ヒ分科大学ヲ卒業セン者、大学院及ヒ分科大学ノ学生撰科生ニ限ルモノトス…」 全39条 「諸種ノ運動ニ由リテ会員ノ身心ヲ強壯快活ナラシメ且運動方法ノ進歩ヲ図ルヲ以テ目的トス」		これ以前より、ボートなどの運動や陸上運動会などは行われていたが、それを統轄するような組織はなかったのではないかと思われる
東京大学 『東京大学百年史通史1-2、資料1』 1984~1985	明治31(1898)	社団法人東京帝国大学運動部	「…運動講演音楽其他の方法に依りて会員の身心を錬磨し健全なる品性及趣味を養成し且汎く一般学生の品性及趣味の向上発達を図るを以て目的とす」	M30頃	漕艇、陸上運動、球戯、水泳、柔道、撃剣、弓術の7部
	大正9(1920)	社団法人東京帝国大学校友会		T9頃	上記に文芸、音楽、庭球、スキーを加えた11部 以後、多くの部が創設されていった
第一高等中学校	明治23(1890)	第一高等中学校 校友会	「本校の職員生徒及本校に縁故ある者を以て会員」 「文武の諸技芸を奨励する為」をもってその設立趣旨文芸、ボート、撃剣、柔道、弓術、ベースボール、ローンテニス、陸上運動、遠足の9部/会長は校長(木下弘次-当時)	M41	規則の大幅改正 「目的は会員の親睦を厚うし身心の修養を図り以て校風を發揚するにあり」 その他、数学物理会、文学会、尚武会など(任意団体)
第二高等中学校	明治20頃 (創立当初)	英語会 運動会	「英語研究ノ為教員及上級生徒相謀リテ…設立シ毎月一回同会ヲ開キ口演會話談方等ヲ演習…」 「職員及生徒ノ協議ヲ以テ一会ヲ設ケ…規則ヲ定メ校長ヲ推シテ会長ニ充テ本校ノ生徒ハ皆會員タルコト奨励…」 「本校生徒ノ氣風ヲ修養シ学生ノ本分ヲ盡スノ目的ヲ以テ文武両道ヲ研磨スルモノトス」 校長を会長とし、文芸部、科学部、武芸部、雑誌部の四部からなる		英語会と運動会については、「伍長制度」とともに、当初の「通則」に規定がなされている その他、数学物理会、文学会、尚武会など(任意団体)
第二高等学校 『第二高等学校史』1979	明治26(1893)	尚志会			本校本部の職員(医学部を除く)、卒業生及び生徒より構成
山口高等中学校	明治21(1888)	校友会	「會員共共に學術を研究し知識を交換し友誼を厚うする」正員「山口高等中学校生徒及同校生たりし者並旧山口中学校本分校生徒たりし者」/準員「何人にも入会金十錢を納めたる者」 再々度改革され、事業は雑誌部・講談部の二部 校長が会長/同年憲法發布祝賀を兼ね第1回運動会 「體育を奨励するを以て目的とす」 「平素運動を奨励し又時々懸賞競技及遠足を挙行す」 各部の發展は相互の対立を醸し、統制の必要	M21頃 M23	柔道、剣道、弓術、野球、庭球、蹴球なども体育活動として月刊雑誌『学友』創刊
山口高校 『山口県立山口高等学校百年史』1972	明治22(1889)	同窓運動会			毎年春秋に大運動会
山口高等商業学校 『山口高商沿革史』1940	明治24(1891)	山口高等中学校同窓会の中に 同窓運動会(規則17条)		M24 M26 M27	組織拡充し職員生徒一同悉く同会入会 柔剣道は正課に 柔剣道を同窓運動会に戻す 岡田校長赴任により士氣刷新と校風振興上、校内各種団体の指導に一層注意/各部の対立を一掃…生徒全般の體育向上と心身鍛錬を
札幌農学校	明治9年(1876)	開識社	弁論や討論を通じて知識を広めることを目的とし、当時の本科生全員が参加。社則及び社長・副社長・書記を置く (その後、尚友社や北海農話会、旭桜社、北辰社など結成)		
北海道大学 『北大百年史通説』1982	明治11(1878)	遊戯会	外国人教師の提案により毎年開催されるようになる 任意の団体ではない 予科の生徒が文章の錬磨を目的に設立 演説討論のグループ 文友会と尚志会が合併し、広く有志に参加呼びかけ 文章・弁舌を錬磨するとともに「会員相互の知識学芸を啓発し、校内の風紀を匡正し、一致団結を鞏固にすること」を目的とした。雑誌『蕙林』発刊、演説談話会開催予科生徒を通常会員、本科生を特別会員、卒業生や教職員を賛助会員とする。		学芸会は予科生を中心とする任意団体で緩やかなもの(最初から予科生180人中140人と本科生の一部、教員の過半が参加。全学的な校友会ではない)
	明治23(1890)	文友会(予科)			
	明治24(1891)	尚志会(予科)			
	明治25(1892)	学芸会(予科)			

織を設けたとは言えないようだ。その設立より前の明治21（1888）年、山口高等中学校に学友会が設けられている。これでは、「会員相共に學術を研究し知識を交換し友誼を厚うする」ことを目的とし、「山口高等中学校生徒及同校生たりし者並旧山口中学校本分校生徒たりし者」を正員、「何人にも入会金十銭を納めたる者」を準員と定めている（山口高校、87頁）。事業内容は雑誌部と講談部の二部からなり、運動部はこれに含まれていない。そして明治24年には同窓会と改称し、体育を奨励することを目的に、職員生徒一同で構成する同窓運動会が作られた。高等中学以外の高等教育機関である札幌農学校では、明治9年の創立当初より開識社のような学生の任意団体は少なからず設立されたが、明治25（1892）年になって予科生を中心に文章、弁舌の錬磨を目的とする学芸会が発足し、大規模な組織となる。しかしこれも任意団体であり、全学組織とは異なる。高等中学校が第一高等中学校の例にならったのとは異なり、札幌農学校学芸会の場合、直接の影響はなかったようだ（北海道大学、605頁）。

このように高等教育機関では、明治20年代半ば頃までに、全員の強制加入ではなくとも、会則等を含む全学的な組織がつくられ、活動内容については運動のみ、文芸のみ、両方を含むものなど様々であるが、確実に活動が展開されていた。

4. 中学校校友会の設立経緯と形態

本節では、表2⁽⁷⁾と学校史や校友会雑誌の記述から、中学校校友会の設立経緯とその発展について概観する⁽⁸⁾。表2は、学校史などから設立年や目的、構成員、活動内容とその変遷についての記述をまとめたものであるが、そうした項目が欠けている資料があるなど、十分なものとはいえないことを断っておく。

(1) 設立時期

何をもって「校友会」とみなすかによって設立時期は異なる。卒業生中心の同窓会を含めるか否か、運動部のみ、文芸関係のみの活動組織、あるいは運動と文芸の両者が統合されたものとは設立時期が異なる。また、生徒の自主的活動による任意団体の成立を含めるか、会長を校長とする学校側中心の活動となってからを始まりとするのかによっても異なってくる。基本的には、規則・会則などを伴った、生徒と教員を含む全学的な組織の成立をもって校友会の始まりとするが、これと曖昧な基準にすぎない。ここでは若干範囲を広くとって校友会の設立過程をみていくこととする。

全学的な組織が形成される以前、中学校には実に様々な集団が結成された。東京府尋常中学校（以下、東京一中）で作られたAS（Athletic Sports）会（明治19年頃）や他中学校に見られる生徒のみの撃剣団体のように、運動のみを目的とする集まりがあった。文芸

のみの集まりとしては、同じく東京一中の以文会（明治20年頃成立）があるが、さらに以前の活動として以下のような記述がみられる。「明治一三年一月一二日、第六級生利根川倍太…ほか九名の生徒が、『毎日曜日、演舌の練習をしたいので、五番教室を借用したい』と願ひ出てきたので、学校はこれを許可した。生徒は熱心に演舌を錬磨する一方、「演舌会」という組織を作って学校に届け出たため、学校側はこれも許可した。…その活動状況を見ると「本日演舌会」という記事が学校日誌に散見しており、また休憩時間中に、有志が一般生徒を相手に演舌を試みている様子が記されている（明治一七・三・一九「日誌」）」（日比谷高校、389頁）などの例である。自由民権運動が盛んになる中、生徒の弁論団なども散見できる（岩手中学、福山中学など）。

生徒が中心となった自主的な団体は、明治19年以前より結成されている場合が少なくない。学校が中心となって設立し、運動・文芸両活動を兼ね備えた組織が整備されたものにおいても、各学校による差異が小さくない。東京一中（当時、尋常中学）などは明治23（1890）年と早い方であり、既に生徒の参加を義務付けている一方、熊本中学では従来の構文会と運動会を統一した校友会が創立されたのが明治38年、前橋中学でも運動・雑誌・講演の三部からなる学友会に改正されたのは、明治35（1902）年のことであった。

ここで主に取り上げている「中学校令（明治19）」によって成立したような歴史の古い中学校（表2ではnoに下線で表示）では、明治27年頃まで、遅くとも明治30～31年頃までには運動、文芸、雑誌発行などの活動内容からなる校友会が成立している⁽⁹⁾。しかし、先ほどの熊本中学や前橋中学のように明治30年代後半の例、松本中学校「体育会」のように運動中心の活動といった例もある。

明治20年代後半より一府県に複数の中学校が設立されていったが、そうした学校では創設当初より校友会が設けられることが多い。例えば、明治34年4月に創立された東京府立第三中学校ではその年の11月に校友会が創設され、同年開校の山口県立徳山中学校もすぐに校友会雑誌を発行している。その一方、大阪四中のように、創立された明治28年（1895）に体育会は設けられたが、体育だけでなく講演会などの活動を行う有信会が成立するのは明治44年（1911）になってからという例もあった。このように、各府県で二校目以降の学校は、最初の中学校を手本として最初から創設する例が多いが、そうした学校の中には、それまで県内唯一の尋常中学校の分校であったり、私学から県立に移管されたりした学校もあり、独立する前から、何らかの組織をもっていた場合もある。あるいは、学校の置かれた状況などによって、設立が遅れるケースもあったようだ。

(2) 名称、目的および会員規定

校友会組織が設立され始めた明治20年代には、運動のみの組織、文芸のみの組織などもあって、様々な名称がつけられた。表2に示した中学校では「校友会」が最も多く、「学

友会」がこれに次ぐ。「共同会」(山形)、「学会会」(会津)、「遊方会」(新潟)、「知道会」(水戸)、「創立会」(松本)、「運動会」(浜松／岐阜)、「文武会」(富山)、「興風会」(福井)、「尚武会」(武生)、「崇廣会」(彦根)、「体育会」(大阪四)、「交友会」(姫路)、「尚志会」(岡山)、「済美会」(津山)、「同窓会」(広島)、「望洋会」(宮崎)など多様な名称が見られる⁽¹⁰⁾。明治期を通じてこうした名称で継続する校友会組織もあるが、組織の統合や学内の校紀刷新のため、新たな名称となるといった例もある。熊本中学では、明治38年に「運動会」と「講文会」が統一されて「校友会」に、大館中学でも明治36年に「鍛錬会」と「文学会」がまともって「校友会」となった。この他にも、従来の組織を統合して新たな組織を創設した学校は多い(静岡中学など)。安積中学の場合、明治25年に「本校卒業生及五年生ハ必ず會員タルノ義務ヲ有シ…在校生ハ會員タルコトヲ得」として「同窓会」を創設したが、大正1年に「同窓会」の実績が伴わないとして組織を二つに分離し、そのうち一つを「学校を中心として専ら在校生の身心錬磨を目的」とする「校友会」を足させた。

次に、校友会規則に定める目的を表2より概観する。東京帝国大学及び第一高等中学のお膝元にあり、明治23年という早い時期に、「全校を一团とした」校友会組織、「学会会」を創立した東京一中(当時、尋常中学の場合も表2の表記を使用)では、「心身の発達及會員相互の親睦を図る」ことを目的とした(下線部筆者…以下同様)。さらに明治25年に「校友会」を設立した大阪一中では、「文武諸技芸を攻究錬磨して德智体三育の発達を幫助し兼て會員の厚誼を厚くすること」、明治26年に「学会会」創設の愛知一中では、「…生徒ノ徳性ヲ涵養シ智識ヲ琢磨シ身体ヲ強壯ニスルコト」を目的として掲げている。また、生徒自らが作った岡山中学「尚志会」も、「互ニ智識ヲ交換シ友誼ヲ厚クスルノ趣旨」を以て設けられ、同じく生徒創設による新潟中学の遊方会でも「生徒をして自から徳性を修養し、身体を強壯にし智識を増進せしむることを期す」とされている。知徳体の三育や文武諸芸の発達、會員相互の親睦といったことが、目的として掲げられた。生徒の自発的組織であろうとも、同様であった。高等教育機関の目的を見ると(表1)、東京帝国大学運動部は「會員ノ身心ヲ強壯快活ナラシメ兼テ交互ノ親睦ヲ謀ル」こと、第一高等中学校校友会では「文武ノ諸技藝ヲ奨励スル」こと、山口高等中学では「會員相共に學術を研究し知識を交換し友誼を厚うする」ことを目的としており、表現こそ異なれ、その目的に大きな差異はない。

しかしながら、校友会の設立はこうした表向きの目的ばかりではなく、別の目的もあった。大阪一中では、「生徒各種ノ小団体ヲ為シ、運動会ヲ開クアリ、演説会ヲ催スアリ、撃劍ニ柔術ニ各其挙ヲ異ニシ、甲乙多少相擠排スル傾ナキニアラズ、且一己ニシテ各団体ニ加入スルモノニ至テハ其費途從テ多キヲ免カレズ、故ニ之ヲ管理スルニ於テ不便少カラズ…加之如斯ハ生徒ヲ相統一スルノ所以ニアラザルヲ以テ、遂ニ本会ヲ設立スルノ議ヲ決

スルニ至リシモノナリ」(北野高校、286頁)、つまり各種活動を秩序づけ、費用がかさむことに対する父兄からの苦情に対応して効率的な活動をするために、校友会を設けたとする。また弘前中学では、「創立以来各種の團體對立し、互に相互の親睦を圖り、氣風の養成を勉めしが、既に卒業生を出したることとて、相互連絡の必要を感じたるより、機運漸く熟し、共通の目的の許に、一致して一團となるに到れり」(弘前高校、17頁)と述べている。つまり各種団体の対立があったので、それをなくし協調して一つにまとめようという意図で、校友会を設けたのである。さらに、対立は校内だけにとどまるものではなかった。明治10年代後半から市内各所にできた町道場では、心身の鍛錬とともに演説などの錬磨も行っており、そこに生徒たちも通っていた。東奥日報(明治24年6月20日付)によると、「学生間に一種の流行生じ、雑誌會、演説會、談話會、何會等の組織をなし、作文辯論の練習をなすはよけれど、課業を軽んずる者少なからず、隊を連ねて觀劇し、酒を酌み、肴をよび、學生らしからぬ風をなす者あり」(弘前高校、18頁よりの再引)といった觀を呈していた。こうした学外団体と学内団体は結びつきがあり、学内で「四社が併立して学力その他あらゆる点で對立競争した」(同上、18頁)。その他の中学校でも、同窓生との對立の例は多く、松江一中(当時、尋常中学)「同窓学生会」は、「学校と卒業生とからの二元的な指導を受ける性格のものであることが問題であり、そのことをめぐって、学校と東京出雲学生会との間にいささかの紛糾があった」ので⁽¹¹⁾、中学が「赤山に移ったのを機会に、学校は同窓学生会を改組しようとし卒業生もまたこれを理解し、同窓学生会は新しい学友会に發展することとなった」(松江北高校、346頁)。さらに、「教員が發起人となって、本校出身者および第五学年生たちに呼びかけて、校友会を結成し」(城南高校、71頁)、後に新組織たる同志会を結成するまで卒業生が主体となって活動したという徳島中学の例もある。以上のように、同窓生や地域の青年集団など外からの影響があり、その他にも学内における出身地域ごとの集団、寄宿生と通学生など、様々な集団間の對立があって、これらを排除するために学校主体の校友会組織を新たに作る、あるいは刷新して学校側の力を強くし、生徒を全員参加させ、生徒の活動を学校の管理下に置くことが大きな目的であった例は少なくない。

次に校友会の構成員についてである。生徒と教職員とから構成される場合が多いが(生徒が正会員、教職員は特別会員となる場合が多い)、生徒のみ、卒業生と在校生を中心とするもの、一時的ではあれ教員と第五学年生および卒業生という例も見られる。全学的組織が作られる以前、特に明治20年代半ばより前には、寮生・通学生別、活動内容別、地域別に構成された生徒のみによる様々な任意団体が見られた。また会への参加も、東京一中のように生徒・職員とも会員の義務を負う学校、会津や静岡のように生徒の入会を義務付ける学校もあれば、広島一中の同窓会のように「会長たる校長以外の職員は同窓会にまったく関与せず、生徒も全員は入会していなかった」(国泰寺高校、220頁)などとする学校

表2. 明治期における中学校校友会設立とその発展に関する一覧表

no	学校名	校友会設立年	名称	目的	活動年	活動内容
1	札幌中学校 (M28設立) 北海道立札幌 南高校『百年 史』1997	明治28(1895)	學友会 (北鳴学校学友 会の継承)	「…会員相互ニ友義ヲ重ジ親睦ヲ旨 トシ智徳体ノ発達ヲ計リ以テ學校 ノ隆運ヲ図ルヲ目的トス」	M29	演説部、遊戯部、雑誌編集部、会計部
					M35	11月に創刊号、翌年2月に2号発刊 遊戯部から武術部（銃剣、柔道、 射撃、弓術）が独立
					M41	遊戯部の一つとして野球部創設 (M34に師範と試合) 大弓部、ローンテニス部開始 「遊戯部」→「運動部」(遊戯会→運動会)
2	青森県立第一 中学 (後、弘前中学)	明治25(1892)	校友会	「…創立以来各種の団体対立し…相 互連絡の必要を感じたるより、機 運漸く熟し、共通の目的の許に、 一致して一団となるに到れり。」 会長、役員は全て生徒/加入は任意 校長が会長となり、副会長は生徒 「本校生徒は必ず校友会々員たるべし」 「職員及び職員たりしもの」は賛助員	M25	会誌の発行と演説討論会の開催
					M26	運動科が設けられる（撃剣）
					M28 M30	柔術 フートボール・ベースボール
3	岩手中学 岩手県立盛岡 第一高校 『白壁校百年 史』1981	校友会発会前	清猷会、獅子 吼団、修養会 など 武芸部と称す る活動	生徒たち任意の修養団体（演説、 討論、受験） 明治23頃撃剣会という団体。学校 の理解のもと稽古自分たちで…雨 天練習場で稽古しようとした。学 校ではなかなか許可しようとしな かった。明治28放課後二時間の条 件で許可 明治31仙台の第二高等学校から笠 原寛美、馬場新一の二人のコー チを招き、本格的な野球を教わった 「本校生徒相集り」文ヲ講シ武ヲ修 メ志気ヲ振ヒ交誼ヲ厚ウスルヲ以 テ目的トス」「会員ハ本校現在生徒 ヨリ成リ本校職員之ヲ奨勵ス、但シ 卒業生及ビ半途退学者ヲ特別會友 トス、特別會友ハ務メテ本会ノ為 ニ盡スヘキ…」撃剣部、柔術部、 野球部、雑部（主に水泳）	M19	東京で野球を覚えてきた二人の教 師、増嶋文二郎、多田宏綱が中学 生達に野球を教えた。 (東京へ派遣されたメンバーか?) 新築の校舎の付近で「抛石」や「投 球」をして遊んで、壁に傷をつけ たり窓を破ったりする…
					M20	運動会で使用する皮球やバットを購入
					M37 M42 M43	庭球部 雑部蹴鞠部 氷滑部（スキースケート）
4	秋田中学 秋田県立秋田 高校 『秋高百年史』 1973	明治25(1892)	校友会	「職員生徒共同融和シテ徳性ヲ涵養 シ知識ヲ増進シテ身体ヲ鍛錬セシ ムルノ目的ヲ以テ校友会ヲ創設 ス」 「本校生徒ヲ以テ組織シ本校職員ヲ 以テ賛成員、卒業生ヲ以テ特別會 員トス」	M26	講演部、雑誌部、体育部（柔術、 剣術、運動会）の三部
					M30	講演部：以前から弁舌を振るう場 はあったが…
					M33頃 M35	体育部：剣術、柔術が課外活動と して実施 「校友会誌」創刊 はじめてボート競漕 野球、脚球、庭球 チャレンジカップ争奪第一回野球戦開催 琵琶湖端艇競漕大会優勝 体育部は陸上運動部（武術、野球、 庭球）と水上運動部（漕艇、泅水）に
5	大館中学 (M32創立) 秋田県立大館 鳳鳴高校 『大館鳳鳴九 十年史』1988	明治32(1899)	鍛錬会	「本会ハ神氣ヲ養ヒ胆力ヲ練リ併セ テ精神ヲ強健ニスルヲ以テ目的 トス」全員加入の義務付け 内容としては、体操の他撃剣、柔 術、炮烙訓練、遠足、行軍、学術 旅行、徹夜、夜行、水練 会則によって運営され、言葉のな まりなどを矯正するために演説、 討論、作文朗読を行わせる 文芸部（雑誌部・講談部）と運動 部（撃剣弓術部、柔術相撲部、球 技部）。従来の文学会、鍛錬会廃止	M32	
					M36	
					M36(1903)	校友会
6	仙台第一中学 宮城県立仙台 第一高校 『仙台一中一 高百年史』 1993	明治30(1897) 明治31(1898)	学友会	撃剣・柔道を一部、野球・庭球・ 蹴球を二部とした 第三部として弁論・雑誌の二部が 設置された (生徒の自主的活動が活発に) 三部制を改め、ボートを加えて9 部になる	M30	以前は同志での活動：如蘭会、健 児会は有志の集まり
					M31	
					M36(1903)	

no	学校名	校友会設立年	名称	目的	活動年	活動内容
7	山形中学 山形県立山形東高校 『山中・山東野球部100年』1994	明治29(1896)	共同會頃?		M26頃 M29 M32 M39	ミシガン大学の卒業生で当時山形にいた田中玄黄によって菅野富三郎らに伝えられた。英語教師となった田中が転出して後も生徒らはナメシ革屋に頼んで、鉛塊を入れた革のボールを作ったり、バットを指物屋に作らしたりしたもの…うまく行かず… 共同会雑誌の発行 (M29.1-5号) 共同会に野球部を置く/第二高等学校よりコーチ招聘 米沢中學興譲館寄宿生吾と試合/師範学校との試合 米沢中學との対抗戦は続く (共同会雑誌に概) 早稲田よりコーチ招聘
8	安積中学 福島県立安積高校 『安中安高百年史』1984	明治25(1892)	同窓会	「二条 …會員相互ノ交誼ヲ厚ウシ互ニ裨補誘導スルヲ以テ主眼トナス 三条 本校卒業生及五年生ハ必ず會員タルノ義務ヲ有シ半途ニシテ転学セル者並ニ在校生ハ會員タルコトヲ得」 (卒業生と在校生からなる) 報告書を年四回発行することとした 運動活動は規定無し 右の運動部とは別組織	M23 M24 M25 M27 M32 M36 M37 M43 T1	雑誌『扶桑の花』発行-校友ばかりでなく一般にも開放会員一ヵ月10銭宛徴取、一般購読者は7銭(7号より6銭) ベースボール会(運動団体結成) 撃剣及弓術(志望者有志) 談話会/大運動会(前日は野球及弓術、後日は普通の運動競技) 茶話会 会津中学との野球試合 庭球(…今夏は東都慶應より撰手二名を招きて十日間計り練習をやった) 第二高等学校で奥羽六県中等学校の連合大運動会(撃剣参加) 野球 福島中学とも交流。さらに仙台一中や宮城二中 柔道・剣道部そろって会津中学に遠征 校友会は特別会員(教職員)、通常会員(在校生)、賛助会員校友会会長は学校長、副会長は首席教諭、評議員は特別会員の中より委託し、各部長も特別会員を当てるという性格が強いものであった。 活動:春の陸上大運動会、春秋に各部の大会、学期に一回の雑誌発行「館友会雑誌」 九部(総務、剣道、柔道、弁論、雑誌、野球、庭球、弓術、会計) (剣道、柔道、弓術、弁論は校友会の発足と共に部活動として考えられるようになったようだ)それまでは土日に指南を受ける
9	会津中学 (M34県立移管) 福島県立会津高校 『会津高等学校百年史』1991	明治26(1893)	学而会	当時の四年生が校長に許可願いを出す 「…生徒の数益々増加し、且転学生徒ありて他校の悪風を伝へしを以て、自然美風の汚染するは免るべからざる事に属す。是を以て校風の修養を第一主眼とする 一の校友会を設くるの必要を生ずるに至れり…」 発起人の一人 山浦八弥氏『学而会雑誌』16号 「第一条…校風を修養し智識を交換し及交誼を厚うするにあり」(学生からの提案により設立) 「本校生徒は必ず会員となる義務を有する」	M25 M32 M34 M35	「全校生徒は猪苗代湖に行き、舟をうかべて壮遊をなす」これ以後春と秋の二回猪苗代湖行の行事は定着(これは学校行事であって、学而会の行事ではない) 庶務、会計、図書、運動(会計も生徒の手で処理)「会津青年会」の影響も 休み時間のフットボール、冬の雪合戦、休日に山や河に出かけるなど 競漕会を挙行 県立中学に移管。学而会規則改正 「錬体部ニ短艇、撃剣、柔道、弓術、野球、フートボール、遠足、水泳ノ九科ヲ設ル」 紅白試合/安積中との対外試合(以降、定期戦)
		明治29(1896)	学而会規則改正			

no	学校名	校友会設立年	名称	目的	活動年	活動内容
10	福島中学 (M31創立) 福島県立福島 高校 『福高百年史』 1999	明治33(1900)	校友会	全生徒・職員を対象とする	M33 M36 M37 M38	撃剣、柔道、野球、庭球、陸上運動、弓術(これ以前にも活動記録) 校友会に雑誌部設け、機関誌として『しのお草』発刊始まる 安積中学との交流試合が行われ始める(庭球) 雑誌部に談話部併設
11	水戸中学 茨城県立水戸 第一高校 『水戸一高百 年史』1978	明治30(1897) 明治31(1898)	校風会、保会、 切磋会 知道会(会則整 備)	学生気風の矯正を目的に様々な会 「平素訓育の趣旨に基きて心身を修練し交誼を敦睦にし以て善美なる校風を養成するにあり」 特別会員：本校職員及嘗て本校ニ在職セシモノ 通常会員：本校生徒/会友：卒業生及嘗て在籍セシ者	M24 M29 M31 M34 M35	M21頃土屋の指導で野球始まり、M24野球部成立 栃木県尋常中学との野球定期戦始まる 講話、英語、雑誌及運動の四部を設く 運動には野球科、柔術科、撃剣科、遊戯科 柔術部の創部 庭球部の創部。周辺学校と試合
12	栃木中学 (M29創立、 M32独立) 栃木高校 『60年史』1958	明治31(1898)	同窓会		M32頃 M34	後校庭で野球の試合/校庭では野球と庭球が盛ん 剣道や柔道では町の道場へ通う者も多かった 柔道部発足 M35撃剣部、M38講話部、M39英語部
13	前橋中学 群馬県立前橋 高校 『前橋高校八十 七年史』1969	明治27(1894) 明治27(1894) 明治35(1902)	学友会雑誌発 刊 協研会 学友会(改正施行) (学友会の成立 は不明)	M23創始の『文藻』(通学倶楽部)を解題したもの学友各自の文章思想を争論し錬磨研究する目的共研会と協同会が合同して通学生一同の組織(寄宿生には矯正会があった)「智識を交換し弁才を養成し友誼を厚くし協同一致…」 雑誌部、運動部、講演部の3部/校長が会長、副会長及各部取締は職員が就任	M27 M28頃 M36頃	この頃野球が誕生。師範学校との試合ローンテニス、柔術などが行われるようになった 記録に残る最初の運動会「立錐の余地なし…」 部費は雑誌5、運動4、講演2の割合で雑誌部が優遇される 県立学校聯合運動会開催
14	千葉中学 千葉県立千葉 高校 『創立百年』 1979	明治24(1891) 明治30(1897)	同窓会雑誌発行 校友会	従来生徒の一部に作られていた「中友会」を解散し千葉中学校校友会を組織「心身を修練し会員の親睦を図るを以て目的とす」	M30 M32 M35	撃剣部、柔術部、遠足部、野球部、端艇部、陸上運動部、弓術部と雑誌を発行する雑誌部 「千葉中学校校友会雑誌」初号発刊 庭球部を設置する
15	東京府立第一 中学 東京都立日比 谷高校 『日比谷高校百 年史』1979	明治23(1890)	学友会	新たに全校を一団とした学友会を創設 「目的ハ心身ノ発達及会員相互ノ親睦ヲ図ルニ在リ」 「…東京尋常中学校生徒及職員ヲ以テ組織スル」 「生徒及職員ハ会員タルノ義務アルモノトス」 「会頭一名 本校校長ヲ以テ之ニ充ツ」	M17-9 M20頃 M23 M24 M27卒業 M32	AS会創設(アスレチック・スポーツ)以文会(学友会創設により解散) 文芸、武術、運動、遠足、游泳、漕艇 茶話会、雑誌部、撃剣部、漕艇部、運動部、遠足部、游泳部 「…野球、庭球はまだ尋中には輸入されて居りませんでした。蹴球は校庭内でチラと片影を見たやうな気がしますが…」 運動部に競走科、ローンテニス科、野球科を創設
16	東京府立第三 中学 (M34創立) 東京都立両国 高校 『両国高校百年 誌』2002	明治34(1901)	校友会	独立と同時に設立 「会員ノ心身ノ修養ヲ圖ルヲ以テ目的」	M34 M35 M36	武芸部(撃剣部、柔道部) 遊技部(野球部、庭球部) 遊戯部遊泳部 野球部廃止
17	東京府立第四 中学 (M34創立) (M27城北尋 常中学)府立 扱い 東京都立戸山 高校 『府立四中・都 立戸山高百年 史』1988	明治27(1894)	校友会	校友会誌「城北」創刊(城北尋常中学の発足時から) (運動部などは不明)	M27-8 M35前 M40 M43卒業	ボート部-隅田川の貸船屋かた特約で借り、先輩コーチのもと練習 毎年運動会があり、競争や競技 撃剣は校庭でやりましたが、柔道は道場がなくでできません。テニスもダメ、水泳は危ないというのでやらせてもらえない。 強固な石と頑健な身体を鍛えるため、隅田川の水泳訓練が始まる(水泳場開設) 体育の方面については、もっぱら銃剣道が奨励され軍事教練も盛んであったが、戸外運動としては、わずかに器械体操と庭球が許されていて、他校で行っていた陸上運動会は野球などは一切禁止であった。などは一切禁止であった。

no	学校名	校友会設立年	名称	目的	活動年	活動内容
18	神奈川県立第一中学 (M30創立) 神奈川県立希望ヶ丘高校 『神中神高希望ヶ丘高校百年史』1998	明治33(1900)	校友会	「職員生徒一致協力して、智徳を研ぎ、体力を強め、情操を陶冶し、併せて全員相互の親睦を厚うし、健全なる校風を作興せんとする目的」	M33	文芸、武芸(運動遊戯其他体育に関する事業)、庶務の3部雑誌部、野球部、剣道部が上に属する
					M35	校友会誌創刊
					M40	水泳部
					M43	庭球部
M44	柔道部					
19	新潟中学 新潟高校 『青山百年史』1992	明治27(1894)	遊方会 (生徒自らが結成)	「生徒をして自から徳性を修養し、身体を強壯にし智識を増進せしむることを期す」 (M28には遊方会の中に談話部、撃剣部、端艇部、ベースボール部、休課日遠足部が設けられていた)	M26	撃剣部創立…遊方部設立前だったので体育科に…
					M27	端艇部撃留場設置、端艇三隻…生徒最大の楽しみ
					M31	ベースボール部の発会式 遊方会雑誌創刊
20	松本中学 長野県立松本深志高校 『九十年史』1969	明治21(1888)	創立会	卒業生により東京で開かれる卒業生・在校生含めた同窓会の必要を感じた中学校 職員の首唱により…毎夏に行われた雑誌「校友」発刊(創刊号に、この頃の生徒創設による諸会を掲載…実業会、普通学会、修文会、報国会など)(その後M30までで中断し、M33に新たに1号発刊)	M28	雑誌「校友」の発刊/M33「校友」再刊
					明治24(1891)	創立会
		明治28(1895)	各部を統合する学内組織はまだ見られず		M30	野球部の創設をみる
					M33～	テニスが盛んになってくる
					M36	聯合運動会始まる(長野師範、松本、長野、上田の各中学)中学というように持ち回り。M35に組織はできたが、始まったのはM36。野球、庭球、撃剣の三種類(その都度県の許可)
明治34(1901)	各部を統合する学内組織はまだ見られず	庭球、野球、角力、柔術、撃剣、弓道の六部(「校友」) (対抗競技も行われるようになる)				
21	静岡中学 静岡県立静岡高校 『静岡高百年史』1978	明治24(1891)	柔克会の結成	「生徒中有志者相会して柔克会を組織し教師を聘して柔術を練習したり後又剣術をも合せて練習」 「文弱之弊を矯め尚武の気象を養成するを以て眼目となし併せて体育護身目的を以て成り立つ」 「生徒の学業及び体育奨励の為め学友会を組織したり」 柔克会と学友会を廃止し、校友会結成(柔術、剣術、弓術、野球四部をおき、生徒は少なくとも一つの部に入ること)	M23頃	野球の術…始まる M28頃より「其技甚だ見るべきものあるに至れり」
					明治25(1892)	学友会
		明治29(1896)	校友会		M32	水泳部
					M34	ローンテニス部
22	浜松中学 (M28三郡町村組合会中学支校を廃し浜松尋常中学を設立) (M31県立移管) 静岡県立浜松北高校 『浜松北高百年史』1994	明治27(1894)頃	運動会	「本会の始めて起るや運動会の名を以てし全校員を以て組織せり…」 運動会と称して出発し、M30に校友会へ 「身体の發育強健を謀り尚武勤儉の気風を養成し、併せて会員相互の親睦を期すること目的」 柔術、野球/運動、遠足、茶話、雑誌発行	M27	剣術：創立より寄宿舎で剣術が行われていた
					M27	野球：静岡中より転校したる二、三人の人々の指導の下に、多少技を練るに止まりしもの如し
		明治30(1897)頃	校友会		M30頃	校友会雑誌発行
					M30	愛知一中との試合 「未だ一定セル仕合規則ナク其不便一ニシテ足ラズ」 撃剣、柔術、弓術、野球、雑誌/雑誌発行、遠足、茶話
23	富山中学 富山高校 『富中高百年史』1985	明治27(1894)	文武会	「万国と対峙して大小国権を伸張せんとする時にあたり文を講し武を練り徳義を励磨する」 智徳体の三育養生を目的とし、毎月一回会合を開き遊戯運動か演説談話を行う(創設時の会則) 入会義務のある在校生が通常会員、かつて在校した特別会員、知識・名望ある客員(教員はこれにあたる) 校長と生徒との対立による生徒等による演説会や懇話会を催す会が沢山できる	M27	柔道が新任教師とともに取り入れ/撃剣もこの頃 ベースボールの校内試合/「文武会誌」発行
					M28	フットボールも加わる
					M28	体操科の一部として剣道(M27)柔道(M28)
		M36	短艇部(M38に文武会へ)			
		明治32(1899)	文武会解散			
明治33(1900)	文武会復活					
明治35(1902)	誠心会など					

no	学校名	校友会設立年	名称	目的	活動年	活動内容
24	高岡中学 (M31創立) 富山県立高岡 高校 『高岡中学・ 高岡高校百年 史』1999	明治32(1899)	校友会 (M31の高岡尋 常中学 でも校友会が あった。 M32富山県第 二中学) 改正	「本校教訓ノ趣旨ニ基キ知徳ヲ錬磨 シ体軀ヲ陶冶シ會員相互ノ親睦ヲ 図リ本校ノ名譽ヲ顕彰スル」を目 的とする」通常会員は在学生徒、 特別会員は現任の職員 雑誌部、運動部(撃剣柔術其他)、 演説部の三部 庶務、文芸、陸上運動、水上運動、 武術、会計の5部 (陸上:野球、庭球、蹴球、角力、 走技/水上:端艇、水泳/ 武術:撃剣、柔道、弓術、射撃)	M31 M32 M33 ◎	校友会で運動会を開催(毎年)… 少し遅れて?端艇競漕会もベース ボール競技を行う 会誌『古城』発刊(年3回発行予 定であったが創刊号のみ) (M37から『校友会会誌』 校友会組織とは別に、生徒やOB が出身地域をもとに自主的な団体 組織し、成績、四高入学率、スポー ツ、弁論大会で優劣競う宝山会、 芙蓉会、水岡会、志貴野会、以文 会、両波会など
25	金沢一中 石川県立泉丘 高校 『金沢一中・ 泉丘高校百年 史』1993	明治31(1898)	校友会	学校側が…校友会の設立・育成に力 を入れるに至ったのは、単に課外 活動の拡充を期したというより も、生徒の活動を教官の指揮のもと に組織づけることに主目的があった ようである。」 会頭・副会頭…校長・首席教諭… 校友会を構成する三部長・副部長 も教官…学校側の主導力は極めて 強く、その構造のなかに生徒自治 の執行機関は見当たらない。	M29 M31 M32 M34 M41	第一回陸上運動会 講談部、運動部、編集部 の3部制 校友会誌 学芸部、武道部、運動部、会務部 の4部制 武道部に柔道、剣道、弓道、運動 部に陸上運動、水上運動、 陸上運動部を野球及蹴球部、庭球 及遠足部 水上運動部を端艇部、漕水部
26	石川県立第四 中学 (M32創立) 石川県立小松 高校 『小松高等学 校百年史』 1999	明治35(1902) 明治39(1906)	校友会	校友会誌創刊 「本校教訓ノ主旨ヲ体シ、徳ヲ養ヒ 智ヲ進メ、体ヲ健ニシ、純良ナル 校風ヲ発揚シ、併セテ同窓相互ノ 交誼ヲ厚クスルニアリ」生徒を普 通会員、職員を特別会員とする	M40	学芸部(文学・科学・図書・音 楽)、運動部(陸上運動・水上運 動)会務部(庶務・会計)の三部 (運動部には撃剣、野球、庭球、水 泳などがあったようだ)
27	福井中学 福井県立藤島 高校 『百三十年史』 1988	明治32(1899)	興風会	心身を鍛練して、士気を鼓舞しな がら善良な校風を養成振興すること (四カ条)	M32	野球部、庭球部、弓術部を設置/ 随意科として柔道科新設
		明治41(1908)	校友会	職員と生徒が親睦を深め、現在の 部活動を統べるものとして、従来 バラバラに活動していた各部が改 めて公式に許可され、部活動にお ける経費も本会から支弁…	M41 M43	校友会規則を制定 校友会誌「明新」発刊
28	武生中学 (M31創立) 福井県立武生 高校 『武生高等学 校百年史』 1999	明治31(1898)	尚武会	各種競技運動の奨励・心身の鍛練 を目指した		撃剣、柔術、大弓、ベースボール、 ローンテニス、競走、角力、遊泳 のどれかを始業前および放課後一 時間練習することが義務づけられ た(柔道はさかんでない)
		明治40(1907)	同窓会	卒業生だけの組織。卒業生が300人 に達したので、規則を定め、会報 の発行を始める		
29	愛知県立第一 中学 愛知県立旭丘 高校 『競光百年史』 1977	明治26(1893)	学友会	「生徒の徳性を涵養し智識を琢磨し 身体を強壯にすることを目的とす」 講談、競技、雑誌の三部(これま では三会)競技部は撃剣、柔道、 弓術、フットボール、 ベースボール、相撲の六種類	M27~ M32 M34 M36	戦争の影響で撃剣、柔術を学科と して全生徒に…その後衰微(M44 ~正課となる) 外国人とのローンテニスの試合 ベースボールは京都に初遠征 端艇部創設 質実剛健を旨とする校長訓示、運 動奨励
		明治33(1900)		第一中学学友会規則を定める(運 動部に重点) 撃剣、柔術、ベースボール、フー トボール、ローンテニス、クロケー		
30	愛知県立第二 中学 (M29創立) 愛知県立岡崎 高校 『岡崎高校九 十年史』1987	明治34(1901)	学友会 頃?	創立当初「運動部・文化部等スポー ツはまだ何も始まらず、体操の他 は、舎生は…付近の各地を散歩…」 「生徒中にて組織せる学友会発起に なれるボートレース」が明治34年 8月に開かれたようだ 大正2(1913)、学友会を運動部と 学芸部に二分	M30 M33 M34	新校舎移転後、有志によって野球 部活動開始 ボート部(校長主導)、柔道部活動 開始(剣道もこの頃か) 庭球部活動開始

no	学校名	校友会設立年	名称	目的	活動年	活動内容	
31	岐阜中学 岐阜県立岐阜 高校 『岐阜百年史』 1973	明治20(1887)	運動会設立	野球部、柔剣道部に発展していく母体 (このとき一チーム30人のフート ボールが師範との間で)	M19	図画教師平瀬の教えた「ベース」 (野球)も…遊技の一つとして伝達 されたものであろう。	
					M20	中学の「運動会」とは別に、中学 と師範の生徒を中心に小学生も参 加した大運動会が開かれ、フート ボールなど行われる	
		明治27(1894)	運動部		M21頃	英語教師辻秋徳はアメリカ帰りの先生 で、この辻が本物のベースボールを紹 介して中学の野球に本筋を入れた	
					M27 M28	第一回の撃剣大会、ベースボール大会 学術講談会雑誌40号で発禁に(夏 休み除き毎月発行か?)後、「華 陽」に引き継がれる	
M32	華陽会規則改正:撃剣、柔術、野球、 端艇大会を年2回開催に(いつから華 陽会になったかは資料不足のため不明)						
32	三重県立第二 中学 (M32創立) (後、富田中学校) 三重県立四日 市高校 『四日市高等学 校七十年史』 1971	明治32(1899)	校友会	「本校訓育ノ主旨ニ従ヒ心身ノ錬磨 ヲ図リ併セテ会員相互ノ情誼ヲ厚 クスルヲ以テ目的トス」 武芸部、陸上運動部、水上運動部、 文芸部の四部 通常会員の生徒の他、職員を特別 会員、卒業生を在外会員とした(会 長は校長)	M32	野球部(陸上運動部)五県連合大会や 三高主催関西野球大会などへの出場	
					M33	撃剣部(武芸部)新藤流の師範を 指南車とし、M35には武徳会青年 演武会へ9名を派遣	
		M34	柔道部(武芸部)、庭球部(陸上運 動部)、水泳部(水上運動部)柔道 もM35に京都武徳会に出場した 庭球部はM41に師範学校連の大会 で勝利、M42には三重県連合大会 で月桂冠を手にし、さらに三高主 催関西連合大会に出場した。				
		M35	端艇部(水上運動部)				
		M35	端艇部(水上運動部)				
33	彦根中学 滋賀県立彦根 東高校 『彦根東高百 二十年史』 1996	明治23(1890)	芹陽校友会	最初の同窓会組織 「教師と生徒と裏面上の関係を密にす るを第一の目的…生徒各自をして亦 裏面に文を修め武を練らしむる…新 旧相親み長幼相扶るの気風を養成」 「校風を発揚し文武の芸術を練り兼て 本校に関係あるものの親睦を図る」	M27	演説討論部、雑誌部、撃剣柔道部、 陸上運動部、水上運動部を設けた 「崇廣会雑誌」を発行	
		明治27(1894)	崇廣会			M37	陸上運動部が野球、庭球、武術部 へ(庭球部創設)
		明治37(1901)	校友会(改称)				
34	京都府立第一 中学 京都府立洛北 高校 『京一中洛北 高校百年史』 1972	明治25(1892)	講談会・演武会の ようなもの(無名)	教員と生徒の有志が師弟相互の融 和と心身修練の目的で会を作る が、無名で会則もなかった 「本校の主旨を体認し…之を躬行実 践するを以て目的」講談会と運動 会、報告書編輯からなる	M27 M28 M29	運動会:演武会、陸上運動会、水 泳及漕艇 漕艇部の新設 底球部(今の野球部)の新設・対外試合も	
		明治27(1894)	学友会				
		明治26(1893) 明治32(1899)	改正				
35	大阪府立第一 中学 大阪府立北野 高校 『北野高校百 年史』1973	明治25(1892)	校友会	「文武諸技芸ヲ究攻錬磨シテ德智体 三育ノ発達ヲ補助シ兼テ会員ノ厚 誼ヲ厚クスルコトヲ目的トスル」 「本会ヲ分テ文芸部 武術部 運動 部トシ」 「会員 …大阪尋常中学校職員生徒 全体ヲ以テ組織」 「校友会報告」発行 「一致協同を以て本校教育の本旨に 副はんとするに在り」?	M24	熊本謙二郎が着任し一高直伝の野 球を教示	
						M25	自然発生的クラブ活動の盛行に伴 い、それらを包括し、秩序づける 組織が必要になった。職員会で生 徒の意向を考慮して規則/文芸・ 武術・運動の三部
		明治26(1893) 明治32(1899)	改正		M26	この頃武術や漕艇、ベースボール などが盛んにフートボールも現れる	
					M26		
36	大阪府立第四中学 (M28創立) 大阪府立茨木高校 『茨木高校百 年史』1995	明治28(1895)	体育会	運動会など各種体育行事を運営する機関 「専ら身体の強健を図り体育に関する 各種の技芸を鍛錬するを目的とす」 体育のみならず、講演会など多岐 にわたる活動を	M28~ M32 M34	大運動会、小運動会 柔道はじまる フットボール及びローンテニス マッチを行った	
		明治44(1911)	有信会(改称)				
		明治26(1893) 明治32(1899)	改正				
37	姫路中学 兵庫県立姫路 西高校 『姫中姫路西 校百年史』 1978	明治26(1893)	校友会	卒業生の一団(東京、京都、姫 路に支部) 雑誌発行もするが、間もなく中絶。 有志による小団体分立 「本校の生徒たる者は必ず会員とな ること」 会長の校長と幹事の教員以外は生 徒に任せる 生徒間の紛議のため再編成(談話・ 図書・運動・庶務)→後、交友会 の名称廃止。各学年の級会へ	M22	フットボール:既にやっていました …ルールというものはなく混戦乱闘 野球:一高出身の熊本謙二郎氏が 赴任…英字引片手にて 生徒に教えたものです	
		明治20代中頃	同窓会			M21頃	小森校長がきてからベースボール やテニスが発行しかけてきた
		明治20代後半	交友会		M24	庭球:前波先生が…紹介された。 本を読みながら指導された。	
		明治33年頃			M25		

no	学校名	校友会設立年	名称	目的	活動年	活動内容
38	神戸中学 (M29創立) (後、第一神 戸中学) 兵庫県立神戸 高校 『神戸高校百 年史』1997	明治29(1896) 明治29(1896) 明治29(1896) 明治32(1899)	野球会 蹴鞠会 校友会 校友会規則改革	「生徒組織の団体は、不整頓にて且 校内の一致を欠く恨ありければ、 其のままにすべきに非ずして」両 会を合わせ体育を奨励するため、 校友会を設けた。 野球部、端艇部、撃剣部、文芸部 (1908創設の神戸二中もほぼ同文) 「本会ノ目的ハ會員交互ノ情誼ヲ厚 クシ、心身ヲ錬磨シ、一致協力シ テ、長ク本校ノ美風ヲ保タンコト ヲ期スルニアリ。」文芸、撃剣、柔 道(当分欠ク)、端艇、野球の5部 会長は校長、部長にも職員となる など学校の関与による組織で、上 からの校友会に	M29 M30 M32 M33 M35 M41 M42	野球は神戸商業学校、師範学校附 属小学校などと試合フットボール は寄宿生を中心に行われた 武具を購入し有志が始める／翌年 商業学校、師範と試合寄宿舎で組 織的に進んでいたが、校友会に設置 第一回端艇競漕大会／文芸部設置 と創刊号発刊 柔道部 運動選手の品行や選手制度に対す る批判も見られるように一切選手 の遠征を禁じ…『校友会誌』22号 内務部長から姫路中学校長へ対外 競技に対する制限
39	郡山中学 (奈良県独立 M26創立) 奈良県立郡山 高校 『奈良県立郡 山高等学校八 十年史』1973	明治30(1897) 明治33(1900)	学友会	文芸部門(雑誌・弁論)、武術部門 (撃剣・柔道・弓術)、運動部門(野 球・庭球)の三部門からなっていた 校長の統率のもと、教員が部長とな り指導 武術部門に水泳が加わる	M28-9 M31	生徒が野球技を試みるようになる 師範学校前の芝生で師範学校と野球 の対抗戦
40	新宮中学 (M34創立) 和歌山県立新 宮高校 『新高八十年史』 1983	明治37(1904)	校友会	「本会ハ智徳体ノ修養ヲ計リ以テ健 全ナル校風ヲ発揚センコトヲ期ス」	M37 M38 M38	談話部、会誌部、武技部、遊技部、 会計部の五部 武技-撃剣(M36より活動始まる) ／遊技-庭球・野球 柔道始まる 第一号会誌発行
41	鳥取中学 鳥取県立鳥取 西高校 『鳥取西高百 年史』1973	明治22(1889) 明治32(1899)	校友会 校友会(刷新)	運動会規則を設けて第一回運動会を 開催した後、これに手を入れ校友会 とし運動部と文芸部を設けた 「従来の校友会が「萎微寂寥日々渾 沌の域に埋没せられん」状態となっ たので、新たな校友会を…」 「本校教育の主旨と相待ち、智徳体 の三育を奨励して講学の裨補をな し、兼ねて会員の親密を図る」 剣術、野球、蹴球、遠足、兎狩、漕 艇、游泳からなる 運動部と、討論会、雑誌発行の文芸部	M15~ M29 M30 M30 M31~ M32~ M35	撃剣、柔道が行われるようになる 野球部創設 学習院からの転校者により野球盛んに 校友会雑誌創刊 野球の対抗試合始まる 従来の校友会雑誌に代えて「鳥城」 発刊 運動部規則の改正：第一撃剣、柔 道。 第二種ベースボール、ローンテニ ス。第三種ボート、水泳
42	米子中学 (M32創立) 鳥取県立米子 東高校 『創立八十周年 記念誌』1979	明治33(1900)	同窓文武会	文芸部と運動部(撃剣、柔道、野 球、庭球、端艇) 「文武両道ヲ錬磨シ校風ヲ振興シ會 員ノ交誼ヲ親密ニシ兼テ修學ノ裨補 ヲ為スヲ以テ目的トス」(M42以降 の規定?)	M34 M36 M37 (M40)	松江中と対戦し大敗。杵築中など とも対戦 同窓文武会雑誌『米城』発行(文芸 部はそれまで盛んでない) 水泳部創設 学友团组织(生徒自治規定により住 居別に組織、親睦も図る)
43	松江中学 鳥根県立松江 北高校 『松江北高等 学校百年史』 1976	明治19(1886) 明治30(1897)	同窓学生会 学友会	「校長を会長に戴くものでなく、主 として興望ある上級生から会長及び 役員を選出…。兎角生徒本位となり 自然学校側との折合がうまくいかな かった様な弊害」活動は雑誌発行、 講演会開催、体育活動 これまでの会は学校と卒業生の二元 的な指導を受ける性格であり、学校 と東京出雲学生会との間で紛糾も あったので移転を契機に刷新 「本校訓育の趣旨と相待ちて会員心 身の練達を図り兼て交誼を厚くする …」雑誌部、講談部、運動部	M16 M23頃 M26 M26 M33 M34 M34	海軍省払下げの如き二人並び六人漕ぎ 式の Cutter であったにせよ…湖上 の一隅に認めることができた 討論演説に大部分の時間を費し、其他 雑誌発行、ボート競漕などが主なる会 の事業であって、今日の如く、テニス だのベースボールだのと云ふ西洋流の ものは全然なかった。 ボートがスポーツの中心で、宍道湖夜 行一周 京都から帰ってきた兄がベースボール というアメリカの運動を教えてやろう というので…手解きしてもらった 初めて野球で県外中学との試合(鳥取 一中と) 修学旅行できた中学との試合も 校長「大いに体育の奨励を計らん」、運 動盛んに 武徳会第一回端艇競漕会に出場 浜田中学との撃剣柔道試合

no	学校名	校友会設立年	名称	目的	活動年	活動内容
44	浜田中学 (M26創立) 鳥根県立浜田 高校 『浜田高等学 校百年史』 1994	明治27 (1894)	校友会	「一致和合と智識交換及び弁論鍛錬 体育奨励を目的とす」 はじめ校友会は学校の監督は受けるも の生徒だけの組織だったようである	M27	第1回端艇競漕
		明治30 (1897)	校友会改組	「学校以外に独立して唯学校の監督 を受くるに止まりしが…校友会を以 て家族的の一団体となし学校内部の 一機関とし其組織にも亦変革する所 あり」として校長を会長とし、各部 長も教員とした。	M30 M31	第1回の講談会、端艇競漕、陸上運 動会(7月17~19日) 「校友会雑誌」1号発刊
					M33	この時点で、端艇、柔道、撃剣、野 球、庭球は発足していた
45	岡山中学 岡山県立岡山 朝日高校 後神俊文著 『岡山中学事 起源覚書』 1988	明治19 (1886)	尚志会	「互ニ智識ヲ交換シ友誼ヲ厚クスル ノ趣旨」 生徒の自主的活動として組織/新任 教師により校友会の知識 義務づけていないが全員が参加 に。師範の教師も 「尚志会ノ名義ヲ以テスレバ事トシ テ弁ゼサルハ無」	M27 M29	毎月一回運動会、毎月一回演説及討 論会 野球は尚志会の活動として行われた わけではない 端艇は尚志会で管理したものの不完 全なもの 武術の姿微振はざりしは、事情の然 らしむる処にして…旧来…生徒の一 大団結にして教師とは常に折合悪し く…在校職員生徒は必ず会員たるの 義務を負ふものにして所謂表面の中 学校となれり… この頃から、撃剣、柔道、野球、短 艇が盛んに
		明治29 (1896)	尚志会改組	目的ハ岡山尋常中学校ノ練習部トシ テ本校授クル処ノ緒科ヲ活用スル所 以ヲ練習スルニ在リ 運動部は武術(撃剣・柔術)と通常 運動(陸上と水上)		
46	津山中学 (M28創立) 岡山県立津山 高校 『津山高校百 年史』1995	明治28頃	済美会		M38	野球、庭球、撃剣、弓術(生徒全員 入部制) 校内の庭球大会・撃剣大会・弓術大会 高梁中学・岡山中学・金川中学と いった近隣の中学校を迎えての野球 試合などが行われており、京都の武 徳殿での撃剣、六高・岡山医専の主 催する各種の試合もあったが後年の ような大規模なものではなかった。 第一回関西連合野球大会参加
					M40	
47	広島中学 広島県立国泰 寺高校 『広島一中国泰 寺高百年史』 1977	明治27 (1894)	同窓会/後、中断		M25	野球会の組織(M29に同窓会に位置 づけられる)
		明治29 (1896)	同窓会(発会式)	「…関係あるもの一致団結して互に 相親睦し風紀を善美ならしむる」 「会長は校長を推薦し委員は会員中 より」 (同窓会には生徒全員入会ではな く、教員も校長以外は全く関与して いなかった)	M27 M29	撃剣が始められる(M29に同窓会に 位置づけられる) 文芸部と「鯉城」の発刊 当時、同窓会は「同会ノ目的ノ範囲内 ニ於テ委員会ノ決議ヲ以テ校長ニ建言 スルコトヲ得」の他、修学旅行など学 校行事への関与も行っていた校友会は 七部(短艇、球技、剣道、柔道、雑 誌、談話、事務の各部)からなる
		明治34 (1901)	校友会(同窓会 改称)	新たに着任した宮本校長の提案で改 称、会則も改める職員生徒全員が会 員、会長は校長、副会長は首席教諭	M34	
48	福山中学 広島県立誠之 館高校 『誠之館百三 十年史』1988	明治13 (1880)	演舌会	演舌の練習をしたいと生徒が申し出 て許可される	M26	(自由民権運動の最盛期) (反政府言論の影響を心配してか)
		明治14 (1881)	修身演舌会	修身演舌会と改称させられる	M28頃	文芸、武技(撃剣・柔道・弓術 等)、遊技(ボート・ベースボ ール・陸上運動等)/校友会雑誌の発 刊 校内演技として遊技部ベースボ ールや武技部撃剣試合
		明治26 (1893)	校友会	新校長が、教室外における生徒の体 育・文化の自発的活動を促進し、余 暇を善用させる目的で結成に着手 「目的ハ心身ニ関スル諸技芸ヲ奨励 スルニアリ」 「会員ハ本校ノ職員生徒及本校卒業 生ニ限ル…但シ…地方有志者ノ為メ ニ特別会員ヲ置ク」	M31	ベースボール、撃剣などの対外試合 始まる
49	山口中学 (M27まで山 口高等中学の 予科扱い/ M28より山口 県尋常中学)	<明治21 (1888)>	<校友会> (山口高等中学 の組織)	山口高等中学校の予科扱いであり、 山口高等中学の校友会会員規定 には「旧山口中学校本分校生徒たり し者」含む。高等中学の影響下、運 動などは行われていた	M18	山口県立山口中学校で運動会開催
		明治31 (1898)	体育会	「…職員生徒ヨリ組織シ体軀ノ健全 ヲ図リ氣質ヲ鍛錬シ兼テ相共ニ親睦 ヲ厚ウスルヲ以テ目的トス」 撃剣、柔術、弓術、フットボール、 ベースボール、遠足、テニスの7部 文化部として弁論部が入る	M30半	M30年代半ばより文芸誌の発刊や弁 論活動も行われていた
	山口高校 『山口県立山 口高等学校百 年史』1972	明治45 (1912)	校友会			

no	学校名	校友会設立年	名称	目的	活動年	活動内容
50	豊浦中学 (M32独立) 山口県立豊浦 高校 『豊浦高校沿革 史』1964	明治23 (1890)	運動貯金会	1. 本校職員生徒はすべて会員としての義務がある 2. 運動の種類は修学旅行・遠足 3. 競争は漕艇・水泳および戸外の遊戯等 4. 修学旅行は春秋二回に行う 5. その他の運動は適宜 20条までの規約を定める。 (ボート・撃剣・柔術・フートボール・ベースボールなど) 運動貯金会をさらに組織化したもの 弁論芸芸部・球戯部・端艇部・撃剣柔道部・遠足部(後解消)(球戯はベースボール、ロケットニス、フットボールの総称) 運動会も主催		「生徒が中心となって運動貯金会をつくる。その趣旨は、正課で行なう体操や兵式体操だけでは、望むほどの効果もなく、おもしろくないから、英国のケンブリッジ・オクスフォード二大学の端艇競争…オリンピック…を理想として、任意に好むところの運動を盛んにし、体力の発達と強い精神を養うというのである。」
		明治33 (1900)	校友会		M34.1	弁論芸芸部：まちまちの弁論会・雑誌発行を統一／創刊号
51	徳山中学 (M33独立) 山口県立徳山 高校 『山口県立徳山 高等学校百年 史』1985	明治33 (1900)	校友会	「第二条 …体躯ノ健全元気ノ養成及ビ学芸ノ練磨ヲ期シ併セテ会員ノ一致ヲ図ルヲ以テ組織ス」 「第三条 職員及ビ生徒ノ全部並ビニ…縁故アルモノ…」 「第六条 …学芸部、陸上運動部、撃剣部、柔道部、端艇部、水泳部」 (当初活動は陸上運動、撃剣、端艇)		分校時代の運動会寄付金と会員の会費を以て運営
					M35	岩国中学との野球試合／県下五中学校連合撃剣試合
					M36	6部が整う／校友会雑誌創刊
					M40	8部体制(学芸、弁論、球戯、端艇、撃剣、柔道、相撲、弓術)
52	徳島中学 徳島県立城南 高校 『徳島中学校 城南高校百年 史』1975	明治29 (1896) 明治31 (1898)	運動会 校友会	教員が出身者および第五学年生に呼びかけて結成 卒業生が主体に活動 運動会を校友会と合同して新組織に 「会員の智徳を増進し身體を強健にし兼て会員の気脈を通ずるを以て目的とす」。会員は、本校生徒(通常会員職員(賛成会員)及び本校出身者(特別会員)より組織		修学旅行先で中学生の野球を見て帰校後始める
		明治33 (1900)	同志会		M33	雑誌部、漕艇部、撃剣部、競技部・水泳部を設け、新たに柔道部、講話部を設けた 同年、野球の対外試合も同志会誌「渦の音」発刊
53	高松中学 (M26創立) 香川県立高松 高校 『高松高等学校 百年史』1993	明治28 (1895)	校友会			M28 文芸部と武芸部の二部構成 M28 野球団結成か？ M31 武芸部に振武会(専ら撃剣)、柔道部が加わる 野球団-岡山一中と交歓試合を行う 漕艇、水遊、運動、遠足も傘下に
54	高知県立第一 中学 (後、高知城東 中学) 高知県立追手 前高校 『高知追手前 高校百年史』 1978	明治22 (1889) 明治30 (1897)	校友会 (在校・卒業生の親睦) 同窓会 (在校生のための組織)	「…会員相互ノ交誼ヲ親密ニシ兼テ思想品格ヲ進メ高知縣尋常中学校ノ体面ヲ保持スルニアリ」 「同窓ノ親睦ヲ厚ウシ責善ノ実ヲ挙ケ同心協力我校風ヲ伸張スルヲ以テ目的トス」 「…誓規ヲ設ケ集會ヲ催シ及雑誌ヲ發行ス」		M25 ストライキの後、千頭校長が生徒の士気を鼓舞するために相撲、撃剣、ボートなどを奨励。校友会もこれに和して毎年総会の後で、教職員、生徒らとともに競漕会を開くのを恒例とした M22-3 札幌農学校出の内村達三氏・野球の手解き？ M28 不相変ベースボール大ニ盛ニシテ本日ノ如キ十二時ヨリ四時迄、食后ヨリ七時半迄之レヲ為ス M35 野球部誕生
55	福岡県立中学 修猷館 福岡県立修猷 館高校 『修猷館二百年 史』1985	明治25 (1892) 明治28 (1895) 明治35 (1902)	修猷館館友会 (生徒は含まれず) 修猷館同窓会	「修猷館職員及ヒ卒業生ヲ以テ組織ス(但シ卒業生ニアラサルモ本会ノ承諾ヲ得タルモノハ会員タルコト得)」 「会員相互ノ交誼ヲ厚ウシ修猷館ノ隆盛ヲ期図スル…」校内での体育発達目的ノ職員と生徒を以て組織 剣道、柔道、陸上、野球の4つ 同窓会に雑誌部の新設		M27 雑誌発行「館友会雑誌」 生徒間に協友会、蜚雪会、同志会などの自由組織 M29 修猷館同窓会第一回大会(陸上運動会実施) M35 柔道、剣道、陸上運動、野球、庭球の各部設置 M39 端艇部と水泳部の発足し、スポーツ盛んに
56	佐賀中学 佐賀県立佐賀 高校 『栄城 佐高創 立八十周年記 念誌』1957 佐賀高校は 1963より 佐賀西、佐賀 東、佐賀北の 三校に分離		校友会	いつ頃からか分からないが校友会という生徒の組織があったが「佐中の痛であった」とされる。卒業生と在校生からなり会費を取って日曜日に寺院などで討論会、演説会を開き…会旗を立て郊外に出遊するなどした。この勢力が増すにつれ学校の統制が利かなくなり弊害続出するようになったので、県知事から禁止令が出た。「校友会から解放され自由の身となって学校生活が楽しくなった」(M27卒 深江種明) p. 311 在校生、卒業・中退生、職員から組織して、会則を定めた。(栄城第1号)		

no	学校名	校友会設立年	名称	目的	活動年	活動内容
57	熊本中学	明治33 (1900)		熊本中学と沓々巒に分かれる	M26頃	全校生徒放課後毎日一回は撃剣、一日は体操を課し 長距離競走／散歩
	熊本県立熊本 高校	明治34 (1901)	運動会	生徒の身体を錬磨し志気を鼓舞することを目的とする生徒を会員、職員を特別会員として	M34	運動会に撃剣、器械体操、フットボール、ベースボール、テニスの各部を設ける
	『熊中熊高八 十年史』1986	明治36 (1903)	講文会	学術技芸の方面の力を伸ばそうとするもの	M36	国漢、英語、詩吟、軍歌、図書、雑誌の六部を置いた
		明治38 (1905)	校友会	運動会と構文会を統一 「会員の親睦と智・徳・体力の育成」	M38	構文会の組織と雑誌「江原」の発刊 文芸部、武術部、運動部
58	熊本県立中学 濟々巒 (M34 に改称)	明治34 (1901)	奨学部・運動部	「生徒ノ智徳健康ヲ啓進シ、士氣ヲ振作シ、兼テ相互交親ノ情ヲ厚クスル目的」	M34	運動部は撃剣柔道と戸外遊戯からなる 戸外遊戯には野球と庭球があった 奨学部は職員の談話、巒外知名談話、雑誌発行
	熊本県立濟々 巒高校			「生徒ハ必ズ二部ノ部員タルベシ」 「運動部ハ毎日適宜ニ之ヲ行ヒ、春秋二回大会ヲ開ク」	M36	校友会雑誌「多士」創刊
	『濟々巒百年史』 1982					
59	竹田中学 (M33独立)	明治30 (1897)	修道会	分校開設と同時に設立。当初の目的は武術鍛錬にあった		基本財産貯え、同窓支援組織を目指す。修学旅行の経費補助(学校の余地に桐の植林をする。「学林会」の出發)豊陽育英会組織され、修道会の育英事業はここに移される
	大分県立竹田 高校				(M36)	修道会雑誌
	『百周年記念誌』 1997				M37	余り盛んでないが野球の練習や試合は行われていた(3回生述)
60	宮崎中学	明治29 (1896)	望洋会	「我校の校風を作らん」と5年生が全生徒に呼びかけた(残る旧藩意識と統一のなさ、学内騒動の解決・解消)「会員相互の親睦を計り、共に団結以て本校事業の発達を側面より助勢せんとするもの」	M30	運動部、撃剣部 雨天にあらざる限りは、昼食後可成運動場に於て遊戯 運動をなすものとする。種目：ローンテニス、野球、フットボール 初期の望洋会幹部が「校風創出のため」として最も情熱を注ぎ下級生を指導した敬礼と制服着用
	宮崎県立宮崎 大宮高校			在校生が正会員、卒業生が特別会員、教職員が名誉会員で、正会員の 中から幹事が互選され運営する (幹事は最終的に校長任命)	M31	瑞艇大競漕会および運動会の実施
	『創立九十周年 記念誌』 1980			※「宮中の歴史はすなわち望洋会の歴史」と言われるくらい、以後、 権威をもって校内に君臨した	M33	望洋会雑誌「制服・敬礼」で猛省せよと呼びかけ/野球試合実施
					M34	柔道部創設され、運動部は端艇、撃剣、柔道の三部に
61	第一鹿児島中学 鹿児島県立鶴 丸高校			※校友会については十分把握できなかつたが、スポーツ活動に関する記述を拾い上げた。	M28	「…ボート部の三隻には威海、旅順、劉公と中国の地名などが名付けられた」との二回生の回想がある。 ただこのボートは開校当時からのものかはっきりしない点もある。
	『創立百年』 1994				M30	「佐世保鎮守府から師範学校と本校に譲られた練習用ボート六隻が届いた。端艇部はこの結果生まれたのか、開校当初からあったのかは知ることが出来ない。 造士館の寄宿生たちが霧島・海門二隻のボートで桜島を周遊した。(尋常中学造士館だと思われる)
					M32.1	第一尋常中学校に中馬庚教諭が着任した。…野球部が生まれたと考えられる。…この年の新聞紙上には野球
					M32	試合の状況・第一中学校・中学校造士館・師範学校・商業学校四校による端艇競漕会も実施された。
62	沖縄中学	明治27 (1894)	学友会の組織	雑誌の発行始まる	M25	撃剣の実施(警察教師を招いて)
		明治29 (1896)		学友会で水上運動会を開催	M27	修学旅行において三高で野球試合を見学し、土産にボールやバットをもらって帰る
	沖縄県立首里 高校			この頃、演説、雑誌、水上運動、陸上運動、野球で組織	M33頃	野球チーム組織される
	『養秀百年』 1980	明治31 (1898)	同窓会の更正復活 (発足はM28)	同窓会会則できる	M35	碇泊中の米国巡洋艦の水兵たちと試合
					M40	柔道が教育に取り入れられる

※1：学校名は明治30年代半ば頃の名称(様々な紆余曲折があつて安定しないため、年代を区切って表示した)
 ※2：noに下線をした中学校は、明治19年の「中学校令」以後、1府県1中学校として創立され、各府県で最も古い歴史をもつ中学校

もあった。初期の任意組織においては、参加自由度が高く、生徒ら中心であったものが多かったが、徐々に学校側が中心となり、生徒・教員の参加が義務づけられる全学挙げての組織づくりがなされていく。先ほどの広島一中でも明治34年の新校長着任を機に、「職員生徒全校挙って会員となり…職員を部署して部監となし」（同上、220頁）など、学校主導の強化が図られた。金沢一中のように、「会頭・副会頭には校長・首席教諭が就任し、校友会を構成する…三部の部長・副部長も教官の担当するところ」（金沢泉ヶ丘高校、41頁）となり、学校側主導の体制を強めた学校が増える⁽¹²⁾。学校によって時期の差はあるものの、様々な団体が併存する状態が一つに統合されていくようになると同時に、学校を中心に構成され、参加が強制づけられるようになっていった。

(3) 活動内容

次に、校友会の活動内容については、文芸部活動（雑誌発行を含む）と運動部活動の二つに大別して概観する。内容は二分されるが、その予算配分や生徒や学校の関心度合いなどにおいて、運動部が圧倒的優位を占めた。

① 文芸活動

文芸部の活動は、年に何回も行われる演説会・講演会等の開催であり、詩や漢詩、作文、評論などを掲載した校友会雑誌の発行などがある。弁論や演説は自由民権運動の流れ、国会開設などの政治的関心の高まりの中で、全学的な校友会組織となる以前、生徒たちが任意で集団を作り練習を行っていた。演説部や講談部では演説会や弁論会などを催し、弁論の論理性、うまさ、巧みさは、大いに生徒たちの関心と注目を集め、それら雑誌に掲載されることもあった。さらに、詩や俳句を作ることは教養として受け止められていたのであり、非常に盛んであった学校もある。明治30年頃の盛岡中学では、生徒間で回覧雑誌が出回っていた。その一つは『反古袋』という雑誌で、独力で新聞を出し、「校風の揚らないことを痛憤し、校友の団結のないことを浩嘆し、盛んに言論をもって同窓を叱咤し、反省さした」（金田一、25頁）田子一民が作ったものである。そこには感傷的な美文、短歌や和歌、小説なども書かれた。その他、野村胡堂を中心とした文芸雑誌『六〇五』と呼ばれたもの、石川啄木が作ったものなどいくつもあったというように、小説や新体詩、新派の和歌など、文学への関心は高かった。もちろん、同人誌は生徒の間で続けられるものもあったであろうが、徐々に全学的な校友会へ統合され、校友会雑誌が発表の場となった。

校友会雑誌の内容は、およそ以下のようにまとめられる。①講演者や校長・教員、卒業生、あるいは生徒らの講演、意見、②生徒の詩や作文、随想、評論、③修学旅行や発火演習、行軍、運動会などの記事、④運動部の近況や対戦結果、対戦の詳細説明、⑤校友会の活動及び会計報告、⑥雑報などがある。この他、上級学校への進学状況や卒業生からの近

況報告などが入る場合もある。発行回数は、年一、二回が多いが、それ以上の学校もあったようだ。

② スポーツ活動

運動部は、全学的な校友会が組織される以前より、日本古来の柔術・剣術といった運動が導入されていた例は少なくない。先に見たように、学外で町の道場に通うことの他、生徒が剣術の任意団体を作る⁽¹³⁾、あるいは学校として武術を奨励するなどしていた。「撃剣、柔道が行なわれるようになったのは、明治十五年からである。時の知事山田信道が、『維新以来青年子弟の文弱に流るるを憂ひ、之を矯正せん』（「尚志」、河崎兼松述）として撃剣、柔道を課することを命じた」（鳥取西高校、97頁）、「（明治25年頃）従来体操の正課で行われていた剣道（撃剣）、柔道（柔術）が課外活動として行われていた」（秋田高校、52頁）事例もあった⁽¹⁴⁾。校友会設立以前においてなされていた運動は、やはり藩校から続く撃剣（剣術）であり、柔術であった。明治28（1895）年に大日本武徳会が設立されて武術関連の全国大会が開催されるようになり、明治30年代になると従来の武術としての柔術から、「柔道」への転換が嘉納治五郎らによって図られて、精神性を重視した近代スポーツとしての再出発が図られていった（井上 1992）。

尋常中学校創設初期において、日本古来の運動ばかりではなく、外来のスポーツである野球や端艇（ボート）が取り入れられた学校もある。渡辺（1978）によると、校友会設立初期の32校中、外来スポーツで多く取り入れられていたのは野球（21校）、端艇（11校）が多く、次に多いテニスは6校と半減する。まず野球の導入では、明治20年頃、体操伝習所に派遣され、帰ってきた教師が外来のベースボールを教えた事例もあるが、それらはルールも分からず、ただ遊びに終わった例が多い。しかし、明治20年代半ば以降、高等教育機関で野球を行った者たちが中学校教員となって全国に散らばっていくと（例えば熊本謙二郎や中馬庚ら）、そこから野球熱が盛んになっていった。あるいは、夏休みに帰省した大学生から（松江中学など）、アメリカ人外国人教師の赴任（秋田中学）、さらには野球が盛んになった中学校からの転校（浜松中学）といったことを契機に、野球熱が高まった場合などがある。生徒のみの活動では金銭も不十分であり、用具や場所にも事欠くが、校友会組織となって財政的なバックアップがなされるようになると、それらのスポーツは継続されていく。

端艇の場合、「戸外遊戯の感覚で、勇壮なボートや在来武術を採用する中学校や師範学校は、歩兵操練の実施と平行して増加」し、富国強兵主義に基づく「海国日本」との位置づけの中で、「畜に体育上必要なるのみ」ならず、「真に国家の富強を増進する」「海国民適当の遊戯」（木下 1971a、147-8頁）などと奨励され、特に日清戦争後、広まった。この他の外来スポーツでは、明治期末までに、テニスやフットボールが盛んとなった。

このようなスポーツは、府県内に複数の中学校が設立され、県内やそれより広い地域で

の対抗戦や大会が開催されるようになると、ますます盛んになった。運動部の勝敗に自校を、生徒自身を投影し、野球を中心に大きな注目を集めるようになる。校友会雑誌には、試合経過が詳しく掲載され、校長や生徒の試合を鼓舞する文章も散見される⁽¹⁵⁾。教員ら学校側は、運動やスポーツを熱心に奨励し、試合での勝利を鼓舞することによって愛校心を作り上げ、学校の統一を図るとともに、ストライキなどの学校騒擾に見られた生徒のエネルギーを方向付け、管理した側面もある。

5. まとめと課題

以上の内容をまとめると、次のようになる。明治19年の「中学校令」以前の中学校であれ、その創設期より、中学校内には親睦や活動を目的とする生徒たち、そして卒業生を含めた活動団体が様々に作られていた。剣術の活動集団、演説や修養のための集団、寄宿舎生と通学者生の集団などがあった。そこに教員や卒業生、あるいは地域の青年などが加わる、さらに出身地域や旧身分といった要素も関わるなどして、学内にとどまらない多様な自発的集団が形成されていた。それらの集団は、身分や上下関係、地域などによる封建的な要素も強く見られ、対立することもしばしばであった。

「中学校令」によって全国統一基準で尋常中学校が設立されても、そうした状況はすぐには変わらなかった。見てきたように、上下関係が強く、卒業生が在校生を牛耳る、卒業生が学校へ注文をつけるなどということもしばしばであった。これに対し、全国統一的カリキュラムや規則が課され、府県費で経営されるようになった尋常中学校では、厳格に定められたその目的を果たすべく、学内での集団対立を抑え、生徒たちにカリキュラムを教え込み、卒業させる必要があった。中学校の生徒数も増加する中で、学校にとっては、生徒への管理統制が大きな課題となったのである。

生徒たちの諸活動団体は学校の統制下に統一されていった。それが校友会という組織である。公的な学校カリキュラムとは別の、自治的な装いをもった生徒と教職員の任意集団という形式をとった。しかし、自治的とは名ばかりで、参加が義務付けられ、校長が会長を、教員が部長を兼務することが多く、予算もこれらに握られているので、実質的には学校側の統制管理が強くなった。生徒側にしても、大阪一中の例に見られたように、生徒だけの活動組織では費用がかさむとの苦情から、効率的経営を求めて学校に校友会の設置を求めたように、安定的、継続的な活動には、大きな組織によるバックアップが不可欠であった。

もっとも、どの学校も上記のように収斂していったわけではない。はじめから学校（校長や教員）側が中心になって組織し、学校側主導の経営を行っている学校（東京一中など）もあれば、はじめは生徒に運営を任せたが徐々に学校が主導権を握るようになる学校

もある（姫路中学など）。そこには学校創立の経緯や旧身分意識、反官意識の強さなどの地域特性、さらには校長のリーダーシップなどが、複雑に絡まりあっており、それらが学校独自の校友会のあり方を作り上げた。宮崎中学では、「宮中の歴史はすなわち望洋会の歴史」（宮崎大宮高校、91頁）と言われるように、授業以外の諸活動（スポーツ、運動会、演説、文芸あるいは自主的な校風取り締まり⁽¹⁶⁾）を行う校友会活動こそが、各学校の独自性をつくり、校風を特徴づけたとも言えるのである。

以上、本論文では、広く全国の中学校を対象として、明治期の中学校における校友会の創設とその発展を表2にまとめ、概観してきた。しかしながら表2の内容についても、十分に分析はできず、消化不良のままに終わってしまった観がある。輪郭を描き出すとは言っても、多様で豊かな校友会活動を一論文においてまとめることは難しい。

最初の目的で述べたとおり、本論文は校友会研究の端緒であり、明治期における校友会活動の創設から発展の流れを、全国的におさえた基礎的資料の提供と位置づける。今後、様々な研究課題を挙げることができるが、野球を中心とする外来スポーツの中学校校友会を通じた伝播過程を史実でおさえ、それが生徒や学校によっていかに意味づけされて受け入れられていったかをできるだけ全国規模で捉えること、さらには個別学校を事例に、生徒、教師、地域を含めた総合的な観点から検討することなどを挙げておく。さらには、明治期後期における「選手制度」批判や朝日新聞による野球批判キャンペーンを経て、大正4年に朝日新聞が全国中等学校優勝野球大会開催にいたる過程を、新聞社や野球関係者の言説とともに、各府県や学校レベルの動きから照射する研究も興味深い。

注

- (1) ここで取り上げる中学校は、明治19年の中学校令で尋常中学校とされ、明治32年の中学校令改正で中学校とされたものである。よって、高等中学校はこれに含まれない。尋常中学校であっても論文中では、便宜上、中学校と記している。また、ここでいう校友会は様々な名称が使用され、明確な名称の定義はないが、一般的にこの組織を指す場合、本論文では校友会と記述する。
- (2) 渡辺（1978）は、明治32年に刊行された『全国公立尋常中学校統計書』に記載してある明治31年に時点の校友会の有無と、渡辺が集めた45校の学校史に記載されている校友会の有無の事実確認をしたところ、「事実認識の相違は45校のうちで上記4校のみであり、しかもそのうち3校は学校史の記述不足に原因する」（10頁）として、学校史がかなり正確に事実を伝えているとする。
- (3) 中学校の名称は明治期を通じてよく変えられる。明治21年に石川県と大谷派の共立で尋常中学校を開設し、これを前身として明治26年に石川県尋常中学校が創設された（論文では、これを中学校の創設としている）。その後、明治32年の中学校令改正で石

川県第一中学校、翌年石川県立第一中学校、さらに明治40年に石川県立金沢第一中学校と改称される。よって本論文では、中学校の名称については誤解を招かない範囲で、年代に関わらず、明治30年代中期以降の比較的安定した名称を使用する（表2同様）。

- (4) 学校の創立から校友会の創設まで少し時間差があるようだが、実際はそうでもないようだ。例えば明治20年創設の第二高等中学校で、全学的な校友会組織としての「尚志会」が設けられたのは、明治26年であったが、それまで何もそうした組織がなかったというわけではない。『第二高等学校史』（1979）によれば、創設当初より「英語会」と「運動会」が設けられていた。例えば「運動会」では、「規則ヲ定メ校長ヲ推シテ会長ニ充テ本校ノ生徒ハ皆會員タルコトヲ奨励シ…」(74頁)などとされていた。
- (5) 明治27年の「高等学校令」によって第四高等中学校は第四高等学校となったため、それに従って記述した。
- (6) 他の高等教育機関が、単純に第一高等中学を真似たとは言いきれない。本文中に示した山口高等中学や札幌農学校の例でも、先に任意の団体がいくつかあって、それをまとめるかたちで全学的名組織が形成されている。第二高等中学校においても、学校側が主導した組織のほか、生徒らが設立した任意団体が先にあったのであるが、それらは「全校生徒ヲ糾合セルニ非ス。従テ勢力微弱ニシテ各員ヲシテ其志ヲ伸サシムルニ足ラス。乃全校生徒一致団結シテ学校ト相輔ケ以テ教育ノ精華ヲ發揮スヘキ機関ナル可ラスト」として、生徒有志が「全校生徒ヲ包容セル一大団体ヲ作ランコトヲ時ノ吉村先生ニ具申」（第二高等学校、108頁）したとされる。
- (7) 表2に示している文言は、「学校史」からの引用である。「学校史」の書名については数が多いので、紙面の都合上「引用文献」には掲載せず、表中に書名と出版年のみを掲載し、本文中の引用においても出版年を省略している。なお、岡山中学については、後神俊文『岡山中学事物起源覚書』（1988年）から作成した。
- (8) 先述の渡辺（1978）は、『全国公立尋常中学校統計書』から、明治31年における校友会の設置および活動状況をまとめている（全99校）。それによると、明治31年5月時点で、99校のうち校友会（学友会）組織をもつと解答した学校が68校（69%）、なし22校（22%）、複数の組織有り4校（4%）などとなっている。校友会組織をもつ68校のうち、文化部と武芸・運動部の双方を含むものが54校（79%）、文化部系のみ2校（3%）、武芸・運動部系のみ5校（7%）などとなっている。
- (9) 渡辺（1978）は、各府県で最初に設立された尋常中学45校を対象にその創立年を調べている。それによると、山形、東京、岡山、鳥取、長崎の5校が明治24年以前、長野と濟々饗（熊本）が明治35年以降であり、それ以外は明治25～34年に集中していると指摘している（12頁）。

- (10) 校友会組織に統一されるまでは、一つの中学の中に複数の生徒団体が結成され、例えば岩手中学では一部の生徒のみの組織においては、「清猷会」「獅子吼団」「修養会」などが見られた。
- (11) 「松江中学の同窓学生会に対する影響力は、学校よりもむしろ東京出雲学生会にあったようである」(松江北高校、295頁)と学校史は述べており、指導を強めたい学校側と東京出雲学生会の間に緊張関係があったとされる。例えば、東京出雲学生会では、明治27年5月の定例会で「松江中学校同窓会に対する決議をなす、満場の意気頗る昂れり、即ち該会の会長及び幹事長を校外生とし校長の会長たることは否認すといふにあり」(東京出雲学生会創立五拾年記念号)、松江北高校、296頁より再引) などというように、学校側との主導権争いが展開されていた。
- (12) 金沢一中では、元内務官僚で、他県出身の野田藤馬が明治30年に2代目校長となって以来、生徒らへの統制が厳しくなるとされる。それまでは「藩学・私塾的な残滓を強く温存させ、近代的な学校としての内容を十分に備えていなかった石川県尋常中学校」(金沢泉ヶ丘、39頁)に、国家的な規格・規制をかけたと述べられている。それまで「生徒の服装規制は従来殆ど行われて」おらず、「筒袖の和服に道場袴で通学する生徒が多かった」(40頁)状況に対して制服を規制し、明治33年の未成年者喫煙禁止令に先立つ明治31年、生徒の喫煙を禁止する県訓令を制定させたとされる。さらに明治32年には、校訓や校旗も制定される。このような動きの中、明治31年、本文中にあるように校友会も学校主導で設立されたのである。教職員側からの生徒管理・統制という側面が強くあった例である。
- (13) 「文弱之弊を矯め尚武の氣象を養成するを以て眼目」としていた生徒有志が結成した静岡県尋常中学校(静岡中学)柔克会のように、生徒らが自発的に作ったもの(前橋中学、千葉中学、新潟中学など)、あるいは教師と生徒の有志が結成したもの(京都一中)などもあった。
- (14) こうした一方で、まだ主知主義的な考え方が強くて身体運動への関心は高まらず、松江中学のように「(明治26年頃-筆者)学校の先生達はまだ運動なるものの存在を知らず、しかもそれが重要な教育の一であるなどとは夢にも思ったことなく、今の人にはまるで嘘の様な咄々怪事と思はれる事であった。学校に在った運動用の器物は、狭い狭い学校後庭の唯一の落っこ台、寄宿舎の庭の唯一本の金棒、船入れに繋いだ二隻の古端艇だけで、しかも指導者は無く、総て唯有志生徒が慰み半分に使用するに過ぎなかった」(299頁)という状況の学校もあった。
- (15) いくつも例はあるが、松本中学の校友会誌『校友』(明治42年3月)には、「運動が精神鍛錬の上に、一致団結の氣風を養成する上において、及ぼす影響の至大なるを思はずばなるまい。此故に運動の消長如何は、其校の意気の如何を示し、其の校の全体を

通じての如何を、推察せしむる唯一の材料である。」(松本深志高校、220-221頁) などとある。

- (16) 例えば宮崎中学では、禁酒禁煙令が出て守らない、草履や下駄を失敬するなどという行為がまかり通っているので、「一校の団結を固くし、生徒間の制裁を厳にし、以て校風を維持するにある」(宮崎大宮高校、93頁) などとして、望洋会は取り締まりに乗り出したのである。

引用・参考文献

- 第一高等学校 1939、『第一高等学校六十年史』第一高等学校
第二高等学校史編集委員会 1979、『第二高等学校史』第二高等学校同窓会
平野稔 1974、「大分県における明治体育史の研究—中等学校のスポーツについて」『大分大学経済論集』26巻4号、61-97頁
北海道大学 1982、『北大百年史 通説』ぎょうせい
市山雅美 2003、「旧制中学校の校友会における生徒自治の側面」『東京大学大学院教育学研究科紀要』43巻、1-13頁
今村嘉雄編 1963、『体育史資料年表』不昧堂
今村嘉雄 1989、『修訂 十九世紀に於ける日本体育の研究』第一書房
井上俊 1992、「『武道』の発明—嘉納治五郎と講道館柔道を中心に—」『ソシオロジ』115号、111-125頁
金田一京助 1993、『金田一京助全集』13巻、三省堂
木下秀明 1971a、『日本体育史研究序説』不昧堂
木下秀明 1971b、「わが国における運動部の成立と変遷」『体育の科学』21巻11号、684-687頁
桑原三二 1988、『中等教育史研究第三集 旧制中学校の校友会(学友会)』三冬社
日下裕弘 1996、『日本スポーツ文化の源流』不昧堂
小島享 1978「明治期における兵庫県中学校の校友会運動部について」『神戸学院大学紀要』8巻、141-167頁
古園井昌喜 1978、「明治期における福岡県のスポーツについて」『下関市立大学論集』22-2、1-19頁
真栄城勉・高木儀正 1986、「愛媛県における近代学校スポーツの発展過程—旧制松山高等学校の校友会運動部—」『琉球大学教育学部紀要』第29集第2部、179-190頁
三井原仙之助 1899、『全國公立尋常中學校統計書 明治三十一年』開發社
文部省 1887~1913各年、『文部省学事年報』(第14年報~第40年報)
能勢修一 1965、『明治体育史の研究』逍遙書院

- 能勢修一 1995、『明治期学校体育の研究』不昧堂出版
- 西川友之・大川信行・水谷秀樹・中川孝 1992、「明治期における富中文武会の体育活動に関する研究」『富山大学教育学部紀要』A-40、15-27頁
- 竹之下休蔵・岸野雄三 1983、『近代日本学校体育史』日本図書センター
- 棚田眞輔 1983、『明治期の神戸中学における野球の総合的研究』神戸商科大学経済研究所
- 寺崎昌男 1971、「明治教育史の一断面－学校紛擾をめぐって」『日本の教育史学』14、24-43頁
- 東京大学 1984a、『東京大学百年史 通史一』東京大学出版会
- 東京大学 1984b、『東京大学百年史 資料一』東京大学出版会
- 東京大学 1985、『東京大学百年史 通史二』東京大学出版会
- 富岡勝 1994、「旧制高校における寄宿舎と『校友会』の形成」『京都大学教育学部紀要』40号、237-246頁
- 鶴岡英一 1973、「明治における広島県中等学校の校友会運動部について」『体育学研究』18-1、9-22頁
- 渡辺融 1978、「明治期の中学校におけるスポーツ活動」東京大学教養部体育研究室『体育学紀要』12号、1-22頁
- 山口高等商業学校 1940、『山口高商沿革史』山口高等商業学校
- 吉村政吉 1974、『新盛岡物語』国書刊行会

※この他、旧制中学校関連文献については、紙面の都合上、論文の「表2」中に、現在の高等学校名と書名と発行年を記している。

新堀通也寄贈図書目録

A Classified Catalogue of Main Books donated
by Professor Emeritus Michiya Shimbori

新堀通也*

SHIMBORI, Michiya

目次	
序文	ト／ペスタロッチ／ゲーテ／シラー／フィヒテ／ショーペンハウエル／キェルケゴール／ニーチェ／シェストフ／西田幾多郎／稲富栄次郎
I. 辞典類	V. ルソーとデュルケーム
1. 日本語	1. ルソー
2. 英語	2. デュルケーム
3. フランス語	VI. 教育社会学
4. ギリシャ語	1. 社会学
5. ラテン語	2. 教育社会学
6. 分野別	教育と社会／教育社会学概論類／教育の社会学／学校社会学／人間形成論
哲学／聖書／社会学／教育学	VII. 高等教育の社会学
II. 講座類	1. 科学社会学・大学教授論
1. 社会学関係	2. 学歴・学閥
2. 教育学関係	3. 階級・官僚制
3. 文学関係	4. 大学論
4. 文学全集・選集	5. 学生運動
III. 歴史	VIII. その他
1. 通史	1. 生涯教育
2. 思想史・哲学史	2. 比較教育
3. 社会思想史	3. 沖縄教育
4. 教育史	
IV. 思想家全集・研究書	
プラトン／アリストテレス／ヤコブ・ベーメ／デカルト／スピノザ／ロック／ビュッフォン／パスカル／デイドロ／チェルゴー／カン	

* 武庫川女子大学教育研究所嘱託研究員、武庫川女子大学名誉教授、武庫川女子大学教育研究所前所長

序 文

大学には個人が蒐集、寄贈した図書を陳列する特別の図書室を備えた例が多い。寄贈者の名を冠して、何々文庫などと称するのが普通である。大学史を翻けばそうした個人名を冠した図書館自体が母体となって成立した大学も存在する。

現代、一方では所蔵図書が膨大になりすぎて収納スペースが不足するという事情もあり、他方では電子化によって従来型の活字本を極度に収縮する技術が発達したという事情もあって、寄贈図書を受け付けない大学も出てきた。

しかし、学生、研究者、一般読者個人々人にとっては、依然として実物の書物を目にし手にとってみるのが便利でもあり、刺激にもなる。特に研究者、退職した教授が蒐集した書物を一ヶ所に集め、陳列した文庫や書棚に接するなら、そこに寄贈者個人がどんな本を読み、どんな分野に興味をもったかといった関心や研究の歴史が見てとれるはずであり、その意味で寄贈者自身の「自分史」の資料となるだろう。

こうした思いもあって、私はすでに今から15年前（平成6年）、本学教育研究所を母体とする独立大学院、臨床教育学研究科の開設を目指して、文科省の設置認可の申請のための条件の1つたる基本図書の整備充実の一助として、臨床教育学に関連する蔵書1151冊（和書843冊、洋書308冊）を本学図書館に寄贈、それは臨床教育学研究科図書室に収められた。同研究科は正式に認可を受けて翌年4月、開設されて多少の曲折はあるものの現在に至っている。

その後も私は教育研究所長、臨床教育学研究科教授として勤務したが、平成17年3月、20年間勤務した本学教授の職を辞することになった。その後も、本学名誉教授、教育研究所嘱託研究員という地位を与えられているが、長い間、お世話になった本学、ならびに教育研究所に対する感謝の気持ちを表明するとともに後学、同学の人たちに少しでもお役に立てれば、との思いから、今回さらに蔵書1436冊（和書1027冊、洋書409冊）を本学図書館に寄贈、教育研究所図書室に別置されることになった。

前回とは若干異なり、今回の寄贈図書には私自身の青年時代、学生時代からの人間的成長、学問的発達を支えた蔵書が広く加えられている。広い意味で臨床教育学の基礎となる哲学、文学、教育学、社会学など、私自身の人間形成や人間理解、基本的人間観や教育観に資するところ多かった専門書や教養書などを幅広く集めており、そこには旧制高校的な教養主義、古典主義の影響が色濃く、にじみ出ているようにも思う。

私はその折々に、研究した分野や対象、打ち込んだ（ほれ込んだ、といってもよい）人物、大思想家や大芸術家、特にルソーとデュルケーム、成立期の教育社会学、科学社会学、大学研究（学歴、学閥、大学教授職、学生運動など）、生涯教育、比較教育、沖縄教

育などが分類されることは、本目録の目次によって知られるであろう。

この文献目録に掲げた著作は、寄贈図書のすべてではなく、私にとって特に思い出が深く、同学、後学の徒にとって有益であると思われるものを私なりに選択して整理したのである。中には海外に出張したさい収集したいいわゆる希覯（きこう）本もいくつか含まれている。

本学就任前の勤務地、広島の旧宅に保管していたが、散佚を恐れるとともに前述の如き思いを表すため本学への寄贈を申請したのである。なお、目録は目次に示されるジャンル毎に整理し、それぞれ著者（编者なども含む）、書名、出版社、出版年を記し、さらに同一ジャンル内でも、テーマ毎に、出版年次順などで記載してある。本学図書館から受け取った膨大な寄贈リストと照らし合わせながら、本目録を私の希望通りに作成された研究所の末吉ちあき助手の御協力に深く謝意を表し、これが広く活用されることを期待したい。

平成21年 3月

新堀 通也

I. 辞典類

1. 日本語	日本類語大辞典	志田義秀、佐伯常麿共編／芳賀矢一校閲	博愛館	1913
	現代短歌用語辞典	松村英一編	素人社書屋	1932
	官版語彙別記	文部省編輯寮編	田中太右衛門／中川勘助／此村庄助（發賣）	1885
	和歌梯（上・下）	蘭園主人編	葛西市郎兵衛／北村四郎兵衛	文化11 1814
2. 英語	オクスフォード英語辞典（ <i>Oxford English Dictionary</i> ）（COD）	adapted by H. W. Fowler and F. G. Fowler from the Oxford Dictionary	Clarendon Press	1934
	オクスフォード英語辞典（ <i>Oxford English Dictionary</i> ）（POD）	compiled by F. G. Fowler & H. W. Fowler	Clarendon Press	1939
	ユニバーサル英語大辞典（ <i>Universal Dictionary of the English Language</i> ）	edited by Henry Cecil Wyld/with an appendix by Hugh Buss	Maruzen	1936
	英語入門辞典（ <i>A Comprehensive Guide to Good English</i> ）	by George Philip Krapp	R. McNally	1927
	類語・反対語辞典（ <i>English Synonyms and Antonyms</i> ）	by James C. Fernald	Funk & Wagnalls	1914
	俗語・口語辞典（ <i>Dictionary of Slang and Colloquial English</i> ）	by John S. Farmer and W.E. Henley	George Routledge/ E.P. Dutton	1921
	口語辞典（ <i>Slang, Phrase and Idiom in Colloquial English and their Use</i> ）	by Thomas R. G. Lyell	Hokuseido Press	1936
	シNTAX、イディオム辞典（ <i>Short Dictionary of English Syntax and Idiom</i> ）	by H. A. Treble and G. H. Vallins	Clarendon Press/ Maruzen	1936
	発音辞典（ <i>English Pronouncing Dictionary</i> ）	by Daniel Jones	Maruzen	1937
	英語学辞典	市河三喜編著	研究社	1940
	英米文学辞典	齋藤勇編著	研究社	1939
	シェークスピア用語辞典（ <i>Shakespeare Glossary</i> ）	by C. T. Onions	Clarendon Press	1919
	3. フランス語	ラルース・フランス語辞典（ <i>Nouveau Petit Larousse</i> ）		Librairie Larousse
フランス語・英語辞典（ <i>Nouveau Dictionnaire de Poche français-anglais et anglais-français</i> ）		par Thomas Nugent et J. Ouseau	Tardieu-Denesle	1828

4. ギリシャ語	ギリシャ語・英語辞典 (<i>Greek-English Lexicon</i>)		Clarendon Press	1871
	ギリシャ語・英語中辞典 (<i>Inter-mediate Greek-English Lexicon</i>)	compiled by Henry George Liddell and Robert Scott	Clarendon Press	1889
5. ラテン語	ラテン語・英語辞典 (<i>Cassell's Latin Dictionary: Latin-English and English-Latin</i>)	revised by J. R. V. Marchant and Joseph F. Charles	Cassell	1928
6. 分野別				
哲学	哲学小辞典	伊藤吉之助編	岩波書店	1938
	哲学辞典 (<i>Vocabulaire technique et critique de la Philosophie</i>)	par André Lalande/ ouvrage couronné par l'Académie française	Presses Universitaires de France	1956
聖書	聖書辞典 (<i>Biblical Cyclopaedia</i>)		LONDON: C. Griffin & Company, LTD, PHIL- ADELPHIA: J. B. Lippincott Company	1901
	聖書 (<i>Holy Bibles</i>)		T. Nelson and Sons	1900
	賛美歌 (<i>The Hymnal</i>)	compiled by a Com- mittee of the Presby- terian Board of Publi- cation and Sabbath- School Work	Presbyterian Board of Publication and Sab- bath-School Work	1911
社会学	社会学辞典	福武直、日高六郎、高 橋徹編	有斐閣	1958
	社会学小辞典	新明正道編著	岩崎書店	1950
	社会学辞典 (<i>Dictionary of Sociology</i>)	edited by Henry Pratt Fairchild	Philosophical Library	1944
	社会学辞典 (<i>Dictionnaire de Sociologie</i>)	Emilio Willems/adap- tation française par Armand Cuvillier	Rivière	1961
	社会学辞典 (<i>Wörterbuch der Soziologie</i>)	unter Mitarbeit zahl- reicher Fachleute he- rausgegeben von Wil- helm Bernsdorf und Friedrich Bülow	Enke	1955
	社会思想史辞典	新明正道監修	創元社	1961
	明治世相編年辞典	朝倉治彦、稲村徹元編	東京堂出版	1965
教育学	教育学辞典 (全5巻)	城戸幡太郎 [ほか] 編	岩波書店	1936- 1939
	現代教育小事典	藤永保、森隆夫編	ぎょうせい	1980
	教育学辞典 (<i>Wörterbuch der Pädagogik, A. Kröner</i>)	von Wilhelm Hehl- mann	Alfred Kröner	1953

高等教育百科辞典（全10巻）（ <i>International Encyclopedia of Higher Education</i> ）	editor-in-chief, Asa S. Knowles	Jossey-Bass Publishers	1977
学界の辞典	京都大学新聞社編	養徳社	1951
教育博物館（全3巻）	唐澤富太郎著	ぎょうせい	1977
日本教育史資料書	國民精神文化研究所編	北海出版社	1937
学制百年史、記述編・資料編	文部省編	帝国地方行政学会	1972
大学問題総資料集（全8巻）	田畑茂二郎 [ほか] 編		
1. 戦後の歴史と基本法規		有信堂	1970
2. 政府機関および各団体の見解		有信堂	1970
3. 日本と外国の諸大学改革案		有信堂	1971
4. 入試制度および教育・研究		有信堂	1971
5. 大学の学生自治と参加権		有信堂	1972
6. 大学の自治と管理運営		有信堂	1972
7. 大学の教員養成部門と医学部		有信堂	1972
8. 追録・年表・総索引 放送大学・学術体制		有信堂	1973

II. 講座類

1. 社会学関係	社会学講座 (全18卷)			
	1. 理論社会学	青井和夫編	東京大学出版会	1974
	2. 社会学理論	濱島朗編	東京大学出版会	1975
	3. 家族社会学	森岡清美編	東京大学出版会	1972
	4. 農村社会学	蓮見音彦編	東京大学出版会	1973
	5. 都市社会学	倉沢進編	東京大学出版会	1973
	6. 産業社会学	松島静雄編	東京大学出版会	1973
	7. 政治社会学	綿貫譲治編	東京大学出版会	1973
	8. 経済社会学	富永健一編	東京大学出版会	1974
	9. 法社会学	潮見俊隆編	東京大学出版会	1974
	10. 教育社会学	麻生誠編	東京大学出版会	1974
	11. 知識社会学	徳永恂編	東京大学出版会	1976
	12. 社会意識論	見田宗介編	東京大学出版会	1976
	13. 現代社会論	辻村明編	東京大学出版会	1972
	14. 社会開発論	松原治郎編	東京大学出版会	1973
	15. 社会福祉論	三浦文夫編	東京大学出版会	1974
	16. 社会病理学	岩井弘融編	東京大学出版会	1973
	17. 数理社会学	安田三郎編	東京大学出版会	1973
	18. 歴史と課題	福武直編	東京大学出版会	1974
	講座・近代思想史 (全9巻) 欠あり			
	近代人の誕生 1 (講座・近代思想史: 1-2)	金子武蔵、大塚久雄編	弘文堂	1958- 1959
	近代人の誕生 2 (講座・近代思想史: 1-2)	金子武蔵、大塚久雄編	弘文堂	1958- 1959
	理性と啓蒙の時代 1 (講座・近代思想史: 3-4)	金子武蔵、大塚久雄編	弘文堂	1959
	理性と啓蒙の時代 2 (講座・近代思想史: 3-4)	金子武蔵、大塚久雄編	弘文堂	1959
	機械の時代 (講座・近代思想史: 5)	金子武蔵、大塚久雄編	弘文堂	1959
	危機の時代 (講座・近代思想史: 6)	金子武蔵、大塚久雄編	弘文堂	1959
	日本における西洋近代思想の受容 (講座・近代思想史: 9)	金子武蔵、大塚久雄編	弘文堂	1959
2. 教育学関係	教育学叢書 (全24巻) 欠あり			
	日本現代教育史 (教育学叢書: 第1巻)	仲新著	第一法規出版	1969

世界の教育改革 (教育学叢書：第2巻)	山内太郎編著	第一法規出版	1967
教育革新の動向 (教育学叢書：第3巻)	岡津守彦編著	第一法規出版	1969
教育計画 (教育学叢書：第4巻)	清水義弘、天城勲編著	第一法規出版	1968
教育と経済 (教育学叢書：第5巻)	嘉治元郎編著	第一法規出版	1970
学校制度 (教育学叢書：第6巻)	仲新、持田栄一編著	第一法規出版	1967
日本の高等教育 (教育学叢書：第7巻)	清水義弘編著	第一法規出版	1968
産業と教育 (教育学叢書：第8巻)	岩井龍也、松原治郎編著	第一法規出版	1967
教授と学習 (教育学叢書：第10巻)	東洋編著	第一法規出版	1968
教育経営 (教育学叢書：第12巻)	河野重男著	第一法規出版	1969
就学前教育 (教育学叢書：第13巻)	川口勇編著	第一法規出版	1968
英才教育 (教育学叢書：第14巻)	清水義弘、向坊隆編著	第一法規出版	1969
身体発達と教育 (教育学叢書：第19巻)	猪飼道夫、高石昌弘共著	第一法規出版	1967
情操・意志・創造性の教育 (教育学叢書：第20巻)	時実利彦編著	第一法規出版	1969
教育評価 (教育学叢書：第21巻)	続有恒著	第一法規出版	1969
現代の教師 (教育学叢書：第22巻)	鈴木重信、池田進共著	第一法規出版	1968
現代教育思潮 (教育学叢書：第23巻)	森昭編著	第一法規出版	1969
教育行政 (教育学叢書：第24巻)	天城勲編著	第一法規出版	1970

教育学講座（全21巻）欠あり

人間形成の思想 (教育学講座：2)	平野智美、菅野和俊編著	学習研究社	1979
発達と環境 (教育学講座：3)	梅本堯夫、麻生誠編著	学習研究社	1979
就学前教育 (教育学講座：4)	角尾稔、東洋編著	学習研究社	1979
教授・学習・評価 (教育学講座：5)	永野重史、東洋編著	学習研究社	1979

教育工学 (教育学講座：6)	中野照海編著	学習研究社	1979
教育課程の理論と構造 (教育学講座：7)	今野喜清、柴田義松編著	学習研究社	1979
国語教育の理論と構造 (教育学講座：8)	倉沢栄吉、田近洵一、 湊吉正編著	学習研究社	1979
外国語教育の理論と構造 (教育学講座：9)	羽鳥博愛、伊村元道編著	学習研究社	1979
社会科教育の理論と構造 (教育学講座：10)	浜田陽太郎、上田薫編著	学習研究社	1979
算数・数学教育の理論と 構造(教育学講座：11)	赤攝也編著	学習研究社	1979
理科教育の理論と構造 (教育学講座：12)	森川久雄編	学習研究社	1979
造形と音楽の教育 (教育学講座：13)	高山正喜久、真篠将編著	学習研究社	1979
健康と身体 of 教育 (教育学講座：14)	江橋慎四郎、高石昌弘編 著	学習研究社	1979
家庭生活と技術の教育 (教育学講座：15)	斎藤健次郎、藤枝恵子編 著	学習研究社	1979
新しい道徳教育の探究 (教育学講座：16)	上田薫、平野智美編著	学習研究社	1979
学校生活の指導 (教育学講座：17)	河合隼雄、木原孝博編著	学習研究社	1979
教師・親・子ども (教育学講座：18)	真野宮雄、市川昭午編著	学習研究社	1979
現代の教育経営 (教育学講座：19)	河野重男、永岡順編著	学習研究社	1979
教育機会の拡充 (教育学講座：20)	辻功、木下繁弥編著	学習研究社	1979
学習社会への道 (教育学講座：21)	市川昭午、潮木守一編著	学習研究社	1979
図説・統計学校教育三十 年史(教育学講座：別巻)	市川昭午編集代表	学習研究社	1980

現代教育講座(全10巻)

1. 現代教育の危機：教育 の危機の本質は何か	上田薫編著	第一法規出版	1975
2. 戦後日本の教育政 策：国民にとって教 育とは何であったか	市川昭午編著	第一法規出版	1975
3. 現代の学校：学校と は何をするところか	河野重男編著	第一法規出版	1975
4. 教育内容の現代 化：学校では何を どう教えるべきか	木原健太郎編著	第一法規出版	1975

5. 人間の発達と学習： 子どもの発達にとって 教育とは何か	滝沢武久、山村賢明編著	第一法規出版	1975
6. 現代日本の教育環 境：教育・学習環 境はどう変化したか	浜田陽太郎編著	第一法規出版	1975
7. 能力・適性・選抜と 教育：誰が青少年の 進路を決定するか	藤永保、麻生誠編著	第一法規出版	1975
8. 労働・余暇と教育： 生活構造の変化は 何を求めているか	倉内史郎編著	第一法規出版	1975
9. 高等教育の大衆 化：大衆化の流れ をどう変えるか	清水義弘編著	第一法規出版	1975
10. 高学歴社会の教育： 社会はどう変わ る、そして教育は	新堀通也、潮木守一編著	第一法規出版	1975

教育学研修講座（全14巻）

1. 教育革新と教育計画	麻生誠、池田秀男編著	第一法規出版	1984
2. 教育の環境と病理	新堀通也、津金沢聡広編著	第一法規出版	1984
3. 子どもと青年の形成	深谷昌志、上杉孝實編著	第一法規出版	1984
4. 学校と学級の経営	杉山明男、金子照基編著	第一法規出版	1984
5. 学校と教育課程	佐藤三郎、稲葉宏雄編著	第一法規出版	1984
6. 教材の構成と展開	歓喜隆司、田代高英編著	第一法規出版	1984
7. 学力の形成と評価	木下繁弥、安彦忠彦編著	第一法規出版	1984
8. 授業の計画と指導	水越敏行、西之園晴夫編著	第一法規出版	1984
9. 生活指導の計画と展開	桂正孝、恒吉宏典編著	第一法規出版	1984
10. 「スポーツと教育」の展開	丹羽劭昭、辻野昭編著	第一法規出版	1984
11. 障害児教育の課題と展望	伊藤隆二、中野善達編著	第一法規出版	1984
12. 同和教育の計画と展開	川向秀武、中野陸夫編著	第一法規出版	1984
13. 生涯教育の構想と展 開	元木健、諸岡和房編著	第一法規出版	1984
14. 現代教師論	高野桂一、影山昇編著	第一法規出版	1984

西洋教育史（全13巻）

1. ソクラテス (西洋教育史：1)	村井実著	牧書店	1956
2. プラトン (西洋教育史：2)	石山脩平著	牧書店	1957
3. クインティリアヌス (西洋教育史：3)	横尾壮英著	牧書店	1957

4.	コメニウス (西洋教育史：4)	梅根悟著	牧書店	1956
5.	ルソー (西洋教育史：5)	新堀通也著	牧書店	1957
6.	ペスタロッチー (西洋教育史：6)	長田新著	牧書店	1956
7.	フレーベル (西洋教育史：7)	荘司雅子著	牧書店	1957
8.	ヘルバルト (西洋教育史：8)	是常正美著	牧書店	1957
9.	シュタイン (西洋教育史：9)	皇至道著	牧書店	1957
10.	ホール (西洋教育史：10)	古川忠次郎著	牧書店	1957
11.	デューイ (西洋教育史：11)	永野芳夫著	牧書店	1956
12.	シュプランガー (西洋教育史：12)	長井和雄著	牧書店	1957
13.	リット (西洋教育史：13)	杉谷雅文著	牧書店	1956

講座・教育社会学（全6巻）

1.	近代国家と教育	海後宗臣、牧野巽編集代表	東洋館出版社	1953
2.	現代文化と教育	海後宗臣、牧野巽編集代表	東洋館出版社	1953
3.	青少年問題と教育	海後宗臣、牧野巽編集代表	東洋館出版社	1953
4.	地域社会と教育	海後宗臣、牧野巽編集代表	東洋館出版社	1953
5.	学校の社会学	海後宗臣、牧野巽編集代表	東洋館出版社	1953
6.	教育計画の社会的基礎	海後宗臣、牧野巽編集代表	東洋館出版社	1955

大学問題シリーズ（翻訳、全8巻）

1.	大衆のための大学	アール・J・マッグラス編 ／清水義弘監訳	東京大学出版会	1969
2.	大学の官僚制	H・ストループ著／松原治郎、小野浩、石田純共訳	東京大学出版会	1972
3.	これからの大学院	E・ウォルターズ編／木田宏監訳	東京大学出版会	1969
4.	世界の大学問題	IDE 大学教育研究会編	東京大学出版会	1969
5.	ニュー・ユニバーシティ：イギリス型の大学創造	マレー・G・ロス編／原芳男 [ほか] 共訳	東京大学出版会	1970
6.	コロンビア大学の危機：コックス・レポート	コロンビア大学紛争事実調査委員会 [編]／喜多村和之訳	東京大学出版会	1970
7.	イギリスの新大学	ハロルド・J・パーキン著／友田泰正 [ほか] 共訳	東京大学出版会	1970

	8. バークレーの大学 改革：マスカティ ン・レポート	カリフォルニア大学教育 特別委員会著／新堀通也 監訳／吉田正晴、池田秀 男、大塚忠剛共訳	東京大学出版会	1970
3. 文学関係	岩波講座世界文学(全15回)	小林英夫 [ほか] 著	岩波書店	1932- 1934
	世界文学講座 (全13巻)	佐藤義亮編輯	新潮社	1929- 1931
	英米文学語学講座 (全11巻)	福原麟太郎 [ほか] 著	研究社	1940- 1944
4. 文学全集・ 選集	世界文学全集 (全30巻)			
	赤と黒 (世界文学全集：1)	スタンダール著／鈴木力 衛訳	日本ブック・ クラブ	1971
	ジェーン・エア (世界文学全集：2)	C. ブロンテ著／大久保康 雄訳	日本ブック・ クラブ	1971
	罪と罰 (世界文学全集：3)	ドストエフスキー著／米 川正夫訳	日本ブック・ クラブ	1971
	可愛い女／ヴァーニヤ伯 父さん／三人姉妹ほか (世界文学全集：4)	チャーホフ著／中村白葉 ほか訳	日本ブック・ クラブ	1971
	嵐が丘 (世界文学全集：5)	エミリ・ブロンテ著／宮 西豊逸訳	日本ブック・ クラブ	1971
	武器よさらば／春の奔流 (世界文学全集：6)	ヘミングウェイ著／竹内 道之助訳	日本ブック・ クラブ	1971
	黄金虫ほか (世界文学全集：7)	E. A. ポー著／刈田元司、 一力秀雄訳	日本ブック・ クラブ	1971
	モルグ街の殺人ほか (世界文学全集：8)	E. A. ポー著／福田陸太郎 ほか訳	日本ブック・ クラブ	1971
	隊長ブリバほか (世界文学全集：9)	ゴーゴリ著／原久一郎、 工藤精一郎訳	日本ブック・ クラブ	1971
	友情物語／漂泊の魂 ／デーミアン (世界文学全集：10)	ヘルマン・ヘッセ著／相 良守峯、藤岡光一訳	日本ブック・ クラブ	1971
	オリヴァ・トウィスト (世界文学全集：11)	ディケンズ著／北川悌二 訳	日本ブック・ クラブ	1971
	大地上 (世界文学全集：12-14)	パール・バック著／北川 悌二訳	日本ブック・ クラブ	1971
	大地 中 (世界文学全集：12-14)	パール・バック著／北川 悌二訳	日本ブック・ クラブ	1971
	大地 下 (世界文学全集：12-14)	パール・バック著／北川 悌二訳	日本ブック・ クラブ	1971
	ジャン・クリストフ 1 (世界文学全集：13-14)	ロマン・ロラン著／片山 敏彦訳	河出書房新社	1964

ジャン・クリストフ2 (世界文学全集：13-14)	ロマン・ロラン著／片山敏彦訳	河出書房新社	1964
父と子／その前夜／初恋 (世界文学全集：15)	ツルゲーネフ著／米川正夫訳	日本ブック・クラブ	1971
三つの愛 上 (世界文学全集：16-17)	クローニン著／竹内道之助訳	日本ブック・クラブ	1972
三つの愛 下 (世界文学全集：16-17)	クローニン著／竹内道之助訳	日本ブック・クラブ	1972
あしながおじさん (世界文学全集：18)	ウェブスター著／北川梯二訳	日本ブック・クラブ	1972
アンナ・カレーニナ 上 (世界文学全集：19-20)	トルストイ著／米川正夫訳	日本ブック・クラブ	1972
アンナ・カレーニナ 下 (世界文学全集：19-20)	トルストイ著／米川正夫訳	日本ブック・クラブ	1972
ミシシッピーの生活 (世界文学全集：21)	マーク・トウェーン著／西崎一郎、水谷信子訳	日本ブック・クラブ	1972
若いウェルテルの悩み／乙女の湖 (世界文学全集：22)	ゲーテ著／井手貢夫訳／ヴィッキリー・パウム著；松本和也訳	日本ブック・クラブ	1972
椿姫／純愛 (世界文学全集：23)	デュマ・フィス著／鈴木力衛訳／バルザック著；安川茂雄訳	日本ブック・クラブ	1972
名詩集 (世界文学全集：24)	ゲーテ、ハイネ著／星野慎一、辻理訳	日本ブック・クラブ	1972
大尉の娘ほか／現代の英雄 (世界文学全集：25)	プーシキン著／レールモントフ著；中村白葉訳	日本ブック・クラブ	1972
ジャン・クリストフ 上 (世界文学全集：26-28)	ロマン・ロラン著／井上勇訳	日本ブック・クラブ	1972
ジャン・クリストフ 中 (世界文学全集：26-28)	ロマン・ロラン著／井上勇訳	日本ブック・クラブ	1972
ジャン・クリストフ 下 (世界文学全集：26-28)	ロマン・ロラン著／井上勇訳	日本ブック・クラブ	1972
現代アメリカ傑作短編集 (世界文学全集：29)	スタインベックほか著／佐藤亮一訳	日本ブック・クラブ	1972
従妹ベット (世界文学全集：30)	バルザック著／井上勇訳	日本ブック・クラブ	1972
ミルトン詩集 (<i>Poetical Works of John Milton</i>)	edited after the original texts by H. C. Beeching	H. Milford	1925
テニソン詩集 (<i>Poems of Tennyson</i>)	with an introduction by Sir Herbert Warren	H. Frowde/Oxford University Press	1926

日本の文学（全76巻）欠あり

坪内逍遙／二葉亭四迷／幸田露伴 （日本の文学：1）	中央公論社	1970
森鷗外1 （日本の文学：2-3）	中央公論社	1966-1967
森鷗外2 （日本の文学：2-3）	中央公論社	1966-1967
尾崎紅葉／泉鏡花 （日本の文学：4）	中央公論社	1969
樋口一葉／徳富蘆花／国木田独歩 （日本の文学：5）	中央公論社	1968
島崎藤村1 （日本の文学：6-7）	中央公論社	1964-1967
島崎藤村2 （日本の文学：6-7）	中央公論社	1964-1967
徳田秋声1 （日本の文学：9-10）	中央公論社	1966-1967
徳田秋声2 （日本の文学：9-10）	中央公論社	1966-1967
正宗白鳥 （日本の文学：11）	中央公論社	1968
夏目漱石1 （日本の文学：12-14）	中央公論社	1964-1966
夏目漱石2 （日本の文学：12-14）	中央公論社	1964-1966
夏目漱石3 （日本の文学：12-14）	中央公論社	1964-1966
石川啄木／正岡子規／高浜虚子 （日本の文学：15）	中央公論社	1967
長塚節／鈴木三重吉／中勘助 （日本の文学：16）	中央公論社	1969
北原白秋／高村光太郎／萩原朔太郎 （日本の文学：17）	中央公論社	1965
永井荷風1 （日本の文学：18-19）	中央公論社	1965-1967
永井荷風2 （日本の文学：18-19）	中央公論社	1965-1967
武者小路実篤 （日本の文学：20）	中央公論社	1965
志賀直哉1 （日本の文学：21-22）	中央公論社	1964-1967

志賀直哉 2 (日本の文学：21-22)	中央公論社	1964- 1967
谷崎潤一郎 1 (日本の文学：23-25)	中央公論社	1964- 1967
谷崎潤一郎 2 (日本の文学：23-25)	中央公論社	1964- 1967
谷崎潤一郎 3 (日本の文学：23-25)	中央公論社	1964- 1967
柳田国男／斎藤茂吉 ／折口信夫 (日本の文学：26)	中央公論社	1969
有島武郎／長与善郎 (日本の文学：27)	中央公論社	1967
久保田万太郎／里見淳 (日本の文学：28)	中央公論社	1968
芥川龍之介 (日本の文学：29)	中央公論社	1964
山本有三 (日本の文学：30)	中央公論社	1965
佐藤春夫 (日本の文学：31)	中央公論社	1966
広津和郎／菊池寛 (日本の文学：32)	中央公論社	1969
室生犀星 (日本の文学：35)	中央公論社	1966
滝井孝作／梶井基次 郎／中島敦 (日本の文学：36)	中央公論社	1968
横光利一 (日本の文学：37)	中央公論社	1966
川端康成 (日本の文学：38)	中央公論社	1964
葉山嘉樹／小林多喜 二／徳永直 (日本の文学：39)	中央公論社	1970
林房雄／武田麟太郎 ／島木健作 (日本の文学：40)	中央公論社	1968
中野重治 (日本の文学：41)	中央公論社	1967
堀辰雄 (日本の文学：42)	中央公論社	1964
小林秀雄 (日本の文学：43)	中央公論社	1965
野上弥生子／網野菊 (日本の文学：44)	中央公論社	1965

宮本百合子 (日本の文学：45)	中央公論社	1969
宇野千代／岡本かの子 (日本の文学：46)	中央公論社	1969
林芙美子 (日本の文学：47)	中央公論社	1964
平林たい子／大原富枝 (日本の文学：48)	中央公論社	1969
佐多稲子／壺井栄 (日本の文学：49)	中央公論社	1968
円地文子／幸田文 (日本の文学：50)	中央公論社	1966
尾崎士郎／火野葦平 (日本の文学：51)	中央公論社	1968
尾崎一雄／外村繁／上林 暁 (日本の文学：52)	中央公論社	1969
井伏鱒二 (日本の文学：53)	中央公論社	1966
舟橋聖一 (日本の文学：54)	中央公論社	1966
丹羽文雄 (日本の文学：55)	中央公論社	1965
石川達三 (日本の文学：56)	中央公論社	1966
高見順 (日本の文学：57)	中央公論社	1965
石坂洋次郎 (日本の文学：58)	中央公論社	1964
伊藤整 (日本の文学：59)	中央公論社	1965
石川淳 (日本の文学：60)	中央公論社	1967
中山義秀 (日本の文学：61)	中央公論社	1967
永井龍男／阿部知二 (日本の文学：62)	中央公論社	1968
坂口安吾／織田作之 助／檀一雄 (日本の文学：63)	中央公論社	1969
井上友一郎／田宮虎 彦／木山捷平 (日本の文学：64)	中央公論社	1970
太宰治 (日本の文学：65)	中央公論社	1964
野間宏 (日本の文学：66)	中央公論社	1966

武田泰淳 (日本の文学：67)	中央公論社	1967
椎名麟三／梅崎春生 (日本の文学：68)	中央公論社	1968
三島由紀夫 (日本の文学：69)	中央公論社	1965
大岡昇平 (日本の文学：70)	中央公論社	1965
井上靖 (日本の文学：71)	中央公論社	1964
中村真一郎／福永武彦 ／遠藤周作 (日本の文学：72)	中央公論社	1969
堀田善衛／安部公房 ／島尾敏雄 (日本の文学：73)	中央公論社	1968
安岡章太郎／吉行淳之介 ／曾野綾子 (日本の文学：74)	中央公論社	1968
阿川弘之／庄野潤三 ／有吉佐和子 (日本の文学：75)	中央公論社	1969
石原慎太郎／開高健 ／大江健三郎 (日本の文学：76)	中央公論社	1968

俳文学大系（全12巻）欠あり

俳文学大系[第1巻]： 作法編第1	巖谷小波、伊藤松宇、 橋本小舸共編	大鳳閣書房	1929- 1930
俳文学大系[第2巻]： 作法編第2	巖谷小波、伊藤松宇、 橋本小舸共編	大鳳閣書房	1929- 1930
俳文学大系[第3巻]： 註釋編第1	巖谷小波、伊藤松宇、 橋本小舸共編	大鳳閣書房	1929- 1930
俳文学大系[第4巻]： 註釋編第2	巖谷小波、伊藤松宇、 橋本小舸共編	大鳳閣書房	1929- 1930
俳文学大系[第6巻]： 俳文編	巖谷小波、伊藤松宇、 橋本小舸共編	大鳳閣書房	1929- 1930
俳文学大系[第7巻]： 紀行編	巖谷小波、伊藤松宇、 橋本小舸共編	大鳳閣書房	1929- 1930
俳文学大系[第8巻]： 隨筆編	巖谷小波、伊藤松宇、 橋本小舸共編	大鳳閣書房	1929- 1930
俳文学大系[第9巻]： 七部集總覽編第1	巖谷小波、伊藤松宇、 橋本小舸共編	大鳳閣書房	1929- 1930
俳文学大系[第10巻]： 俳論編	巖谷小波、伊藤松宇、 橋本小舸共編	大鳳閣書房	1929- 1930

俳文学大系[第11卷]: 七部集總覽編第3	巖谷小波、伊藤松宇、 橋本小舸共編	大鳳閣書房	1929- 1930
俳文学大系[第12卷]: 七部集總覽編第4	巖谷小波、伊藤松宇、 橋本小舸共編	大鳳閣書房	1929- 1930
<hr/>			
海表叢書(全6卷)	新村出監修	更生閣	1927- 1928
和泉式部私抄	保田與重郎著	育英書院	1942
芭蕉抄	穎原退藏著	星林社	1946
蕪村全集	穎原退藏編著	有朋堂書店	1925
一茶俳句全集	一茶著/大橋裸木篇/荻 原井泉水校閲	春秋社	1929
其角全集	榎本其角著/勝峯晋風編	聚英閣	1926
華山全集	渡辺崋山著/鈴木清節編纂	崋山叢書出版會	1941
<hr/>			
漱石全集(全19卷)			
吾輩は猫である (漱石全集:第1卷)	夏目漱石著/漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1936
坊っちゃん:外七篇 (漱石全集:第2卷)	夏目漱石著/漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1936
草枕/二百十日/野分 (漱石全集:第3卷)	夏目漱石著/漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1936
虞美人草/坑夫 (漱石全集:第4卷)	夏目漱石著/漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1935
三四郎/それから (漱石全集:第5卷)	夏目漱石著/漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1936
門/彼岸過迄 (漱石全集:第6卷)	夏目漱石著/漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1936
行人 (漱石全集:第7卷)	夏目漱石著/漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1937
心/道草 (漱石全集:第8卷)	夏目漱石著/漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1935
明暗 (漱石全集:第9卷)	夏目漱石著/漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1937
小品 (漱石全集:第10卷)	夏目漱石著/漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1936
文學論 (漱石全集:第11卷)	夏目漱石著/漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1936
文學評論 (漱石全集:第12卷)	夏目漱石著/漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1936
評論/雜篇 (漱石全集:第13卷)	夏目漱石著/漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1936
詩歌俳句及初期の文 章/附印譜 (漱石全集:第14卷)	夏目漱石著/漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1936

日記及斷片 (漱石全集：第15卷)	夏目漱石著／漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1936
書簡集 正 (漱石全集：第16-17卷)	夏目漱石著／漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1936- 1937
書簡集 續 (漱石全集：第16-17卷)	夏目漱石著／漱石全集刊 行會編輯	漱石全集刊行会	1936- 1937
漱石全集 第18卷 別冊	夏目漱石著	漱石全集刊行会	1935- 1937
漱石全集 第19卷 總索引		漱石全集刊行会	1935- 1937
山本有三全集 (全10卷)	山本有三著	岩波書店	1939- 1941
啄木歌集	石川啄木著	素人社書屋／伊 林書店 (發賣)	1935
宮沢賢治歌集	宮澤賢治著／森莊已池校註	日本書院	1946
宮沢賢治名作選	宮澤賢治著／松田甚次郎編	羽田書店	1939
吉井勇歌集	吉井勇著	甲鳥書林	1943
与謝野寬遺稿歌集	與謝野寬著／與謝野光編	明治書院	1935

Ⅲ. 歴史

1. 通史	史料による日本の歩み	児玉幸多編者代表	吉川弘文館	1951-1960
	日本文学通史	次田潤著	明治書院	1937
	国文学書史	佐藤良二、佐藤一三共著	厚生閣	1934
	ヘブライ史 (<i>Evolution of the Hebrew People</i>)	by Laura H. Wild	Scribner	1917
	ギリシャ史 (<i>History of Greece</i>)	by Oliver Goldsmith	Printed for Thomas Tegg	1827
	フランス史	金沢誠著	ダヴィッド社	1960
	フランス全史	廣瀬哲士著	厚生閣書店	1932
	フランス文化論	クウルティウス著／大野俊一訳	創元社	1942
	フランス精神と文化	佐藤輝夫著	目黒書店	1943
	フランス・ルネサンス 文芸思潮序説	渡辺一夫著	岩波書店	1960
	西洋美術史要	板垣鷹穂著	岩波書店	1930
	スポーツの技術史	岸野雄三、多和健雄編	大修館書店	1972
	19世紀フランス絵画史	リヒヤルド・ムウテル著／木下空太郎訳	甲鳥書林	1943
	ドイツ産業資本成立史論	川本和良著	未来社	1971
	イギリス初期重商主義研究	渡邊源次郎著	未来社	1959
	ロシア文学史	エリヤスベルク著／宮下義信、小林英夫共訳	筑摩書房	1943
	2. 思想史・ 哲学史	近代日本思想史		
近代人の誕生1 (講座・近代思想史：1-2)		金子武蔵、大塚久雄編	弘文堂	1958-1959
近代人の誕生2 (講座・近代思想史：1-2)		金子武蔵、大塚久雄編	弘文堂	1958-1959
理性と啓蒙の時代1 (講座・近代思想史：3-4)		金子武蔵、大塚久雄編	弘文堂	1959
理性と啓蒙の時代2 (講座・近代思想史：3-4)		金子武蔵、大塚久雄編	弘文堂	1959
機械の時代 (講座・近代思想史：5)		金子武蔵、大塚久雄編	弘文堂	1959
危機の時代 (講座・近代思想史：6)		金子武蔵、大塚久雄編	弘文堂	1959
日本における西洋近代思想の受容 (講座・近代思想史：9)		金子武蔵、大塚久雄編	弘文堂	1959
文明開化		木村毅著	至文堂	1954

	西洋哲学史概説	桑木巖翼著	早稲田大學出版部	1946
	西洋近世哲学史	安倍能成著	岩波書店	1929
	フランス思想史 (<i>Esprits directeurs de Pensée français du moy- an age à la révolution</i>)	par Théodore Suran	C. Reinwald/Schleicher frères	1903
	フランス現代哲学 (<i>Philosophie Contem- poraire en France</i>)	par D. Parodi	Félix Alcan	1920
	フランス経済学説論集	永田清著／永田清論集 刊行會編	日本評論新社	1959
	コント研究	本田喜代治著	芝書店	1935
	サンシモン及びサンシ モニズム	Paul Janet 著／大岩誠 訳	大鑑閣	1928
	アメリカ哲学史	H. G. タウンセンド 著／市井三郎訳	岩波書店	1951
	マクス・シェラー	田中熙著	弘文堂書房	1937
	19世紀の思想の動き (<i>Movements of Thought in 19. Century</i>)	George H. Mead/edited by Merritt H. Moore	University of Chicago Press	1936
3. 社会思想史	社会思想史	住谷悦治著	ミネルヴァ書房	1958
	近代フランス社会思想史	ガローディ著／ 平田清明訳	ミネルヴァ書房	1958
	フランス社会思想史	井伊玄太郎著	理想社	1959
	市民革命の構造	高橋幸八郎著	御茶の水書房	1950
	市民革命と協同思想	平實著	ミネルヴァ書房	1960
	西欧市民意識の形成	増田四郎著	春秋社	1958
4. 教育史	私塾	リチャード・ルビン ジャー著／石附実、海 原徹訳	サイマル出版会	1982
	日本教育史	佐藤誠實編纂	大日本圖書	1903
	日本教育精神史	佐藤清太著	光風出版	1956
	学制九十年史	文部省編	大蔵省印刷局	1964
	学制論考	井上久雄著	風間書房	1963
	日本洋学史の研究	有坂隆道編	創元社	1968
	日本英語教育史稿	櫻井役著	敵文館	1936
	中学教育史稿	櫻井役著	受験研究社増進堂	1942
	近世学校教育の源流	高橋俊乗著	永澤金港堂	1943
	教師教育の成立と発展	三好信浩著	東洋館出版社	1972
	女子教育史	櫻井役著	増進堂	1943
	日本婦道記	山本周五郎著	講談社／全日本ブック クラブ (頒布)	1970
	大日本青年団史		日本青年館	1970

青年の家・十年の歩み	全国青年の家協議会編	全国青年の家協議会	1969
西洋教育史・ギリシャ篇	石山脩平著	目黒書店	1934
世界新教育史	W・ボイド、W・ローソン共著／国際新教育協会訳	玉川大学出版部	1966
教育史 (<i>Introduction à l'histoire de l'éducation</i>)	Arnould Clausse	A. de Boeck	1951
フランス教育史	アントワーンヌ・レオン著／池端次郎訳	白水社	1969
ドイツ教育思想史 上巻・下巻	篠原助市著	創元社	1947
イギリス労働党公教育政策史	三好信浩著	亜紀書房	1974

IV. 思想家全集・研究書

1. プラトン	全集 (ギリシャ語、全5巻) (<i>Platonis Opera</i>)	recognovit brevique adnotatione critica instruxit Ioannes Burnet	E Typographeo Clarendoniano	1900-1907
	全集 (英語訳、全6巻) (<i>The Works of Plato</i>)	translated by Henry Cary, M.A., by Henry Davis, M.A., by George Burges, M. A.,	H. G. Bohn	1848-1854
	全集 (ドイツ語訳、全9巻) (<i>Platon's Sämmtliche Werke, Brockhaus</i>)	übersetzt von Hieronymus Müller/mit Einleitungen begleitet von Karl Steinhart	F. A. Brockhaus	1850-1873
	全集 (日本語訳、全9巻) (プラトン全集)	プラトン著/岡田正三訳	第一書房	1942-1951
	ソクラテス以前の哲学 (<i>Fragmente der Vorsokratiker</i>)	von Hermann Diels	Weidmann	1903
	ギリシャ思想家 (全3巻) (<i>Griechische Denker</i>)	von Theodor Gomperz	Veit & Comp	1909-1911
	プラトン弁証法の研究	川田熊太郎著	河出書房	1940
	プラトンの教育思想	福島政雄著	藤井書店	1934
2. アリストテレス	選集 (ギリシャ語、全4巻) (<i>Loeb Classical Library</i>)	Aristotle/with an English translation by Philip H. Wicksteed and Francis M. Cornford	Harvard University Press/W. Heinemann	1935
	選集 (英語訳、全3巻)	Aristotle/ [first work] with an English translation by Hugh Tredennick/[second and third works] with an English translation by G. Cyril Armstrong	Harvard University Press/W. Heinemann	1936
	選集 (英語訳)	Aristotle/with an English translation by H. Rackham	Harvard University Press/W. Heinemann	1952
	選集 (英語訳)	Aristotle/with an English translation by H. Rackham	Harvard University Press/W. Heinemann	1932
	選集 (<i>Works of Aristotle</i>)	by W. D. Ross/by George Stock/by J. Solomon	Clarendon Press	1925
3. ヤコブ・ペーメ	著作集 (ドイツ語) (<i>Schriften Jakob Böhmes</i>)	ausgewählt und herausgegeben von Hans Kayser/mit der Biographie Böhmes von Abraham von Franckenberg und dem Kurzen Auszug, Friedrich Christoph Oetingers	Insel-Verlag	1920

4. デカルト	哲学論集 (ラテン語) (<i>Renati Des Cartes Opera Philosophica</i>)	Renati Des Cartes	Sumptibus Friderici Knochii	1692
	デカルトよりパスカルへ	森有正著	日新書院	1943
5. スピノザ	著作集 (ラテン語、全2巻) (<i>Benedicti de Spinoza Opera</i>)	recognoverunt J. van Vloten et J. P. N. Land	Martinum Nijhoff	1914
6. ロック	哲学論集 (全2巻) (<i>Philosophical Works of John Locke</i>)	with a preliminary essay and notes, by J. A. John	Henry G. Bohn	1854
7. ビュッフオン	全集 (フランス語、全7巻) (<i>Ouvres Complètes de Buffon</i>)	avec les suites par M. Achille Comte/dessinés par Victor Adam/et gravés sur acier par Mrs Muller ... [et al.]	Mauprivez	1842
8. パスカル	全集 (フランス語) (<i>Oeuvres complètes</i>) (Bibliothèque de la Pleiade)	Pascal/texte établi et annoté par Jacques Chevalier	Gallimard	1954
9. デイドロ	百科全書 (フランス語、全2巻) (<i>Oeuvres de Denis Diderot, Dictionnaire encyclopédique, Imprimeur Libraire</i>)		A. Belin	1818
10. チュルゴー	全集 (フランス語、全4巻) (<i>Oeuvres de Turgot</i>)	avec biographie et notes par Gustave Schelle	F. Alcan	1913-1923
11. カント	著作集 (ドイツ語、全11巻) (<i>Immanuel Kant's Schriften</i>)	herausgegeben von J.H. v. Kirchmann	G. Weiss, <i>Heimann, Koschnyu</i>	1869
	カント実践哲学の研究	三渡幸雄著	京都女子大学	1981
	独逸観念論の研究	木村素衛著	弘文堂書房	1947
12. ペスタロッチ	全集 (ドイツ語、全10巻) (<i>J. H. Pestalozzis Sämtliche Werke, Schweizerische Klassikerausgabe</i>)	Heinrich Pestalozzi	Rascher	1944-1947
	ペスタロッチ伝 (R.de Guimps, <i>Pestalozzi, his Life & Work</i>)	by Roger de Guimps/ authorized translation from the second French edition by J. Russell/ with an introduction by R.H. Quick and a front-piece portrait	Allen&Unwin, Sonnenschein	1908
13. ゲーテ	全集 (ドイツ語、全15巻) (<i>Goethes Werke</i>)		J. G. Cotta	1902-1912
	ゲーテとシラーの教育思想	前田博著	未来社	1966

	「ゲーテ」	ホーエンシュタイン著 ／齋藤榮治訳	櫻井書店	1946
14. シラー	全集（ドイツ語、全12 巻）（ <i>Schillers Sämtliche Werke</i> ）		Cotta	1862
15. フィヒテ	「ドイツ国民に告ぐ」 （ <i>J.G.Fichte, Reden an die deutsche Nation</i> ）	durch Johann Gottlieb Fichte/neu herausgegeben von Fritz Medicus	F. Meiner	1916
16. ショーペン ハウエル	全集（全5巻） （ <i>Arthur Schopenhauers Sämtliche Werke</i> ）	von Arthur Schopenhauer	Philipp Reclam jun	1890- 1895
17. キェルケ ゴール	選集（全2巻） （ <i>Kierkegaard Werke</i> ）	Sören Kierkegaard/ [mit Nachwort von Christoph Schrempf] / [übersetzt von Wolfgang Pfeiderer und Christoph Schrempf]	Eugen Diederichs	1911- 1913
18. ニーチェ	選集（全2巻） （ <i>Nietzsches Werke</i> ）	[Herausgeber und Verfasser, Gerhard Stenzel]	Bergland-Buch	1952
	「ツァラトーストラ」	土井虎賀壽著	岩波書店	1936
19. シェストフ	選集（邦訳）（2巻）	シェストフ著	改造社	1934- 1935
20. 西田幾多郎	全集（全15巻）	西田幾多郎著／安倍能成ほか編	岩波書店	1947- 1953
21. 稲富栄次郎	著作集（全10巻）			
	1. 教育の本質	稲富栄次郎著	学苑社	1977
	2. ソクラテス・プラ トンの教育思想	稲富栄次郎著	学苑社	1980
	3. プロチノスス・ ピノザの哲学	稲富栄次郎著	学苑社	1979
	4. ルソオの教育思想	稲富栄次郎著	学苑社	1978
	5. ペスタロッチ・ヘル バルトの教育思想	稲富栄次郎著	学苑社	1979
	6. 西洋教育思想史	稲富栄次郎著	学苑社	1980
	7. 近代日本の教育思想	稲富栄次郎著	学苑社	1978
	8. 日本人、言葉、文化	稲富栄次郎著	学苑社	1978
	9. 人間形成と道徳	稲富栄次郎著	学苑社	1979
	10. 随筆、自伝、論説	稲富栄次郎著	学苑社	1980

V. ルソーとデュルケーム

1. ルソー

・全集	全集(フランス語、全20巻)(Oeuvres Complètes de J.-J. Rousseau, citoyen de Genève)	par Jean-Jacques Rousseau	éd. V. H. Perronneau	1818-1820
	全集(邦訳、ルソー全集、全16巻)	ルソー著／小林善彦[ほか]訳	白水社	1978-1984
	ルソー著作書誌(<i>Bibliographie Générale des Oeuvres de J.-J. Rousseau</i>)	Jean Sènequier	Presses Universitaires de France	1949
・往復書簡	往復書簡全集(フランス語、全20巻)(Correspondance Générale de J.-J. Rousseau, E.Droz.)	éd.T.Dufour	A. Colin	1924-1934
	ルソー往復書簡全集総目録・補遺(<i>Table de la correspondance générale de J.-J. Rousseau</i>)	Pierre-Paul Plan/publicées par Bernard Gagnebin	E. Droz	1953
・抜粋	先駆者の言葉-ルッソー珠玉集	ルッソー著／本田喜代治訳編	小石川書房	1948
	ルソー新生の書	ルソー著／廣瀬哲士編	新人社	1946
	ルソー自分史(<i>Rousseau par lui-même</i>)	Georges May	Éditions du Seuil	1961
・邦訳	学問芸術論(邦訳)	ルソー著／辰野隆、渡邊一夫、中島健蔵訳	河出書房	1950
	民約論覆義	戎雅屈婁騷原著／原田潜譯述	春陽堂	1883
	民約論	J・J・ルウソー著／根津憲三訳	春秋社	1948
	民約論増補	ジャン・ジャック・ルソー原著／市村光恵、森口繁治共訳	有斐閣	1923
	社会契約論	ルソー著／井伊玄太郎訳	霞書房	1947
	エミール改題	ジャン・ジャック・ルソー著／林鎌次郎訳	天心閣	1955
	エミール抄	ジャン・ジャック・ルソー原著／山口小太郎、島崎恒五郎共訳	開發社	1899
	新エロイズ(全3巻)	ルソー著／安土正夫訳	河出書房	1949-1951
	告白	J.-J. ルソー著／生島遼一訳	創元社	1947
	断腸録	ルッソオ著／榎本秋村訳	誠文堂書店	1917

	孤独な散歩者の夢想	ジャン・ジャック・ルソオ著／新城和一訳	愛宕書房	1947
	孤独な散歩者の夢想	ジャン、ジャック・ルソオ著／青柳瑞穂訳	講談社	1948
・ 研究書類	ルソー（フランス語） (<i>Jean-Jacques Rousseau</i>)	par F. Baldensperger... [et al.]	F. Alcan	1912
	ルソー (<i>Jean-Jacques Rousseau</i>)	par Samuel Baud-Bovy ... [et al.]	La Baconnière	1962
	ルソー (<i>Jean-Jacques Rousseau</i>)	Alfred Berchtold	Populaires, Arts graphiques	1962
	ルソー (<i>Jean-Jacques Rousseau : la transparence et l'obstacle</i>)	Jean Starobinski	Plon	1957
	ルソー（ドイツ語） (<i>Jean-Jacques Rousseau</i>)	von Paul Sakmann	F. Meiner	1923
	ルソー (<i>Jean-Jacques Rousseau</i>)	by Jules Lemaitre/ translated by Jeanne Mairet	W. Heinemann	1908
	ルソー（スウェーデン語）(<i>Jean Jacques Rousseau</i> , Kristiania forlagt)	Gerhard Gran	H. Aschehoug	1910
	ルソー	押村襄著	牧書店	1964
	ルソー	廣瀬哲士著	春秋社	1936
	ジャン・ジャック・ルソオ：市民と個人	作田啓一著	人文書院	1980
	ジャン・ジャック・ルソオ	アルテュール・シューケ著／神部孝訳	新潮社	1926
	ルソーの哲学 (<i>Rousseau und seine Philosophie</i>)	von Harald Höffding	Fr. Frommann	1910
	ルソー再興	新堀通也著	福村出版	1979
	ベニスでのルソー (J.-J. Rousseau à Venise)	raconté par lui-même/ édition enrichie de divers portraits de l'auteur, de vues de Venise et d'une composition en couleurs par Bachmann	M. Glomeau	1920
	ルソオの自然観と教育説	稲富栄次郎著	目黒書店	1934
	ヒュームとルッソー：裏切者と悪魔	山崎正一、串田孫一共著	創元社	1949
	ルソーよりバルザックへ	太宰施門著	政経書院	1934
	ルソーと百科全書 (<i>Rousseau et l'Encyclopédie</i>)	René Hubert	Gamber	1928

	ルッソー民約論	木村龜二著	岩波書店	1935
	政治学説史 (<i>History of Political Theories : from Rousseau to Spencer</i>)	by William Archibald Dunning	Macmillan	1920
	ルソーとの決別 (<i>Farewell to Rousseau : Critique of Liberal Democracy</i>)	by Claud Sutton/with an introduction by W.R. Inge	Christophers	1936
	ルソオの教育思想	稲富栄次郎著	福村書店	1949
	ルソーの教育思想	鯉坂二夫著	玉川学園出版部	1932
	ルソーとスイス (<i>Rousseau et la Suisse</i>)	par François Jost	Éditions du Griffon	1962
2. デュルケーム				
・ 著書	社会学的方法の規準 (<i>Règles de la Méthode Sociologique</i>)	par Émile Durkheim	Presses Universitaires de France	1950
	宗教生活の原初形態 (<i>Les Formes Élémentaires de la Vie Religieuse</i>)	par Émile Durkheim	F. Alcan	1925
	教育と社会学 (<i>Éducation et Sociologie</i>)	par Émile Durkheim/introduction de Paul Fauconnet	F. Alcan	1922
	社会学と哲学 (<i>Sociologie et Philosophie</i>)	par Émile Durkheim/préface de C. Bouglé	F. Alcan	1924
	道徳教育 (<i>L'Éducation Morale</i>)	par Émile Durkheim/avertissement de Paul Fauconnet	F. Alcan	1925
	フランス教育史 (全2巻) (<i>Évolution Pédagogique en France</i>)	Émile Durkheim/avec une introduction par Maurice Halbwachs	In-house reproduction, F. Alcan	1938
	社会学講義 (<i>Leçons de Sociologie</i>)	par Émile Durkheim/avant-propos de Hüseyin Nail Kubali/introduction de Georges Davy	Presses Universitaires de France	1950
	選集 (<i>Selected writings</i>)	Émile Durkheim/edited, translated, and with an introduction by Anthony Giddens	Cambridge University Press	1972
・ 邦訳	社会分業論 (上巻・下巻)	デュルケーム著／井伊玄太郎、壽里茂共訳	理想社	1957
	モンテスキューとルソー：社会学の先駆者たち	エミール・デュルケーム著／小関藤一郎、川喜多喬訳	法政大学出版局	1975

	プラグスティズムと社会学	エミール・デュルケーム遺稿／キュヴィリエ編／福鎌忠恕、福鎌達夫共訳	関書院	1956
・ 研究書	デュルケーム (<i>Emile Durkheim : sa vie, son œuvre</i>)	par Jean Duvignaud	Presses Universitaires de France	1965
	デュルケーム (<i>E. Durkheim</i>)	Robert Bierstedt/general editor, Edgar Johnson	Dell	1966
	デュルケーム (<i>E. Durkheim, 1858-1917 : a collection of essays, with translation and a bibliography</i>)	edited by Kurt H. Wolff/contributors, Charles Blend ... [et al.]	Ohio State University Press	1960
	デュルケーム (<i>Emile Durkheim : sociologist and philosopher</i>)	by Dominick LaCapra	Cornell University Press	1972
	デュルケーム (<i>Emile Durkheim</i>)	[selections from his work with an introduction and commentaries by] George Simpson	Crowell	1963
	デュルケーム (<i>Emile Durkheim</i>)	Robert A. Nisbet, with selected essays	Prentice-Hall	1965
	デュルケームの社会学論	中久郎著	創文社	1979
	デュルケーム社会学理論の研究	宮島喬著	東京大学出版会	1977
	デュルケーム社会学研究	佐々木交賢著	恒星社厚生閣	1978
	デュルケームと近代社会	小関藤一郎著	法政大学出版局	1978
	フランス学派中心哲学及び社会学研究	本田喜代治著	泰山房	1937
	フランスの社会科学	フランス學會編	刀江書院	1930
	デュルケーム道德教育論入門	麻生誠、原田彰、宮島喬著	有斐閣	1978
	宗教・道德・アノミー (<i>Religion, morale, anomie</i>)	Émile Durkheim/présentation de Victor Karady	Éditions de Minuit	1975
	社会学主義と実存主義 (<i>Sociologism and Existentialism</i>)	Edward A. Tiryakian	Prentice-Hall	1962
	フランス社会学の流れ (<i>Où va la Sociologie française? avec une étude d' E. Durkheim</i>)	Armand Cuvillier	M. Rivière	1953

VI. 教育社会学

1. 社会学	社会学入門	本田喜代治著	培風館	1958
	社会学	ラムネー、メイアー共著／小口信吉、横飛信昭共訳	黎明書房	1957
	社会学方法論	北川隆吉編	青木書店	1965
	産業社会学	尾高邦雄著	ダイヤモンド社	1963
	社会理論	松本潤一郎著	日光書院	1942
	家族問題と社会保障	吉田秀夫 [ほか著]	高文堂出版社	1975
	代表的社会学者 (ドイツ篇)	阿閉吉男著	教育書林	1954
	フランス社会学の研究	児玉幹夫、浜口晴彦共著	早稲田大学出版部	1968
	20世紀アメリカ社会学史	菊池綾子、村川隆著	現代文芸社	1958
	社会学史	ガストン・ブートゥール著／古野清人譯	白水社	1952
	社会学史概説	安西文夫著	中文館書店	1949
	社会学基礎論 (<i>Fundamentals of Sociology</i>)	by Edwin A. Kirkpatrick	Houghton Mifflin/Riverside Press	1916
	社会理論要説 (<i>Éléments d'une théorie sociale</i>)	Émile Durkheim / présentation de Victor Karady	Éditions de Minuit	1975
	社会学大学院案内 (<i>Guide to Graduate Departments of Sociology</i>)		American Sociological Association	1965-
	社会学史入門 (<i>An Introduction to the History of Sociology</i>)	edited by Harry Elmer Barnes	University of Chicago Press	1948
	社会学説史 (<i>Main Currents in Sociological Thought</i>)	by Raymond Aron / translated by Richard Howard & Helen Weaver	Basic Books	1965-1967
	現代社会学 (<i>Contemporary sociology</i>)	edited by Joseph S. Roucek	Philosophical Library	1958
	現代社会学 (<i>Sociology Today</i>)	edited by Robert K. Merton, Leonard Broom, Leonard S. Cottrell, Jr. / under the auspices of the American Sociological Society	Basic Books	1959
	20世紀の社会学 (<i>Twentieth Century Sociology</i>)	edited by Georges Gurvitch and Wilbert E. Moore	Philosophical Library	1945
	社会学者列伝 (<i>Sociologues d'hier et d'aujourd'hui</i>)	par Georges Davy	Presses Universitaires de France	1950

2. 教育社会学

・教育と社会	教育と社会 (<i>Education and Society</i>)	edited by W. Warren Kallenbach, Harold M. Hodges, Jr./with an introduction by Robert J. Havighurst	C. E. Merrill Books	1963
	教育と社会	宮原誠一著	金子書房	1949
	教育と社会	ドベス、ミアラレ編／波多野完治、手塚武彦、滝沢武久監訳	白水社	1977
	現代社会と教育	近藤大生、有本章編著	福村出版	1984
	社会と教育 (<i>Society and Education</i>)	Robert J. Havighurst, Bernice L. Neugarten	Allyn and Bacon	1957
	社会における教育 (<i>Education in Society : readings</i>)	Bernard N. Meltzer, Harry R. Doby, Philip M. Smith	Crowell	1958
	教育の社会的基盤 (<i>Social Basis of Education</i>)	by Harold S. Tuttle	Thomas Y. Crowell	1934
	教育の社会的原理 (<i>Social Principles of Education</i>)	by George Herbert Betts	C. Scribner	1913
	教育の社会的解釈 (<i>Social Interpretation of Education</i>)	by Joseph Kinmont Hart	Henry Holt	1929
	教育の社会学的解釈 (<i>Interpreting Education : a sociological approach</i>)	[compiled by] Lawrence W. Drabick	Appleton-Century-Crofts	1971
	教育の社会学的考察 (<i>On Education : sociological perspectives</i>)	edited by Donald A. Hansen and Joel E. Gerstl	Wiley	1967
	教育の社会学的基礎 (<i>Sociological Foundations of Education</i>)	by Joseph S. Roucek and associates	Thomas Y. Crowell	1942
	教育の地域社会的背景 (<i>Community Backgrounds of Education : a textbook in Educational Sociology</i>)	by Lloyd Allen Cook	McGraw-Hill	1938
	地域教育社会学序説	矢野峻著	東洋館出版社	1981
	米国社会学と教育：教育社会学史	佐々木徹郎著	関書院	1960
	教育環境学	細谷俊夫著	日黒書店	1950
	教育の環境と病理	新堀通也、津金沢聡広編著	第一法規出版	1984

	社会的教育学	ナトルプ著／篠原陽二 訳	玉川大学出版部	1954
	教育の社会的基礎 (<i>Social Foundations of Education</i>)	William O. Stanley ... [et al.]	Dryden Press	1956
	教育経済学論集 (<i>Read- ings of the Economics of Education</i>)	Editorial advisory committee, Mary Jean Bowman ... [et al.]	Unesco	1968
	教育と経済 (<i>Education, Economy, and Society</i>)	edited by A.H. Halsey, Jean Floud and C. Ar- nold Anderson	Free Press of Glencoe	1961
・教育社会学概 論類	教育社会学	西岡一義、下地恵常共著	杉山書店	1949
	教育社会学	東京教育大學教育學研 究室編	金子書房	1950
	教育社会学	周郷博著	光文社	1951
	教育社会学	教師養成研究会著	学芸図書	1952
	教育社会学	田浦武雄著	碩学書房	1954
	教育社会学	清水義弘著	東京大學出版會	1956
	教育社会学	本庄良邦著	峯書房	1956
	教育社会学：ラテン文 化圏の研究	加藤正泰著	大明堂	1962
	教育社会学	永杉喜輔編	協同出版	1968
	教育社会学	馬場四郎 [ほか] 編著	学文社	1970
	教育社会学	パトリシア・C・セク ストン著／麻生誠、石 田純訳	至誠堂	1971
	教育社会学	馬場四郎 [ほか] 編著	学文社	1973
	要説・教育社会学	加藤正泰著	酒井書店	1975
	教育社会学	李圭煥著	培英社	1978
	教育社会学	重松俊明著	松籟社	1980
	教育社会学	新堀通也、加野芳正著	玉川大学出版部	1987
	教育社会学30年（戦後 教育を語る）	清水義弘、河野重男、 新井郁男著	ぎょうせい	1977
	教育社会学論究	日本教育學會編	目黒書店	1950
	教育社会学の構想	海後勝雄著	金子書房	1950
	教育社会学の構造	清水義弘著	東洋館出版社	1955
	教育社会学の基本問題	日本教育社会学会編	東洋館出版社	1973
教育社会学 (<i>Education- al Sociology</i>)	Gale Edw. Jensen	Center for Applied Re- search in Education	1965	
教育社会学 (<i>Education- al Sociology: a study in child, youth, school and community</i>)	Florence Greenhoe Robbins	Henry Holt and Co.	1953	

	教育社会学の基礎 (<i>Foundations of Educational Sociology</i>)	by Charles C. Peters	Macmillan	1924
	社会学と現代教育 (<i>Sociology and Contemporary Education</i>)	Robert Bierstedt ... [et al.] /edited by Charles H. Page/foreword by David Riesman	Random House	1964
	社会学と教育 (<i>Sociology, History and Education</i>)	edited with an introduction by P. W. Musgrave	Methuen	1970
	社会学とリハビリテーション (<i>Sociology and Rehabilitation, American Sociological Association</i>)	Marvin B. Sussman, editor	Published by the American Sociological Association in cooperation with the Vocational Rehabilitation Administration, U. S. Dept. of Health, Education and Welfare under VRA	1965
	教育実践と社会学 (<i>Sociology in Educational Practice</i>)	by Clyde B. Moore and William E. Cole	Houghton Mifflin	1952
	米国における社会学者の教育 (<i>Education of Sociologists in the United States</i>)	by Elbridge Sibley	Russell Sage Foundation	1963
	教育社会学 (<i>Educational Sociology</i>)	by Francis J. Brown	Prentice-Hall	1947
	社会学的教育学 (<i>Soziologische Pädagogik</i>)	von Siegfried Kawerau	Quelle & Meyer	1924
	教育社会学 (<i>Pädagogische Soziologie: zur Erziehungs- und Schulsoziologie</i>)	von Johann Dieckmann/ mit einem Beitrag von Paul Lorenz	Quelle & Meyer	1970
	教育社会学の発達 (<i>Entwicklung der Pädagogischen Soziologie</i>)	J. H. Whang	Henn	1963
	教育社会学要説 (<i>Allgemeine Pädagogische Soziologie</i>)	von Carl Weiß	J. Klinkhardt	1958
	教育環境の社会学 (<i>Soziologie der Pädagogischen Umwelt</i>)	herausgegeben von G.M. Teutsch	Ferdinand Enke	1965
・教育の社会学	教育の社会学 (<i>A Sociology of Education</i>)	Wilbur B. Brookover/ in collaboration with Orden C. Smucker and John Fred Thaden	American Book	1955
	教育の社会学 (<i>Sociologie de l'éducation</i>)	Pierre Jaccard	Payot	1962

教育の社会学	カール・マンハイム著／ 末吉悌次、池田秀男共 訳	黎明書房	1964
教育の社会学 (<i>The Sociology of Education</i>)	P. W. Musgrave	Methuen	1965
教育の社会学 (<i>A Sociology of Education: emerging patterns of class, status, and power in public schools</i>)	Ronald G. Corwin	Appleton-Century-Crofts	1965
教育の社会学 (<i>The Sociology of Education</i>)	Olive Banks	Schocken Books	1968
教育の社会学 (<i>Sociology of Education: a book of readings</i>)	edited by Ronald M. Pavalko	F. E. Peacock Publishers	1968
教育の社会学 (<i>The Sociology of Education : introductory analytical perspectives</i>)	by D.F. Swift	Routledge & K. Paul/ Humanities Press	1969
教育の社会学 (<i>The Sociology of Education: an introduction</i>)	Ivor Morrish	Allen and Unwin	1972
教育の社会学入門 (<i>An Introduction to the Sociology of Education</i>)	by Karl Mannheim and W.A.C. Stewart	Routledge & K. Paul	1962
社会学と未来の教育 (<i>Sociologie et éducation de demain</i>)	Henri Damaye	F. Alcan	1931
社会学から社会活動へ (<i>De la Sociologie à l'action sociale : pacifisme, féminisme, coopération</i>)	C. Bouglé	F. Alcan	1931
社会学と現実問題 (<i>Sociologie et problèmes actuels</i>)	par Armand Cuvillier	Philosophique J. Vrin	1958
教育制度の社会学 (<i>Soziologie des Bildungswesens : eine Einführung</i>)	Artur Meier	Volk und Wissen, Volkseigener Verlag	1974
社会学と教育科学 (<i>Soziologie und Erziehungswissenschaft</i>)	von Heinrich Stieglitz	Ferdinand Enke	1970
・学校社会学 学校と社会	森隆夫著	教育開発研究所	1976

学校集団	ウィラード・ウォーラー著／石山脩平、橋爪貞雄訳	明治図書出版	1957
現代学校論	山村賢明、門脇厚司編	亜紀書房	1982
教育のない学校	カール・ペライター著／下村哲夫訳	学陽書房	1975
学校社会学案内 (<i>Manual to the Sociology of the School</i>)	Royston Lambert, Spencer Millham and Roger Bullock	Weidenfeld & Nicolson	1970
学校、学生、社会 (<i>Schools, Scholars, and Society</i>)	Jean Dresden Grambs	Prentice-Hall	1965
米国の学校：社会学的分析 (<i>American School: a sociological analysis</i>)	Patricia Cayo Sexton	Prentice-Hall	1967
小集団の社会学	青井和夫著	東京大学出版会	1980
不就学のすすめ	ポール・グッドマン [著] / 片岡徳雄監訳	福村出版	1979
文化と学級における価値 (<i>Values in Culture and Class-room : sociology of the school</i>)	H. Otto Dahlke	Harper & Bros.	1958
学習に対する社会階級の影響 (<i>Social-class Influences upon Learning</i>)	by Allison Davis	Harvard University Press	1958
学校の支配者 (<i>Who runs our Schools?</i>)	Neal Gross	J. Wiley	1958
現代社会における学校 (<i>The School in Contemporary Society</i>)	by David A. Goslin	Scott, Foresman	1965
学校と社会 (<i>Ecole et Société</i>)	Jean Floud ... [et al.] / chroniques par Benno Sarel, Pierre Rolle	Rivière	1959
学校と社会 (<i>Schule und Gesellschaft</i>)	Leonhard Froese	Julius Beltz	1962
高等学校の社会体系 (<i>Social System of the High School</i>)	by C. Wayne Gordon / with a foreword by Stuart A. Queen	Free Press	1957
高校におけるバリアの除去 (<i>Removing Barriers to Humaness in the High School</i>)	prepared by the ASCD Council on Secondary Education./edited by J. Galen Saylor and Joshua L. Smith	Association for Supervision and Curriculum Development, NEA	1971
現代学校教育学 (<i>La Pédagogie Scolaire Contemporaine, Coimbra</i>)	Emile Planchard	E. Nauwelaerts	1954

	学級の社会学と社会心理学 (<i>Soziologie und Sozialpsychologie der Schulklasse</i>)	von Carl Weiß	J. Klinkhardt	1955
・人間形成論	人間形成の社会学	菊池幸子、仙崎武編著	福村出版	1983
	現代社会と人間形成	末吉悌次編著	帝国地方行政学会	1973
	人間形成 (<i>Father of the Man, how your child gets his personality</i>)	by W. Allison Davis and Robert J. Havighurst/with a chapter by Helen Ross	Houghton Mifflin	1947
	子ども期と社会 (<i>Childhood and Society</i>)	Erik H. Erikson	W.W. Norton	1950
	社会理論と社会構造 (<i>Social Theory and Social Structure</i>)	Robert K. Merton	Free Press	1957
	民族 (<i>Race : science and politics</i>)	by Ruth Benedict	Viking Press	1945
	クーリー (<i>Charles Horton Cooley : his life and his social theory</i>)	by Edward C. Jandy/with an introduction by Willard Waller	Dryden Press	1942
	エリクソンの研究 (上巻・下巻)	ロバート・コールズ著 ／鎌幹八郎監訳	ぺりかん社	1980
	自我包絡の心理学 (<i>The Psychology of Ego-involvement: social attitudes and identifications, Sciene Editions</i>)	by Muzafer Sherif, Hadley Cantril	J. Wiley	1947
	愛するということ	エーリッヒ・フロム著 ／懸田克躬訳	紀伊國屋書店	1959
	メリトクラシーの勃興 (<i>The Rise of the Meritocracy: the new elite of our social revolution</i>)	by Michael Young	Random House	1958
	機会の不平等：産業社会における教育と社会移動	レイモン・ブードン著 ／杉本一郎、山本剛郎、草壁八郎訳	新曜社	1983
	日本の階級構成	大橋隆憲編著	岩波書店	1971
	新しい階級論	テオドール・ガイガー著 ／鈴木幸壽訳	誠信書房	1957
	階級意識	R. センターズ著 ／松島静雄訳	東京大学出版会	1958
	教育機会均等の幻想	M. ミルナー著 ／波平勇夫、野淵龍雄訳	黎明書房	1976
	主体性：アイデンティティ	E・H・エリクソン著 ／岩瀬庸理訳	北望社	1970

カスパー・ハウザー： 野生児の記録	A. V. フォイエルバッ ハ著／中野善達、生和 秀敏訳	福村出版	1977
アヴェロン ¹⁾ の野生児： 野生児の記録	J. M. G. イタール著／ 中野善達、松田清訳	福村出版	1978
人間はなぜ遊ぶか	M. J. エリス 著／森 林、大塚忠剛、田中亨 胤訳	黎明書房	1977
遊びと発達の心理学	J. ピアジェ [ほか] 著 ／M. ピアーズ編／赤 塚徳郎、森林監訳	黎明書房	1978
遊びの考現学	門脇厚司著	誠文堂新光社	1982
日本人の形成 (<i>Learn- ing to be Japanese: select- ed readings on Japanese society and education</i>)	edited by Edward R. Beauchamp	Linnet Books	1978
都市の日本人	R. P. ドーア著／青井和 夫、塚本哲人訳	岩波書店	1962
子どもが危ない	岡田春生著	エール出版社	1975
少年非行	ヒーラー著／樋口幸吉訳	みすず書房	1956
少年非行	樋口幸吉著	紀伊國屋書店	1963
校内暴力	沖原豊著	小学館	1983
荒廃するアメリカ	P. チョート、S. ウォル ター著／社会資本研究 会訳	開発問題研究所	1982
高級住宅地とスラム (<i>Gold Coast and the Slum: Sociological study of Chicago's near north side</i>)	by Harvey Warren Zorbaugh	University of Chicago Press	1929
不良少年たち (<i>The Gang: a study of 1, 313 gangs in Chi- cago</i>)	by Frederic M. Thrash- er	University of Chicago Press	1927
街頭社会 (<i>Street Cor- ner Society: the social structure of an Italian slum</i>)	by William Foote Whyte	University of Chicago Press	1955
エルムタウンの若者た ち (<i>Elmtown's Youth: the impact of social classes on adolescents</i>)	August B. Hollings- head	J. Wiley	1949
過渡期のミドルタウン (<i>Middletown in Tran- sition: a study in cul- tural conflicts</i>)	by Robert S. Lynd & Helen Merrell Lynd	Harcourt, Brace	1937

アメリカ教育における
文化 (*Culture in American Education: anthropological approaches to minority and dominant groups in the schools*)

Ruth Landes

John Wiley & Sons

1965

VII. 高等教育の社会学

1. 科学社会学・大学教授論	科学社会学 (<i>Sociology of Science: theoretical and empirical investigations</i>)	Robert K. Merton/edited and with an introduction by Norman W. Storer	University of Chicago Press	1973
	科学社会学 (<i>Sociology of Science</i>)	edited by Bernard Barber and Walter Hirsch	Free Press of Glencoe	1962
	ヨーロッパにおける科学社会学 (<i>Sociology of Science in Europe</i>)	edited by Robert K. Merton and Jerry Gaston	Southern Illinois University Press/Feffer & Simons	1977
	科学、産業、社会 (<i>Science, Industry and Society: studies in the sociology of science</i>)	by Stephen Cotgrove and Steven Box	G. Allen & Unwin	1970
	組織における科学者 (<i>Organizational Scientists: their professional careers</i>)	Barney G. Glaser	Bobbs-Merrill	1964
	アメリカの若き科学者 (<i>The Younger American Scholar: His Collegiate Origins</i>)	by Robert H. Knapp and Joseph J. Greenbaum	Published by the University of Chicago Press and the Wesleyan University Press incorporated for Wesleyan University	1953
	社会科学者の精神 (<i>Academic Mind: social scientists in a time of crisis</i>)	by Paul F. Lazarsfeld and Wagner Thielens, Jr. /with a field report by David Riesman	Free Press of Glencoe	1958
	イギリスの大学人 (<i>British Academics</i>)	A.H. Halsey and M.A. Trow/with the assistance of Oliver Fulton	Faber and Faber	1971
	学校教員と大学教授 (<i>Instituteurs et professeurs</i>)	par Gilbert Allan	Presses Universitaires de France	1964
	大学院教育の誕生 (<i>Beginnings of Graduate Education in America</i>)	by Richard J. Storr	University of Chicago Press	1953
	高等教育の官僚制 (<i>Bureaucracy in Higher Education</i>)	by Herbert Stroup	Free Press	1966
	権力・学長・教授 (<i>Power, presidents and professors</i>)	Nicholas J. Demerath, Richard W. Stephens, R. Robb Taylor	Basic Books	1967
	学問の社会学	新堀通也編著	有信堂高文社	1984
学問論	シェリング著／勝田守一譯	創元社	1944	

学問方法論	大關將一著	建文館	1933
中世から近代への科学史	A. C. クロムビー著／渡辺正雄、青木靖三訳	コロナ社	1962-1968
洋学史研究序説	佐藤昌介著	岩波書店	1964
近代科学再考	広重徹著	朝日新聞社	1979
何のための科学か	バーナード・ディクソン著／増田幸夫、塩川久男共訳	紀伊國屋書店	1977
ラディカル・サイエンス	H・ローズ、S・ローズ編／里深文彦他訳	社会思想社	1980
等身大の科学	里深文彦著	日本ブリタニカ	1980
近代の科学革命	中桐大有著	法律文化社	1967
人物で描く近代科学	I. B. コーエン [ほか] 著／菅井準一、市場泰男訳	白揚社	1960
ドイツ科学の再興	ヴァイツェッカー他著／科学新聞社訳編	科学新聞社	1968
アメリカの科学とテクノロジー		アメリカ大使館	1959
アメリカの研究産業	市川泰治郎著	鹿島研究所出版会	1971
産業社会学	尾高邦雄著	ダイヤモンド社	1963
産業革命期の科学者たち	J. G. クラウザー著／鎮目恭夫訳	岩波書店	1964
学問と党派性：マックス・ウェーバー論考	R. ベンディックス、G. ロート著／柳父圀近訳	みすず書房	1975
嵐のなかの百年	向坂逸郎編著	勁草書房	1952
魔女と科学者：エピソード科学史	平田寛編	人物往来社	1967
知識人	ルイ・ボダン著／野沢協訳	白水社	1963
知識人の生成と役割	加藤周一、久野収編	筑摩書房	1959
知識人と社会	L. コーザー著／高橋徹監訳	培風館	1970
知識産業革命：脱工業化社会への転換	坂本二郎著	ダイヤモンド社	1968
脱工業化の社会	アラン・トゥレーヌ著／寿里茂、西川潤訳	河出書房新社	1970
技術三流国日本	岩田幸基著	東洋経済新報社	1971
科学・技術と日本人	枯木陶著	講談社	1967
日本人と創造性	乾侑著	共立出版	1982
我が国の学術	文部省学術国際局編	日本学術振興会	1975
学術審議会要覧		文部省大学学術局	1969

創造の行動科学	D. C. ペルツ、F. M. アンドリュース著／長町三生 [ほか] 訳	ダイヤモンド社	1971	
知識文明の構想	D. ベル、E. G. メッサニー著／白根禮吉編訳	ダイヤモンド社	1969	
科学者の生活と意見	服部英太郎編	日本学術振興会	1961	
研究人間—創造的科学技術者への道	B・E・ノルティンク著／大鹿譲、金野正訳	共立出版	1971	
研究人間：統一科学技術者の創造性を生かす道	B・E・ノルティンク著／大鹿譲、住吉和司訳	共立出版	1973	
学者氣質	小酒井不木著	春陽堂	1926	
学者商売	野々村一雄著	中央公論社	1960	
学者の横顔	藤崎俊茂著	不動書房	1933	
学者の時代	ネイサン・M・ピューシー著／川地理策、石田剛、石田孝子訳	関書院新社	1967	
学者の森 上・下	藤田信勝著	毎日新聞社	1963	
学界新風景	大塚虎雄著	天人社	1930	
關西学界展望	林純平著	文友堂書店	1938	
大學と人物	錦谷秋堂著	國光印刷出版部	1914	
大学教授を斬る：知識売人になり下った偽善者たち：教授能力調査レポート	鴻生田努著	日新報道	1978	
戦後日本の大学・学問をダメにした教授101人	池田信一著	山手書房	1978	
日本の大学教授	ウィリアム・K・カミングス著／岩内亮一、友田泰正訳	至誠堂	1972	
官僚と大學教授	都留重人著	勁草書房	1951	
大学教授職の総合的研究：アカデミック・プロフェッションの社会学	新堀通也編著	多賀出版	1984	
講義のあとで：碩学30人が語る学問の世界	日本リクルートセンター出版部編	日本リクルートセンター出版部	1980-1983	
2. 学歴・学閥	学歴社会：新しい文明病	R. P. ドーア著／松居弘道訳	岩波書店	1978
学歴社会	矢倉久泰著	教育社	1978	
学歴社会の読み方	麻生誠著	筑摩書房	1983	
学歴社会の転換	潮木守一著	東京大学出版会	1978	
学歴信仰社会	尾形憲著	時事通信社	1976	
日本の学歴社会は変わる	竹内宏、麻生誠編	有斐閣	1981	
学歴社会の虚像	小池和男、渡辺行郎著	東洋経済新報社	1979	
学歴主義からの脱却	橋爪貞雄著	黎明書房	1983	

学歴主義の系譜	深谷昌志著	黎明書房	1969
学歴主義の発展構造	岩田龍子著	日本評論社	1981
出世は学歴できまるか	清川一穂著	鶴書房	1959
学歴ってなんだ	東京新聞編集局編	東京新聞出版局	1977
学歴主義のつぎにくるもの	千石保、松原治郎編著	学陽書房	1978
学歴無用論	盛田昭夫著	文藝春秋社	1966
学歴偏重とその功罪	橋爪貞雄編著	第一法規出版	1976
学歴効用論	麻生誠、潮木守一編	有斐閣	1977
「学習社会」への挑戦	天野郁夫著	日本経済新聞社	1984
大学卒業者の労働市場	小池和男著	[出版者不明]	1967
大学卒業者の就業構造	小池和男著	[出版者不明]	1967
学閥	新堀通也編	福村出版	1969
東大閥	佐藤友之、山田邦紀、大場久詮著／佐藤友之編	エール出版社	1972
赤門教授らくがき帖：東京大学80年	鈴木信太郎編	鱒書房	1955
明治大正人傑傳：朝野の五代閥	鶴崎鷺城著	成輝堂書店	1927
閥族罪惡史	細井肇著	細井肇／大鏡閣（発売）	1919
大学受験に関する研究	青年教育科学研究会編	青年教育科学研究会	1962
高等教育への進学問題	国際大学協会編	民主教育協会	1965
フランス大学入学資格試験制度史	宮脇陽三著	風間書房	1981
日本の能力主義	井上富雄著	日本経営出版会	1969
3. 階級・官僚制			
日本の階級構成	大橋隆憲編著	岩波書店	1971
日本の階層構造	富永健一編	東京大学出版会	1979
あたらしい階級社会	テオドール・ガイガー著／鈴木幸壽訳	誠信書房	1957
日本近代化と教育	ハーバート・パッシン著／國弘正雄訳	サイマル出版会	1969
日本のサラリーマン	松成義衛 [ほか] 著	青木書店	1957
現代のホワイトカラー	岸本英太郎編	ミネルヴァ書房	1961
現代サラリーマン論	松成義衛著	法政大学出版局	1965
現代の中間階級	田沼肇編	大月書店	1958
日本の中産階級	大河内一男著	文藝春秋新社	1960
アメリカの階級構造	ジョーゼフ・A・カーン著／稲本國雄訳	時事通信社	1958
階級意識	R. センターズ著／松島静雄訳	東京大学出版会	1958
エリートと社会	T. B. ボットモア著／綿貫讓治訳	岩波書店	1965

	エリート形成と教育	麻生誠著	福村出版	1978
	パワー・エリート (上・下)	C. W. ミルズ著／鶴飼 信成、綿貫譲治訳	東京大学出版会	1958
	知識階級	テオドール・ガイガー 著／鈴木幸寿訳	玄海出版社	1953
	転向：共同研究 上巻・ 下巻	思想の科学研究会編	平凡社	1959- 1962
	官僚	福本邦雄著	弘文堂	1959
	官僚『わしが國さ』	伊藤金次郎著	宝雲舎	1940
	官僚二十五年	長岡隆一郎著	中央公論社	1939
	組織と官僚制	N・ムゼリス著／石田 剛訳	未来社	1971
	官僚制と人間	ベンディックス著／高 橋徹、綿貫譲治訳	未来社	1956
	現代政治に於ける官僚 の地位	吉村正著	前野書店	1950
	大学の官僚制	H・ストループ著／松 原治郎、小野浩、石田 純共訳	東京大学出版会	1972
4. 大学論	大学とはなにか：「ア カデミック」概念をめぐって	ヨゼフ・ピーパー著／ 稲垣良典訳	エンデルレ書店	1966
	大学について	矢内原忠雄著	東京大学出版会	1952
	大学教育	海後宗臣、寺崎昌男著	東京大学出版会	1969
	大学の理念と実践	東海大学学生生活研究 所編／[内多毅ほか執筆]	東海大学出版会	1973
	大学はどこへ行く		毎日新聞社	1978
	大学の未来像	J. A. パーキンス著／天 城勲、井門富二夫訳	東京大学出版会	1968
	変革期の大学像：日本 の高等教育の未来	天野郁夫著	日本リクルートセン ター出版部	1980
	大学革命 (<i>Academic Revolution</i>)	Christopher Jencks & David Riesman	Doubleday	1968
	大学革命：変革の未来像	デイビッド・リースマ ン、クリストファー・ ジェンクス著／國弘正雄 訳	サイマル出版会	1969
	日本の大学	大河内一男著者代表	東京大学出版会	1968
	わが国の高等教育：戦 後における高等教育の 歩み	文部省著	大蔵省印刷局	1964
	現代高等教育の構造	江原武一著	東京大学出版会	1984
	現代私立大学論	大沢勝著	風媒社	1966

あすへの教育 大学篇	朝日新聞社会部編	朝日新聞社	1961
私学の自律性と公共性：益井重夫先生退官記念	益井重夫先生をお送りする会編	益井重夫先生をお送りする会	1978
大学の庭 上・下	朝日ジャーナル編集部編	弘文堂	1964
九大風雪記	鬼頭鎮雄著	西日本新聞社	1948
大学の散歩道	相原茂編	東京大学出版会	1966
新しい大学	ジョン・ローラー編／上村達雄訳	時事通信社	1970
新しい大学像をもとめて	内田忠夫、衛藤藩吉編著	日本評論社	1969
国民のための大学：（自由民主党文教制度調査会中間報告案）	自由民主党文教制度調査会編	自由民主党広報委員会出版局／しなの出版（発売）	1969
21世紀の大学：筑波大学10年の挑戦	福田信之編	サイマル出版会	1984
高等教育改革への道	大学の教育の改善に関する国際会議企画委員会編	ぎょうせい	1983
世界の大学改革	大学改革研究会編	亜紀書房	1969
大衆のための大学	アール・J・マッグラス編／清水義弘監訳	東京大学出版会	1969
市民の大学	井門富二夫著	東京大学出版会	1971
地域社会と国立大学	清水義弘編	東京大学出版会	1975
成瀬先生：日本女子大学創立者 改訂版	渡邊英一編	櫻楓會出版部	1948
大学設置基準の研究	天城勲、慶伊富長編／天城勲 [ほか] 執筆	東京大学出版会	1977
大学基準協会十年史	大学基準協会編	大学基準協会	1957
大学教授法入門	ロンドン大学教育研究所大学教授法研究部著／喜多村和之、馬越徹、東曜子編訳	玉川大学出版部	1982
大学出版部：科学の発展のために	G. R. ホウズ著／箕輪成男訳	東京大学出版会	1969
情報としての出版	箕輪成男著	弓立社	1982
歴史としての出版	箕輪成男著	弓立社	1983
新制大学の諸問題：大学基準協会創立十年記念論文集	大学基準協会編	大学基準協会	1957
学徒援護会25年史（学徒援護会、昭）	学徒援護会編	学徒援護会	1972
変革期における西ドイツ高等教育	関口礼子著	昭和堂	1980

ヨーロッパの大学改革：坂田文部大臣訪欧記録	文部省著	文部省	1971
大学教育の諸問題 (<i>Issues in University Education: essays by ten American scholars</i>)	edited by Charles Frankel	Harper & Bros.	1959
大学教育の目的 (<i>The Purposes of Higher Education</i>)	by Huston Smith/foreword by Arthur H. Compton	Harper & Bros.	1955
19世紀フランスの大学事情 (<i>La Condition universitaire en France au XIX siècle</i>)	Paul Gerbod	Presses Universitaires de France	1965
大学の学位制度 (<i>Systèmes de grades universitaires</i>)	R. C. McLean	Bureau international des universités	1952
過渡期の大学 (<i>University in Transition: an Indian case study</i>)	by Philip G. Altbach	Sindhu Publications	1972
アメリカの高等教育 (<i>American Higher Education: directions old and new</i>)	by Joseph Ben-David	McGraw-Hill	1972
アメリカの高等教育 (<i>The Higher Learning in America</i>)	by Thorstein Veblen/introduction by Louis M. Hacker	Sagamore Press	1957
アメリカの大学とカレッジ (<i>American universities and colleges</i>)	edited by A.J. Brumbaugh/Mary Irwin, assistant editor	American Council on Education	1948
9カ国の高等教育 (<i>Higher Education in Nine Countries: a comparative study of colleges and universities abroad</i>)	by Barbara B. Burn/with chapters by Philip G. Altbach, Clark Kerr [and] James A. Perkins	McGraw-Hill	1971
学術センター (<i>Centers of Learning</i>)	by Joseph Ben-David/prepared for the Carnegie Commission on Higher Education	McGraw-Hill	1977
日本の大学改革 (<i>Changes in the Japanese University: a comparative perspective</i>)	edited by William K. Cummings, Ikuo Amano, Kazuyuki Kitamura/foreword by Michio Nagai/contributors, Ikuo Amano ... [et al.]	Praeger	1979

	未来に向っての大学 (<i>Universities Facing the Future, World Year Book of Education</i>)	joint editors, W. Roy Niblett [and] R. Freeman Butts/associate joint editor, Brian Holmes	Published in association with the University of London Institute of Education and Teachers College, Columbia University, New York by Evans Bros.	1972
	大学進学者の問題 (<i>Who should go to college</i>)	by Byron S. Hollinshead/with a chapter on the role of motivation in attendance at post-high-school educational institutions by Robert J. Havighurst and Robert R. Rodgers	Published for the Commission on Financing Higher Education [by] Columbia University Press	1952
	シカゴ大学人物史 (<i>University of Chicago: biographical sketches, 2 vols.</i>)	by Thomas Wakefield Goodspeed	University of Chicago Press	1924-1925
	ハーバード大学教育学大学院年報 (<i>Harvard University, the Graduate School of Education, Annual Report 1967-1968</i>)	Harvard University, Graduate School of Education, Center for Studies in Education and Development	Harvard University, Graduate School of Education, Center for Studies in Education and Development	1967-1968
	決断の時代における高等教育 (<i>Higher Education in a Decade of Decision</i>)	Educational Policies Commission	National Education Association of the United States (N.E.A.) /American Association of School Administrators (A.A.S.A.)	1957
	民主主義と大学 (<i>Hochschule in der Demokratie</i>)	von Wolfgang Nitsch ... et al./unter Mitarbeit von Heinz Großmann und Peter Müller	Luchterhand	1965
5. 学生運動	現代の学生運動：その思想と行動	学生運動研究会著	新興出版社	1961
	反逆するスチューデントパワー：世界の学生革命	高橋徹編	講談社	1968
	学生運動：大学の改革か社会の改革か	鈴木博雄著	福村出版	1968
	学生の反乱	ルデイ・ドゥチュケ他著／船戸満之訳	合同出版	1968
	スチューデント・パワー	毎日新聞社編	毎日新聞社	1968
	危機の学生運動：歴史とその展望	新井恒易著	明治書院	1952

学生と政治	S. M. リブセット編／ 内山秀夫、大久保貞義 共編訳	未来社	1969
政治のなかの学生：国 際比較の視点から	P. G. アルトバック [著] / 喜多村和之訳	東京大学出版会	1971
抗日学生史	梁東柱編著	青坡出版社	1956
全学連：その行動と理論	大野明男著	講談社	1968
全学連：その意識と行動	時事問題研究所編	時事問題研究所	1968
ゼンガクレン：革命に 賭ける青春	猪野健治著	双葉社	1968
全学連各派：学生運動 事典	社会問題研究会編	双葉社	1969
全学連血風録	大野明男著	20世紀社	1967
新しい左翼：政治的無 関心からの脱出	E. P. トムスン編／福田 歓一、河合秀和、前田 康博訳	岩波書店	1963
デモに渦巻く青春：現 代学生思想と行動	大野力著	番町書房	1968
学生達が目を輝かすとき	岩田龍子著	龍溪書舎	1984
視線と連想：乗りもの の中に学生の像を求めて	東海大学学生生活研究 所編	東海大学出版会	1975
高校生は反逆する	平栗清司編	三一書房	1969
職場へ広がる暴力：反 戦青年委員会の実態	日刊労働通信社編	日刊労働通信社	1969
日本の反文化の伝統	上林澄雄著	エッソ・スタンダード 石油広報部	1973
日本の戦闘的教師た ち：外人研究者に語られ た日教組の闘争三十年史	B・C・デューク著／ 市川博訳	教育開発研究所	1976
第三の世代：現代の学 生群像	尾崎盛光著	法律文化社	1960
ユースカルチャー史： 若者文化と若者意識	坂田稔著	勁草書房	1979
自由とひげと若者と	尾崎盛光著／岩崎隆 治、森村稔編	日本リクルートセン ター出版部	1981
現代青年論	濱島朗編	有斐閣	1973
精神分裂病の心理	村上仁著	弘文堂	1948
社会運動の心理学	H. キャントリル著／南 博、石川弘義、滝沢正 樹訳	岩波書店	1959
煽動の技術	L. ローウェンタール、 N. グターマン著／辻村 明訳	岩波書店	1959
紛争の社会科学：社会 的紛争の本質	マックニール編／千葉 正士編訳	東京創元社	1971

イデオロギーの終焉	ダニエル・ベル著／岡田直之訳	東京創元新社	1969
ひび割れた大学：大学知識人と政治的志向	ラッド、リプセット著／中野秀一郎、柏岡富英、木下博道訳	東京創元社	1980
現代政治の思想と行動	丸山眞男著	未來社	1964
大学の顛落	森戸辰男著	松下視聴覚教育研究財団	1979
大学の秘密：自治の名のもとで	鈴木眞一著	潮文社	1981
国際学生運動：歴史と背景 (<i>International Student Movement: history and background</i>)	Gert van Maanen	International Documentation and Information Centre	1966
学生運動 (<i>Student Unrest: threat or promise?</i>)	prepared by the ASCD Council on Secondary Education/edited by Richard L. Hart and J. Galen Saylor	Association for Supervision and Curriculum Development	1970
学生の政治運動 (<i>Student Politics: perspectives for the eighties</i>)	edited by Philip G. Altbach	Scarecrow Press	1981
学生の政治運動 (<i>Student Politics: student movements, past and present</i>)	Seymour Martin Lipset, editor	Basic Books	1967
学生と政治 (<i>Student and Politics, Daedalus</i>)		Journal of American Academy of Arts and Science	1968
学生の抗議 (<i>Students Protest</i>)	special editors of this volume, Philip G. Altbach, Robert S. Laufer	Annals of the American Academy of Political and Social Science	1971
学生の反乱 (<i>Students in Revolt</i>)	edited by Seymour Martin Lipset and Philip G. Altbach	Houghton Mifflin	1969
学生革命 (<i>Student Revolution: a global analysis</i>)	edited by Philip G. Altbach	Lalvani Pub. House	1970
新左翼 (<i>New Radicals: a report with documents</i>)	by Paul Jacobs and Saul Landau	Random House	1966
群衆の中の個人 (<i>Faces in the Crowd: individual studies in character and politics</i>)	by David Riesman/in collaboration with Nathan Glazer	Yale University Press	1952

蔦の壁に向かって (<i>Up against the Ivy Wall: a history of the Columbia crisis</i>)	by Jerry L. Avorn ... [et al.] /edited with an introduction by Robert Friedman	Atheneum Press	1968- 1969
高等教育と学生問題 (<i>Higher Education and Student Problem</i>)	新堀通也編	国際文化振興会	1972
日本最初の学生運動 (<i>Japan's First Student Radicals</i>)	Henry DeWitt Smith, II	Harvard University Press	1972
学生の反乱 (<i>La Révolte Etudiante</i>)	[par] J. Sauvageot, A. Geismar, D. Cohn-Ben- dit, J.-P. Duteuil/présen- tation, d'Hervé Bourges	Éditions du Seuil	1968
五月革命 (<i>Le Mai de la Révolution</i>)	P. Andro, A. Dauvergne et L.-M. Lagoutte	Julliard	1968
五月運動 (<i>Le Mouvement de Mai, ou, le communisme utopique</i>)	Alain Touraine	Seuil	1968
五月のバリケード (<i>Les Barricades de Mai</i>)	présentation de Philippe Labro/photographies de l'Agence Gamma	R. Solar	1968

VIII. その他

1. 生涯教育論	生涯教育論	波多野完治著	小学館	1972
	生涯教育とは	ポール・ラングラン著	日本ユネスコ国内委員会	1970
	生涯教育新講	波多野完治著	教育開発研究所	1975
	生涯教育と学校教育	森隆夫著	教育開発研究所	1974
	限界なき学習：ローマ・クラブ第6レポート	J. W. ボトキン他著／大来佐武郎監訳	ダイヤモンド社	1980
	生涯学習の時代	市川昭午、天野郁夫編	有斐閣	1982
	生涯設計計画：日本型福祉社会のビジョン	村上泰亮、蠟山昌一ほか著	日本経済新聞社	1975
	現代の成人教育：その思想と社会的背景	アーノルド・S・M・ヒーラー著／諸岡和房訳	日本放送出版協会	1972
	現代家庭教育概論	日高幸男編	同文書院	1973
	日本の親・日本の家庭	山村賢明著	金子書房	1983
	文化と放送の役割	新堀通也、斉藤清三、岡東壽隆編著	第一法規出版	1982
	明日への教育：教育改革への発想と提言	蛭谷米司編	みずうみ書房	1984
	日本の教育課題：その地球的究明	班目文雄著	第一法規出版	1981
	日本の教育政策	OECD 教育調査団編著／深代惇郎訳	朝日新聞社	1972
	社会教育随想	金田智成著		1981
	留岡幸助君古稀記念集	[留岡幸助著]／牧野虎次編	留岡幸助君古稀記念事務所	1933
	日本人の履歴書	唐沢富太郎著	講談社	1961
	生活のなかの統計	足利末男著	中央公論社	1973
	労働・余暇と教育	倉内史郎編著	第一法規出版	1975
	企業における中高年齢者問題の展望		全日本能率連盟人間能力開発センター	1975
2. 比較教育学	比較教育学：その目的と方法	P. E. ジョーンズ著／村山英雄、玉城嗣久、佐々木寿紀訳	黎明書房	1975
	比較教育学	F・シュナイダー著／沖原豊訳	御茶の水書房	1965
	比較教育学	F・ヒルカー著／河野重男、森隆夫訳	福村出版	1966
	比較教育学方法論	B. ホームズ著／岩橋文吉、権藤与志夫訳	帝国地方行政学会	1970
	比較教育学研究	池田進著	福村出版	1969
	比較教育制度論	森隆夫著	福村出版	1968
	比較教育研究法	G. Z. F. ベレデイ著／岡津守彦訳	福村出版	1968

世界の学校教育：その比較研究	エドモンドJ. キング著 ／池田進、沖原豊監訳	葵書房	1971
日本の教育 ドイツの教育	西尾幹二著	新潮社	1982
日本の内と外	加藤周一著	文藝春秋	1969
日本の教育地図(全3巻)	新堀通也編	帝国地方行政学会 (ぎょうせい)	1973- 1980
「甘え」の構造	土居健郎著	弘文堂	1971- 2001
海外大学教育総合調査 団報告書	民主教育協会 [編]	民主教育協会	1964
海外教育研究入門 [日 本国際交流センターシ リーズ]	江溯一公著	サイマル出版会	1974
文化と国土設計－東西 文化比較	日本文化会議編	PHP 研究所	1978
家庭と学校の協力：先 進八カ国・悩みの比較	クラウス・シュライ ヒャー編著／村田昇訳	サイマル出版会	1981
対話と断絶：アメリカ 知識人と現代アジア	小林弘二著	筑摩書房	1981
現代韓国教育研究	馬越徹著	高麗書林	1981
日米文化交流の百年： 明治百年記念論集	東京アメリカ文化セン ター [編]	アメリカ大使館広報文 化局出版部	1968
比較教育学 (<i>Comparative Education</i>)	Philip G. Altbach, Robert F. Arnove, Gail P. Kelly, editors	Macmillan	1982
比較教育方法論 (Meeting of international experts, <i>Relevant Methods in Comparative Education</i>)	edited by Reginald Edwards, Brian Holmes and John Van de Graaff	UNESCO Institute for Education	1973
比較教育の歴史と方法 (<i>History & Methodology on Comparative Studies in Education</i>)	compiled for the use of graduate students by J. Roby Kidd and Clif Bennett	Dept. of Adult Education, the Ontario Institute for Studies in Education	1971
社会の発展と比較 (<i>Societies: evolutionary and comparative perspectives</i>)	Talcott Parsons	Prentice-Hall	1966
48州の学校制度 (<i>Forty-eight State School Systems</i>)		Council of State Government	1949
教育制度の分類 (全6巻) (<i>Classification of Educational Systems in OECD Member Countries</i>)		Organisation for Economic Co-operation and Development (OECD)	1972- 1975

3. 沖縄教育	沖縄県史(第4巻、教育)	琉球政府編	沖縄県庁	1965-1977
	沖縄県史(第18巻・新聞集成・教育)	琉球政府編	沖縄県庁	1965-1977
	沖縄の教育	沖原豊著	第一法規出版	1972
	沖縄教育論：祖国復帰と教育問題	上沼八郎著	南方同胞援護会	1966
	戦後沖縄教育小史：教育民立法成立の過程	上沼八郎著	南方同胞援護会	1962
	沖縄教育：沖縄教育にのぞむこと	沖縄教職員会編	沖縄教職員会	1965
	沖縄の本土復帰と教育	広島大学沖縄教育研究会編	葵書房	1971
	戦後20年・教育の空白：本土と沖縄の比較	福地昶昭著	沖縄教職員会	1965
	沖縄教育の実態		沖縄教職員会	1966
	写真で見る沖縄教育の実態		沖縄教職員会	1965
	琉球育英史	阿波根朝松編	琉球育英会	1965
	本土の各大学に在籍する沖縄学生調査書	琉球育英会東京事務所編	琉球育英会東京事務所	1962
	南方同胞援護会事業のあらまし		南方同胞援護会	1971
	沖縄一千年史	眞境名安興、島倉龍治著	沖縄新民報社	1923
	通俗琉球史：東宮殿下御台臨記念	許田星村著	小沢書店	1922
	沖縄歴史：伝説補遺	島袋源一郎著	沖縄書籍	1952
	沖縄考	伊波普猷著	創元社	1942
	沖縄の話	吉田嗣延著	アルプス	1963
	薩摩と琉球	横山健堂著	中央書院	1914
	薩南・琉球の島々：南方文化の探究	河村只雄著	創元社	1942
	南方文化の探究	河村只雄著	創元社	1939
	日本南方文化発展史：沖縄海洋文化発展史	安里延著	三省堂	1941
	琉球見聞録	喜舎場朝賢著	東江遺著刊行会	1952
	沖縄文化叢説	柳田國男編	中央公論社	1947
	琉球小話：詩の国、夢の国	稻垣國三郎著	盛運堂	1934
	琉球：建築文化	伊東忠太著	東峰書房	1942
	沖縄案内	島袋源一郎著	沖縄図書	1932
	沖縄概観・1964年	琉球政府計画局経済企画課編	琉球政府計画局	1964

沖縄概観資料、1965年版	琉球政府計画局経済企画課編	琉球政府計画局	1964
基地沖縄：返還のためのレポート	琉球新報社編	サイマル出版会	1968
基地沖縄の全貌	原水爆禁止沖縄県協議会編	原水爆禁止沖縄県協議会	1966
日本領土の話		南方同胞援護会	1965
沖縄経済の現状・1963年度	琉球政府計画局編	琉球政府企画局	1963
那覇市概観・1952年版		那覇市／琉球文教図書	1952
沖縄商工名鑑・1957年版		沖縄興信所	1953
琉球紳士録・1965年版		沖縄興信所	1962-1965

2007年度

研究員の業績および特別研究の経過報告

(2007年4月～2008年3月)

▶著書・報告書

共著 2007年12月 友田泰正・河合優年・安東由則 編『武庫川女子大学「短期大学に関する調査」結果報告書〈企業編・高校編〉』武庫川女子大学教育研究所、全158頁と資料

▶学会活動

日本教育社会学会 (評議員、2005-現在)、日本社会教育学会、日本教育学会

▶社会的活動

大阪府教育委員、尼崎市社会教育委員

▶著書

共著 2007年12月『新編 生徒指導読本 (No.178)』第3章-10「生徒指導と学校の危機管理」教育開発研究所 pp.161-164

▶研究論文

単著 2007年4月「学校の危機にどのように対応するか」月刊生徒指導 2007年4月号 学事出版 pp.6-9

単著 2008年1月「実践力を高める学校カウンセリング」月刊生徒指導 2008年1月号 学事出版 pp.62-67

単著 2008年1月「実践力を高める学校カウンセリング」月刊学校教育相談 2008年1月号 ほんの森出版 pp.62-67

共著 2007年12月「教師カウンセラーによる不登校中3受験生への時間制限訪問面接事例」カウンセリング研究 第40巻 第4号 pp.316-323

共著 2008年2月「教職員とスクールカウンセラーの相互理解に関する研究—教師カウンセラー事例を通して—」兵庫教育大学研究紀要 第32巻 pp.1-13

▶学会活動

学会発表

共同 2007年11月 学会シンポジウム:「学校教育相談の方向性と担い手としての教師カウンセラー」日本カウンセリング学会第40回大会 (琉球大学)

▶教育活動

大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター運営委員

日本カウンセリング学会常任理事

産業カウンセラー資格認定評価専門委員 (日本産業カウンセリング協会)

独立行政法人教員研修センター講師「管理職・中堅教員研修講座」(茨城県つくば市)

兵庫県立こどもの館講師「家庭教育相談員養成講座」

姫路市立生涯学習大学講師

その他

▶社会活動

兵庫県立神出学園運営協議会委員

河合 優年 (かわい まさとし) 教授

▶著書

共編著 2007年4月『感情の心理学』放送大学教育振興会 pp.22-31, 47-56, 154-176, 190-201.

共著 2007年4月『調査実験 自分でできる心理学』ナカニシヤ出版 pp.40-43.

共著 2008年『Human Development in the Twenty-First Century — Visionary Ideas from Systems Scientists —』Cambridge University Press. pp.188-199.

▶研究論文

単著 2007年8月「2006年国際ワークショップ・公開講演会報告」『発達研究』Vol.21. pp.203-218.

共著 2008年3月「Music and the Psychology of Emotion : Examining the Cognitive and Perceptual Features of Music/Emotion Acquisition」『臨床教育学研究』第14巻、pp.1-18.

▶その他の研究業績

講演 単独 2007年4月『The Japan Child Study: Pilot Cohort Studies Based on Behavioral and Brain Science』ユタ大学心理学部 招待講演

講演 単独 2007年5月『乳幼児の発達と環境』山梨小児保健協会 母子保健研修会 記念講演
パネリスト (道場洋三) 2007年8月『語ろう、いまどき家族』神戸市教育委員会・神戸市PTA
協議会 松方ホール

パネリスト (品川区教育長若月秀夫・奈良女子大付属勝山元照) 2007年11月『子どもの成長から見た一貫教育—なぜ一貫校なのか。その成り立ちと現状について』読売新聞「読売・学力シンポジウム 教育の「今」がわかる 一貫教育を考える 大阪商工会議所国際会議ホール

講師 共同 (石川道子) 2007年12月『パパママ講座～子どもの個性と育て方～』西宮市役所東館8階大ホール

講演 共同 (同志社大学余語真夫・大阪大学大坊郁夫) 2007年12月『人を結びつけるコミュニケーション～感情と文化を考える～』日本心理学会公開シンポジウム 同志社大学今出川キャンパス 明德館1番教室

▶学会活動

[ポスター発表]

共同 2007年8月『幼稚園における食育のあり方に関する研究：Ⅱ』日本教育心理学会第49回
総会 ポスター発表

共同 2007年9月『多変量データに基づいて類型化された4ヵ月齢児の行動パターンと母親の育児ストレス—Still-Face 場面の行動分析から—』日本心理学会第71回大会 ポスター発表

共同 2007年9月『9か月児の母親のレジリエンスが育児ストレスに与える影響の検討』日本応用心理学会第74回大会 ポスター発表

共同 2007年11月『Behavioral Characteristics of HFPDD Children during a Game』Society for Neuroscience, 2007 Annual Meeting @ San Diego ポスター発表

共同 2007年11月『「すくすくコホート三重」における乳幼児発達観察のまとめ』第61回国立病院総合医学会 ポスター発表

共同 2008年3月『4ヶ月齢の母子相互作用は9ヶ月齢の何を予測するか』日本発達心理学会第19回大会 ポスター発表

共同 2008年3月『両親の育児方針の一致が子どもの発達に与える影響について—主観的な一致感と4ヶ月・9ヶ月時のKIDS得点との関連から—』日本発達心理学会第19回大会第19回大会 ポスター発表

[ラウンドテーブル]

口頭発表 2008年3月『縦断研究の発達心理学的意味再考』日本発達心理学会第19回大会ラウンドテーブル

▶独立行政法人科学技術振興機構（JST）

計画型研究開発「日本における子どもの認知・行動発達に影響を与える要因の解明」（研究開発期間 平成16年～平成20年）発達心理グループ（グループリーダー）

▶社会的活動

「県立芦屋国際中等教育学校教科用図書選定委員会」委員 県立芦屋国際中等教育学校

「特色ある神戸の教育推進アクティブプラン検討会」委員 神戸市教育委員会

▶2007年度特別研究の経過報告

テーマ①幼児期の衝動性に関する研究

本研究は、幼児期の社会性に関する問題行動の中でも衝動的行動を早期に検出するためのプログラム開発が目的であった。ノートパソコンとタッチパネルを用いて、3歳児からの評価が可能となった。本研究結果は、現在進行中の三重（津市）と兵庫県（西宮市）におけるコホート研究において、2009年度観察実施時点で適用されることになっている。

テーマ②幼児期のストレス反応に関する研究

研究結果は共同研究者である、文学部心理・社会福祉学科の小花和により、日本心理学会などで発表されている。これらは保育園における測定であり、学術論文投稿時に比較条件として家庭における測定を求められたため、現在子ども達の家での計測に入っている。

テーマ③西宮市における乳幼児発達研究

経費の多くは、子ども発達科学研究センターにおけるデータ解析および、調査票の印刷費として用いられている。

テーマ④デジタル映像の研究・教育処理支援システムの構築

2007年度に購入し、ソフトの強化をおこなったフォトロン社製のパワーインデックスを用いた画像記録および配信システムの構築はほぼ完了し、イントラネットでの作動確認が終了している。授業や資料の一部を授業欠席者に対して開放し、遠隔地教育を試験的に開始することが可能となった。

安東 由則 (あんど う よし の り) 准教授

▶著書・報告書

共著 2007年12月 友田泰正・河合優年・安東由則 編『武庫川女子大学「短期大学に関する調査」結果報告書〈企業編・高校編〉』武庫川女子大学教育研究所、全158頁と資料

▶研究論文

共著 2008年3月 安東由則・鎮朋子「女子大学の自己像：大学案内パンフレットと自己点検・評価報告書の分析から」『研究レポート』（武庫川女子大学教育研究所）38号、121-156頁

▶学会活動

日本教育社会学会、日本高等教育学会、日本子ども社会学会、他

▶社会的活動

芦屋市社会教育委員

▶2007年度特別研究の経過報告

①テーマ1：「短大に関する調査研究」

・2007年度の研究経過：

学院からの調査依頼を受け、本学短期大学に関する調査を教育研究所で行った。

学生調査、高校生調査、就職先企業調査の3つを柱とする調査研究である。11月までに調査結果を報告するということがあったため、高校生調査と就職先企業調査については進研アドへの委託調査とし、アンケート作成は主として教育研究所で行い、発送・回収、まとめについては進研アドが行った。学生調査については学内の協力を得て、教育研究所で全てを行った。

・特別研究に関する業績：

調査結果は、上記の報告書としてまとめた。

②テーマ2：「女子大学の現状分析」

・2007年度の研究経過：

前年まで行った「女子大学の存立意義に関する調査研究」で得た資料・データを整理し、新たな資料を収集につとめた。さらに既存資料を分析し、論文としてまとめた。

・特別研究に関する業績：

研究成果は、上記研究論文「女子大学の自己像」として教育研究所『研究レポート』（38号）に掲載した。

福井 雅英（ふくい まさひで） 准教授

▶著書

単著 2007年「研究報告集・地域民主主義と教育」『子ども父母の生活の場としての地域の再生と学校・教育課程』滋賀県立大学地域教育実践史研究会（pp.1-49）

（共著 2008年4月「子どもの生活世界と「いじめ」問題」『なくなる「いじめ」を考える』）
国土社（pp.6-16）

▶論文

単著 「女子大生と考える〈思春期の生活世界〉その2」『臨床教育学研究』第14号 2008年3月（pp.19-30）

単著 「いじめ問題と子どもの生活世界」『教育』2007年7月号（pp.4-11）

単著 「日本の教師の底深い教育力—発達援助者としての教師」『クレスコ』2007年8月号（pp.16-19）

単著 シリーズ「学校の日常の中の教師の専門性」『子どもと教育』2007年4月号（pp.88-91）、6月号（pp.56-59）、9月号（pp.40-43）、11月号（pp.46-49）、2008年1月号（pp.74-77）、3月号（pp.36-39）

▶学会活動

所属学会：日本教師教育学会、日本特別ニーズ教育学会、全国社会科教育学会、日本教育学会
学会活動：日本教育学会特別課題研究「教師教育の再編動向と教育学の課題」に参加

▶社会的活動

西宮市青少年問題協議会副会長

西宮市立浜甲子園中学校校内研究会講師、浜甲子園中学校 PTA 研修会講師

西宮市立鳴尾小学校校内研究会講師

滋賀県日野町立桜谷小学校校内研究会講師

兵庫県高等学校教員10年目経験者研修会講師

▶その他の研究活動

科研費共同研究「臨床教育学の展開と教師教育の改革」に参加

神戸大学国際文化学部（生徒指導論）講師、滋賀県立大学（社会科教育法）講師

▶2007年度特別研究の経過報告

・テーマ「戦後改革期における教育実践の臨床教育学的研究」

・研究経過（1）北海道松山地域の戦前からの生活綴方文集の資料調査

（2）近年の「上ノ国町地域教育計画」（上ノ国町教育委員会）の策定にかかわる調査

武庫川女子大学教育研究所研究レポート 掲載論文総目次（過去10号分）

第29号～第38号

◇第29号（2003年2月）

〈特集〉夜間大学院の自己評価

質問紙調査と面接から得られた社会人大学院の実態

—修了生と在校生を対象として—

……………（祐宗省三・末吉ちあき・鎮 朋子・平美也子）…………… 1 - 106

中高一貫教育の現状と展望（Ⅰ）……………（河合優年）…………… 107 - 124

大学の学期区分としてのセメスター制度とコーター制度について（Ⅰ）

……………（祐宗省三）…………… 125 - 130

◇第30号（2003年10月）

〈特集〉中高一貫教育

中高一貫教育の現状と展望（Ⅱ）……………（河合優年）…………… 1 - 22

私立大学における入試倍率の規定要因分析（Ⅰ）

—1990年～1995年の比較分析—……………（安東由則）…………… 23 - 45

大学教育活動における危機管理の研究

—危機管理構築のためのマニュアル作成—

……………（野老 稔・相澤 徹・橋爪静夫・田中繁宏・伊達萬里子・

會田 宏・小柳好生・中村真理子）…………… 47 - 65

授業「スキー実習」に関する研究Ⅴ

—スキー実習における危機管理体制の確立に関する研究：その1 失敗情報収集の試み—

……………（會田 宏・野老 稔・相澤 徹・中西 匠）…………… 67 - 83

◇第31号（2004年3月）

〈特集〉大学における教職課程

高等教育カリキュラム開発研究への教育学的アプローチ

—大学教職諸課程の構造的連結化論の探究—……………（前原健三）…………… 1 - 31

教職課程へ「心の教育」を取り入れる意義とその検討

—「生徒・進路指導」と「教育相談」をめぐって— …………… (西井克泰) ……	33 - 48
私立大学における入試倍率の規定要因分析 (Ⅱ)	
—1990、1995、2000年の比較分析— …………… (安東由則) ……	49 - 65
現代心理学研究におけるセールス・ポイントの推移 (その1)	
—自分史のアカデミック面に代えて— …………… (祐宗省三) ……	67 - 83

◇第32号 (2004年7月)

〈特集〉教育研究所創設20周年記念号

最近4半世紀における日本教育の動向 …………… (新堀通也) ……	1 - 100
私立大学における入試倍率の規定要因 (Ⅲ)	
—1990、1995、2000年度入試の地域比較— …………… (安東由則) ……	101 - 128

◇第33号 (2005年3月)

〈特集〉新堀通也先生退職記念号

わが研究の軌跡

—ある教育研究者の「自分史」— …………… (新堀通也) ……	1 - 71
現代心理学研究におけるセールス・ポイントの推移 (その2)	
—自分史のアカデミック面に代えて— …………… (祐宗省三) ……	73 - 95
「生徒・進路指導」における体験的学習の展開	
—教職課程科目へ「心の教育」を取り入れた授業の実際— …… (西井克泰) ……	97 - 114
GPAの効果的運用に関する検討 (その1)	
—アメリカにおけるGPAの現状— …………… (出野 務・安達一美) ……	115 - 128
“理科嫌い”であった学生が受けた理科授業の印象	
—女子大学学生と共学大学学生の比較— …………… (出野 務) ……	129 - 137
日本の女子大学に関する研究 (Ⅰ)	
—戦後における女子大学の創設と変化の概観— …………… (安東由則) ……	139 - 164

◇第34号 (2005年11月)

〈特集〉GPAの運用検討

GPAの効果的運用に関する検討 (その2)	
—わが国の大学におけるGPA活用の事例—	
…………… (出野 務・安達一美・稲積包則) ……	1 - 14
GPAの効果的運用に関する検討 (その3)	
—武庫川女子大学・同短期大学部における成績評価としてのGPAの実態—	

..... (出野 務・安達一美・稲積包則)	15 - 25
現代心理学研究におけるセールス・ポイントの推移 (その3)	
—自分史のアカデミック面に代えて—	(祐宗省三) 27 - 38
女子大学および女子学生に関するデータと解説	
..... (安東由則・藤村真理子・大竹綾子)	39 - 110
◇第35号 (2006年3月)	
〈特集〉女子大学の現状と課題	
女子大学の現状と今後の課題	
—河合塾・滝紀子先生を招いての研究会記録—	(友田泰正・安東由則) 1 - 38
女子大学学生寮に関する研究 (I)	(小林 剛) 39 - 71
戦後における女子大学・女子学生関連文献目録集	
..... (安東由則・鎮 朋子・末吉ちあき)	73 - 111
◇第36号 (2006年11月)	
〈特集〉新堀通也先生退職記念最終講義／女子大学研究	
教育研究の60年	
—分析図表の提唱—	(新堀通也) 1 - 35
「女子大学」に関する女子学生の意見調査	
—2005年度武庫川女子大学4年次生アンケートから—	
..... (安東由則・藤村真理子・難波満里子)	37 - 84
35年間における私立女子大学の偏差値推移	
—文学系学部と家政系学部の事例から—	(安東由則・末吉ちあき) 85 - 116
日本の女子大学に関する研究 (II)	
—クラスター分析による分類の試み—	(安東由則) 117 - 130
GPA の効果的運用に関する検討 (その4)	
—GPA による成績上位者と下位者の実態—	
..... (出野 務・安達一美・稲積包則)	131 - 139
◇第37号 (2007年3月)	
〈特集〉女子大学研究	
アメリカにおける女子大学の現状と津田塾大学の取り組み	
..... (高橋裕子) (友田泰正・安東由則編)	1 - 21

女子大学に個性を —生き残りへの挑戦— …………… (内田伸子) (友田泰正・安東由則編) ……	23- 39
女子大学インタビュー安東由則 (編) (藤女子大学・昭和女子大学・津田塾大学・東京女子大学・広島女学院大学) ……	41- 154
武庫川女子大学に関する保護者への意見調査 —2006年度4年次生保護者アンケートから— …………… (安東由則・藤村真理子・難波満里子) ……	155- 196
女子大学学生寮に関する研究 (Ⅱ) …………… (小林 剛) ……	197- 211
ターミナルケアから学ぶ生と死 —ユーモアのすすめ— …………… (アルフォンス・デーケン) ……	213- 232
◇第38号 (2008年3月)	
〈特集〉教育の潮流／女子大学研究	
教育の潮流観測	
—最終講義資料— …………… (新堀通也) ……	1- 119
女子大学の自己像	
—大学案内パンフレットと自己点検・評価報告書の分析から— …………… (安東由則・鎮 朋子) ……	121- 156
女子大学学生寮に関する研究 (Ⅲ)	
—在寮生の保護者・退寮生・在寮経験をもつ卒業生への意識調査を中心に— …………… (小林 剛) ……	157- 183
GPA の効果的運用に関する検討 (その5)	
—1年次から2年次へのGPAの変化— …………… (出 野務・安達一美・稲積包則) ……	185- 194

編 集	武庫川女子大学教育研究所
編集委員	友田 泰正 ・ 安東 由則 藤村真理子 ・ 末吉ちあき
発 行 者	学校法人 武庫川学院 〒663-8558 兵庫県西宮市池開町 6 番46号 TEL. 0798-47-1212
発 行 日	2009年 3 月31日
印 刷	大和出版印刷株式会社